龍の逆鱗

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍の逆鱗

【Ｎコード】
Ｎ０６０６Ｙ

【作者名】
銀狼

【あらすじ】
小さな島国『大和』で忍となるために修行を積んできた少年、東龍斗。使いを頼まれて船旅に出たが、海上で嵐に遭ってしまう。気付いたとき、龍斗の前に現れたのは死んだと思われていた人物。辿り着いたのは、祖国の常識では計り知れない「異世界」だった。その先に、一体どんな運命が待っているのか……

第1話：四十九日明けて

季節は夏、山の木々は新緑に染まり、空には雲一つない青空が広がっている。東龍斗（あずまりゅうと）は一人山道を歩きながら、日光を透き通す木の葉などを何の気なしに眺めていた。島中を歩き始めたのは約二ヶ月前だが、その時とはすっかり景色が変わっている。時折聞こえる野鳥の声に、あの鳴き声はなんという鳥だったかと思いを馳せる。だが今回はその思考を遮られた。

「よう龍斗」

「……何だ、遠矢か」

立ち止まった龍斗の前には一人の少年がいた。齢十五、龍斗と同じ年に生まれ、同じ道を志してきた友人の一人、宮原遠矢（みやはらとおや）。突然声を掛けられたことで素早く身構えた龍斗だったが、黒髪に茶色い目の相手を認識すると警戒を解いた。それを見た遠矢は苦笑した。

「ははは、相変わらずだなお前は。家もそうだけど、生粋、ていうのかな」

「当たり前だ。いつ何が敵になるか分からんからな。とはいえ二ヶ月近くまともに動いてなかったら流石に駄目だ。気付くのが遅れたし、気が散ってた」

ため息交じりに首を横に振る龍斗。それを見た遠矢も一つ息を吐いた。嘆息ではない。寧（むし）ろ安堵した様子である。

「安心した。龍誠殿（りょうせい）が亡くなった後大分落ち込んでたからなぁ。心配して損したぜ」

「そりゃどうも。まあ四十九日も終わったし、今日からまた修行を再開するつもりだ」

「……大丈夫か、本当に？」

心なしか暗い声色の返答に、遠矢が念を押す。

「大丈夫だよ、なんのための四十九日だ。じゃな、俺行くわ」

龍斗は笑いながらそう言うと山道を降りていった。後に残された

遠矢はその後ろ姿を見ながら呟く。
「……こっちだって忍を目指してる身だ。目が笑ってねぇことくらい分かるってんだ馬鹿野郎」
龍斗の目を思い出しながら、それでも彼を追いかけることなく山道を進んでいった。

龍斗の家は忍としてそれなりに優秀な家であった。祖父の龍誠、父の遼一（りょういち）もまた忍として働いていた。物心ついた時から忍に憧れ、忍の道を志すのは自然なことだった。
山を下りた後、自分の家の前を通り過ぎて大通りに出た龍斗。町の人々はいつものように商売をしていた。お客様は神様だ、という精神で誰に対しても丁寧に、円滑に会話を交わしている。
（けどこれも、一度豹変したことがあったな）
龍斗は思い出した。街行く人々の目は黒か茶色。だが龍斗はそのどちらでもない。一見すると黒に見えるのだが、近くでよく見るとそれは青みがかった深い色、藍色であることが分かる。それは別に問題ではなかった。だが彼の母親の存在が問題だったのだ。この街にとっては、母が異質だったのだ。
異国から流れ着いたという母はこの国にはない金髪、青い目を持っていた。その後家族全員で村八分を受けた。人は異質を排除しようとする。それが分からなかった龍斗はただ悔しさに涙を滲ませた。父と祖父の口論が記憶に残っている。真剣を持っての死闘が繰り広げられたことも覚えている。時間が経って母という人間が理解されていくと村八分もなくなった。

龍斗はいつの間にか左手で片目を押さえていることに気付いた。
軽く首を振って歩き続け、目的地に到達する。
そこは修行場と呼ばれる場所で、何もない広場で何人もの人が手

合せを行っているのが見える。それを横目に、龍斗は一つの小屋に辿り着いた。玄関先に立っていた人に名を名乗る。

「東龍斗です」

「おお、待っとったぞ。この度はその――」

「もういいですよ、その挨拶。聞き飽きましたから」

「……そうか。なら早速じゃが一つ頼まれてくれんか」

龍斗と話していた人物、藤堂源二（とうどうげんじ）は一つの手紙を取り出した。見た目はただの杖をついた老人だが、かつては忍の最高位にいたこともあるという人物である。師範として若き忍を育てる今もその力は衰えていない。杖もただの杖ではない。中には鋭利な刃が隠されているのだ。性格もそれに似たようなもので、穏やかで気さくな所もあるが、忍という道に関しては一切妥協を許さない。自然災害など致し方ない障害に阻まれた時も情を捨てて忍を辞めろと切り捨てる、厳格な性格である。そのふるいにかけられて忍になることを諦めた人間が多くいることを龍斗は認識していた。

「この手紙を御蔵島の時田さんとこに届けてほしい」

「分かりました。出来るだけ早く届けるようにします」

「ほっほっほ、まあそんな急ぎでもない。他所の島の様子でもゆっくり見てくるがいいさ。それが復帰第一号の修業じゃ」

源二はそう言って小屋へと消えていった。龍斗は首をかしげた。手紙の裏を見てみたり、日にすかしたりしてみるが、特に変わったところはない。

結論が出たのは龍斗が自分の家に帰ってからだった。家にはもう誰もいない。その事実がきっかけだった。

（そうか、この島を出て、他所を見て気を晴らせと。藤堂さんらしい不器用なやり方だ）

口角の一端を上げながら龍斗は家に入った。

第2話：船出の時

翌朝、龍斗は一人旅支度を整えて家を出た。いつもの格好に、父の形見である太刀、祖父の形見である脇差を身につけて誰もいない大通りを闊歩する。今はまだ日の出前、よほどのことがない限り人は起きていることはない。左肩に担ぐ麻袋には最低限生活に必要なものを入れた。母が作ったこの袋は二重構造になっており、袋の中にさらに小さな袋が付けられていた。大きさがちょうどよかったので手紙はそこに入れてある。路銀――旅に必要なお金のことだが――有り金全てを持っていくことにした。何時何でどれだけ必要になるか分からないし、家に置いておいても得はない。寧ろ泥棒に盗られる心配がある。知らない間に盗られてました、より自分で持ってて賊に狙われる方がまだ救いがある。

（それに金は無くて困ることはあっても有って困ることは……あるな、やっぱ）

歩く度に音を立てる腰辺りに目をやる龍斗。そこにつけられた巾着袋には金、銀、銅で作られた貨幣が入っている。ここ玲角島（れいかくとう）、これから向かう御蔵島（みくらじま）、その間にある徳間島（とくまとう）以下数個の島からなる国『大和』で流通しているお金である。金が最高価値に定められているために物価が安定しやすいのだと誰かから聞いたことがある。それはいいのだが、問題が一つあった。貨幣とはいえ金属は金属。持つ金額が増えれば増えるほど荷物が重くなってしまうのだ。

（まあいいか、ほんとに盗られるよりはましなんだから）

道は大通りから横道にそれ、森の中へと続いていく。草木が生えていないその道を進んでいくうちに、磯の香りが強くなってきた。やがて森を抜けると、そこには白い砂浜と、赤く染まり始めた朝焼けの空、そしてその光を反射し白い波を立てる大海原が画面いっぱ

いに広がった。龍斗はそこから左に移動していった。やがて大きな小屋と桟橋が見えてきた。龍斗は小屋の前に立ち、扉を数回叩いた。海に出るにはここの貸船屋で舟を借りる必要があるのだ。

「はいよ……ああ、龍斗君かい」

眠い目をこすりながら戸を開けたのはご主人。巾着から銀貨二枚を取り出し男に言う。

「御蔵島まで行くから、出してもらえますか」

「へぇ、そりゃまた遠出だねぇ。なら帆かけの方が良い……でも悪いな、金一、銀一になっちまうぜ」

「んー……まあいいですよ」

龍斗は巾着の中身を探り、金貨を探し出して主人に渡す。

「やっぱり舟は高いですね」

「まあな、他所の島に行くにはこれか自力で泳ぐかしないと。それと原因はやっぱり野分と鮫だな。あれに出くわした舟がぶっ壊れたり、かなりの損傷受けたりで、もう修理代が馬鹿にならん」

神妙に頷く龍斗。実際彼が覚えているだけでもかなりの数の舟がその被害にやられている。一部が割れて沈没しかけていた時もある。見送った船が木片と化して帰ってきた時もある。被害にあうのは舟だけではない。それに乗っていた人間も、なんとか無事に帰ってくる者、波に襲われ溺死した者、舟ごと行方不明になったままの者もいる。その中には龍斗の親族や友人も含まれている。そして彼は今後そうなる可能性のある人物である。決して他人事ではないのだ。

桟橋に出て待っていると主人が舟を出してきた。中央には一本の柱が立っており、折りたたんだ白い布がその下にあった。龍斗は主人と共に舟を後ろから押していき、海に浮かべて乗り込んだ。

「風があったら帆を張っとけ。艪や櫂で行くより楽だからな。何かあったら近くの船屋に寄れ。舟ってのは組合で共有してるもんだからどこのどの舟でも一緒だ」

わかりました、と返事をして舟の後ろにある艪を漕ぎ始める龍斗。手を振って見送ろうとした主人だったが、手を挙げようとした瞬間

あることに気付いて龍斗に叫ぶ。
「おい！！」
その声に反応した龍斗が振り返ると、何か光るものが飛んでくるところだった。思わず掴みとったそのを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなった。投げられたのは自分が支払った銀貨。何故これを？　その疑問を口にする前に、投げた本人が声を張り上げた。
「進水式代わりだ！！　生きて帰ってこいよ！！　良い旅を！！」
思わず笑みを浮かべた龍斗。大きく手を振っている主人に手を振り返し、龍斗はまた櫓を漕いだ。

いつの間にか空には白い雲が浮かんでいた。龍斗は人差し指を立てて唾をつけ、目線の高さに持っていった。風が当たるとそこだけ冷気を感じる。こうして風向きを把握した龍斗は、次いで進行方向を確認した。出発した玲角島は後ろ、太陽は少し高度を上げたもののまだ東にある。そして前方に小さく見えるは中継地点の徳間島。その島の船屋にこの舟を任せ陸地を移動、反対側の船屋でまた舟を借りる。そしてようやく御蔵島へとたどり着く。払ったお金は御蔵島までの往復にかかる料金である。いちいち支払いをしていってもいいのだが、まとめて支払うと幾らかおまけしてくれる。組合員による証明証を見せればこの方法でも問題はない。その証明証は麻袋の中、手紙と同じ場所に大事にしまってある。
龍斗は帆を張ることにした。航路に対して追い風という絶好の機会を逃すわけにはいかない。白い布が上がると、それまでよりも速い速度で進んでいった。龍斗はふと振り返り玲角島を見た。既にかなりの距離を進んでいたが、まだ島は視認出来た。一つ息を吐くと、心の中で島に語りかけた。
（暫（しばら）く離れる。ま、すぐに戻るさ）
進行方向に間違いがないことを確認して、龍斗は舟に寝転がった。
これが、龍斗が見る最後の故郷の姿であるとは知らずに……

第3話：極楽浄土か奈落の底か

――何処だ、ここは……

龍斗は薄く目を開けた。視界がぼやけてはっきりせず、色しか認識できないでいた。だがその色も白一色しかない、と思った瞬間に黄色い色が現れた。青い点が現れたと思うと、すぐに振り返って何を叫ぶ。

（……ん？）

龍斗はそこで違和感に気付き、数回の瞬きをした。視界がはっきりした瞬間、龍斗は文字通り跳び起きた。その勢いのまま足裏をついて体を起こし大きく跳躍、着地と同時に片膝をついて振り返った。

突然のことに唖然とした様子の男女がそこにいた。藍色の鋭い目が二人を捉え即座に判断する。

（立ってる男は茶色の髪、特に武器は持っていない。座ってる女は口元に手を当てている。髪は金で目は青い……ん？　青眼金髪？）

龍斗が眉を顰めたのと、新たな人間が入ってくるのとはほぼ同時だった。

「目覚ましたって！？」

「ホントに！？」

声の主に目を向けた龍斗は顔を認識した瞬間に驚愕した。普段は滅多に素の表情を見せない龍斗だったが、この時ばかりは違った。

「連、それに、霞……ああ、そういうことか。　で、ここはどっちだ。極楽浄土か、奈落の底か」

一人納得する龍斗の言葉を聞いた二人は顔を見合わせる。その後暫く二人の笑い声が部屋を占めることとなった。

「いや悪かったよ。あんな真剣な顔で言われたらさ」

「目が覚めたら死んだと思われてた人間がいる。死んであの世行き

を考えて何が悪い」
「あーひどーい、あたしを勝手に殺さないでよー」
「大和じゃもう死亡扱いになってるっつーの。行方不明になってから何年経ったと思ってるんだ」
気分が落ち着いた龍斗は今自分が寝かされていた寝台に座り、後から入ってきた二人――烏丸連（からすまれん）と斉藤霞（さいとうかすみ）を相手に話をしていた。二人とも龍斗と同じ国で生まれ育ってきたが、何年も前に行方不明となり、国内では既に死亡したものと看做（みな）されていた。だが今こうして目の前で生きている。夢でないのは、傷む左足が証明していた。
そのことを問うと連が丁寧に教えてくれた。
「龍斗はさ、舟に乗って海を渡ろうとしたんだよね」
「ああ、そうだ」
「で、突然の嵐――野分に遭った」
「ああ、そうだ」
「で、荒れ狂う波に襲われてるうちに気絶してしまい、気が付いたらここに流れ着いていた」
「ああ、そうなるな」
「俺たちも一緒なんだよ。普段なら全く問題なく渡れる航路を進んでいってたのに、突然の野分、訳の分からない海流、進路の間違い、様々な原因を経てここに流れ着いた。そして助けられた」
「あたしもそうだよ、と。はい終了」
左足の包帯を取り換えていた霞が作業を終えて立ち上がった。
「悪い、ありがとな」
「どういたしまして、お兄ちゃん」
礼を言った龍斗だったが、霞の返答を聞いて背筋に寒いものを感じた。
（こ、こいつ……あ、そうか、こいつもあの一派の一員だったか）
霞は悪戯心に満ちた笑顔でこちらを見ている。一方の連からは疑問の念がひしひしと伝わってくる。ちっと鋭く舌打ちしたところで横から白い手が伸びてきた。

「仲がいいのね3人とも。はい、どうぞ」
「あ、有難うございます」
それは最初から部屋にいた金髪青眼の女性だった。白い小さな器を受け取ると、両手から温もりが伝わってくる。湯気を立てている中身を見ると、同じく白い水のようなものが入っている。
「ホットミルクよ。体が温まるわ」
「ほっと……みるく？」
言葉に違和感を感じたが、他の二人は全く気にしていない様子で中身を飲んでいる。龍斗もそれに倣って器を口元に運んだ。
（……美味い）
ほのかな甘みが口に広がり、熱が体の芯を通っていく感覚を味わう龍斗。そして、器の中身の正体にも気づいた。
「これ、牛乳か」
「そう、牛乳に砂糖を入れて温めてあるんだよ。大和にはないよねこういうの」
霞が笑って返してきた。ホットミルクを半分ほど飲んだ後、龍斗はあることに気付いた。左手の人差し指を親指に引っ掛け、手に持った器の端を軽く弾くと、キンという澄んだ音が響いてきた。
「陶磁器の小さな器……これ、『コップ』てやつか？」
「正解よ、よく分かったわね」
渡してくれた女性がそう言った。龍斗は数秒目を閉じた。再び目を開けた時、彼の頭の中では気が付いてから今までに得た情報が整理され始めていた。
（舟による難破、漂流。過去に同じように流された奴らの一部が生きてる。馴染みのない調理、陶磁器製の器コップ。何より……金髪青眼、母の言葉）
「そうか、此処が……母が元いた世界、異国か」
まったく無意識のうちに龍斗の口から結論がこぼれ出た。

だが龍斗には一つ疑問に残ったことがある。連や霞は答えを知っていそうなので率直に聞くことにした。

「ここが異国なら言葉は通じないとかあるんじゃないのか、確か」

うろ覚えの情報の真偽を確認する龍斗。今までの流れから考えて金髪青眼の女性は龍斗から見て異国の人間。そして大和の者と大和の言葉を用いて会話をしている。自分も聞いて受け答えしたのだからこれは紛れもない事実である。だが彼女以外はどうだろうか。もし方言のように言語の違いがあったならどうすればいいのか。そう言ったところを聞いたのだ。

「ああ、それね。龍斗は聞いたことないか？　今の大和に繋がる系譜の国が遥か昔に全ての陸地を支配したっていう話」

「端的に言えば、それは事実でしたって言うことになるわね」

連の話を霞が締めた。連が言ったのは大和に伝わる有名な言い伝えのことだ。全ての陸を支配し、言葉も通貨も文字も、全てを統一したまさに天下一の英雄伝。最初聞いたときは眉唾物だったが、ここにきて何年も過ごしている彼らがそう言うのなら事実だったのだろう。彼らが嘘をつく利点もない。

「まあ文字は大和でも使う漢字ひらがな以外に、カタカナやアルファベットってのがこちら独自の文字としてあるんだけど。あと数字かな、漢数字じゃなくてアラビア数字使うよ」

龍斗は頷いた。幼い頃から異国出身の母によく言われていたことである。

「分かった。意思疎通については問題ないんだな。じゃあ次に……」

第4話：家族の形見、忍の名乗り

「じゃあ次に、俺の荷物は？」
「ああ、そこのテーブルの上にある。ちょい待ってな」
連が椅子から立ち上がり、寝台の横にあった棚のような物の所へ移動する。腰くらいの高さがあるそれの上に麻袋が置いてあった。その台の横には太刀が立てかけてあるのも見える。そう、父の形見として持ってきたあの太刀である。
連が戻ってきた。椅子に座りながら龍斗に袋を渡す。
「はい、これ。一応中身確認して」
龍斗は言葉が終わる前に袋を開け、中身を確認していた。着替えの服、金の入った巾着袋、非常食の兵糧丸、中にあるのは龍斗が入れたものと同じ。極めつけは中にあるもう一つの小さな袋。
「お、この麻袋、ポケット付いてたのか」
どうやらポケットと言うらしい。龍斗はそのポケットから手紙と証明証を取り出した。手紙に書いてある差出人の名前は藤堂源二、証明証にもあの貸船屋の主人の名前が書いてあった。何より、龍斗にとって最も大切なものを見つけることができた。
「ああ、良かった……爺さん、母さん、美夜（みや）」
手に取ったのは形見の品。祖父が持ち歩いていた脇差。妹の美夜が愛用していた簪（かんざし）。母が首に巻いていた細い鎖。金貨のような色で輪になっており、真ん中辺りには貝を象（かたど）った飾りがついている。
「あら、ネックレスなんて持ってるの？」
「ん、どれどれ。おお、本当だ。異国にもあったのかい？」
金髪の女性と茶髪の男性が母の形見を見てそう言った。
「これ、ネックレスっていうんですか？　いや、大和にはこんなものはありませんよ」
「じゃあなんで？」
男性が首を傾げた。存在しないはずのものを何故持っているのか。

当然の疑問である。
「母が持ってたんです。ここからは俺の想像ですが……恐らく母は元々こちら側の人間だった。だから、こっちにしかないものを持っていた。こっちの知識も知っていた。多分俺らとは逆に、こっちから大和へ流されたんだ。で、父さんと結婚して俺が誕生、そんなとこだな。それと連、霞が流された後ずっとこっちで暮らしていた事を踏まえると……」
注目する四人の顔を一瞥し、龍斗はため息をついた。
「やっぱ、大和（むこう）には戻れないんだろうなぁ」
最後の推量に連が言葉を返した。
「多分、それであってると思うよ。実際こっちじゃ金髪青眼の人は多いし。ただ一つだけ訂正。確かにこっちから向こうに帰るのはほぼ無理だけど、向こうからこっちに来るのは案外難しい話じゃない」
「……どういうことだ？」
龍斗の目は連を捉えた。続きの言葉に耳を傾ける。
「あの辺には独特な海流があってね。トリトン海流っていうんだけど、その流れの方向が大和からこっちに向かって大きな渦を巻くように流れているのさ。それに乗って上手く離れられればこっちに辿り着くことができる。但し、あまりに深いところに乗ってしまうと渦から逃れられなくなって結末は沈没しかない。そして流れは一方通行だからこっちから大和方向へは行けない。極稀に別の海流とぶつかって流れが止まるっていう話もあるけど、それが起こるのは何百年に一回とか言われているし、都市伝説みたいなもんだと思ってた。けど」
「その何百年かに一回の海流に乗って、母さんが大和に来たと考えれば辻褄（つじつま）は合う、か。都合も運もあったもんじゃねぇな」
いつ発生するか分からない海流に偶然遭遇し、異国の者を受け入れる父に出会う。奇跡としか言いようがない、と龍斗は思った。
「でも東君、海流に乗ってきちゃったんだよね。きっとご家族も今頃心配して――」

「ばっ、おい！！」
霞の言葉を聞いて慌てて止めに入った連。だが話の肝心な部分は既に言ってしまっている。龍斗は苦笑した。その表情はどことなく陰りが見える。
「いいよ、連。隠したって仕方ない。去年のことだから、お前はまだいたけど、その前にもう霞はいなかったからな。家族は死んだよ。父、母、妹は土砂崩れに巻き込まれて、爺さんも二ヶ月ほど前、老衰で亡くなった」
「あ……ごめん……」
「マジかよ、龍誠殿まで……」
部屋を沈黙が支配した。見知らぬ男女も家族の死という話題で言葉を失っている様子。
「あ、でも、そう、だから俺は大和にはもう未練はない。帰ったところで何にもないしな。むしろこっちに来て良かったかもしれん。心機一転だな」
その笑顔は大和にいた時、宮原遠矢に見せた顔と同じだった。顔から相手の心情を読むという忍の修行を積んでいた霞だけでなく、その修行をしていない連や男女にも龍斗の本心は伝わってしまっている。空元気は部屋の空気をさらに空しくさせるという結果に終わった。

その後暫くして、連、霞は部屋を出ていった。ふと見ると、頭上に見える壁の一部に穴が開いており、そこから茜色の光が部屋の中に差し込んでいた。この家の主であるという二人組もいつの間にか部屋を出ていた。
龍斗は一人寝台の上で仰向けになっていた。だがその目はすぐそこに見える天井を見てはいない。
（何やかんや言っても、俺はこっちの世界のことを知らない。明日からその辺を学んでいくしかないな）

扉を叩く音がした。はい、と返事をすると金髪の女性と茶髪の男性が入ってきた。女性が両手で運んできたものをテーブルに置いた。どうやら食事のようだ。体を起こし、寝台から足を下ろして座る龍斗。

「はいどうぞ。あなたの分の夕食。ちゃんと食べないと回復は遅くなるわよ」

「すみません、色々世話になってしまって」

「はは、構わないよ。困ったときはお互い様、だっけ。そう言うんだろ、ヤマトでは」

男性の方が笑いながら言った。一瞬龍斗は目を見張ったが、すぐ元に戻した。考えてみれば自分が来る前から何人もの大和人が流れ着いていることだろう。言い回しが伝わっていても何ら不思議ではない。

「有難うございます。えっと……」

お礼を言おうとしてはたと気づいた。この二人の存在を認識してからかなり時間が経ったが、一度も名前を聞いていない。そのことに気付いた男性は申し訳ないといった様子で頭を掻いた。

「あ、すまない。あまりに楽しく会話してたもんだから、口をはさめなくてね。僕はトマス・デイビス。トマスが名前で、デイビスが名字ね。年は４２歳だよ」

「私はベラス・デイビス。この人の妻よ。年は……あまり言いたくないけど３４歳。よろしくね」

龍斗は素直に驚いた。見た目だけの判断では龍斗はもっと若いと思っていたからだ。しかし年齢判断は特に重要なことではないし、元より外すことの方が多い。なので今回も龍斗は判断の間違いを気にしなかった。

龍斗は立ち上がり、初めて男女を見た時と同じように片膝をついた。元々左足を立てる癖がついているので、体重を右足にかけると痛みはさほど感じない。正座や立礼も知っているが、足への負担を考えればこっちの方がいい。それにこちらでの礼儀はほとんど知ら

ない。故に自分が一番よく理解している忍の礼儀を選択したのだ。
「東龍斗……いや、リュウト・アズマ、齢十五。以後宜しくお願い申し上げます」

第5話：「異世界」

木製の扉を開け放つと、そこは異世界であった。勿論(もちろん)比喩的表現ではある。龍斗は海を渡っただけで世界を渡ったわけではない。だが目の前に広がる景色は、元いた大和と比較するとあまりにも違いすぎていたのだ。

快晴の空の下、雲を全て大地に引きずり下ろしたかのように街が白い。龍斗は2~3段の階段を下りた。足元を見てみると床も地面が露出せず、何かが敷かれてやはり白くなっている。降りきったところで後ろを振り返る。今しがた龍斗が出てきた建物も例外なく白かった。

そうして建物の壁を見ているとき、龍斗の第六感が何かの到来を知らせた。すかさずその気配の居所を探る。忍として生きるためにはどんな些細な変化でも見落としてはならない、その教えが身に染みているのだ。

（2人、1人は軽く走ってきてるか。多分……）

「霞だろ」

すぐ後ろにまで来た気配に、振り返らないままそう言った。気配の主はそれを聞いて身震いした。

「お、おはよう東君、な、なんで分かったの？」

「お前も忍目指してたんなら分かるだろう、っと」

言いながら振り返った龍斗は、霞が着ている服に驚き言葉を詰まらせた。桜の花のような色の袖が短い上着、足を見ると白い袴のようなものをはいているが、その長さはかなり短く、膝まであるかないかというところ。履物も草履ではない。栗のような色をして、足全体を覆うような作りとなっている。

そうして観察しているうちに、さっき感じた内のもう一つの気配がすぐ傍まで近づいてきた。龍斗はまた姿を確認することなく正体を言い当てる。

「遅かったな連」
「おっ、いや、霞が勝手に走ってったただけだよ。後ろ向いてたから脅かそうってな」
「だと思った。脅かすのなら成功してるぜ、っと……お前らのその格好で」
霞の向こうにいる連に目を向け、またその格好に言葉を詰まらせる。連の格好は霞の色違いとも見える青い半袖の上着、下は二本の筒に足を通す感じの物をはいている。因みに色は黄土をかなり薄くしたような色だった。昨日会った時には全く気付かなかった、というより格好にまで気が回っていなかった。
「ああ、そうか。この上着はシャツ。下にはいているのはズボン」
「あたしがはいてるのはスカートだよ」
聞けばこちらではこの格好が普通なのだという。異国の神秘だ、と龍斗は思う。だが今はそれを学んでいかなければならない。目的地に向かう間、取り敢えず龍斗は根本的なところから聞くことにした。
「そういや昨日散々こっちこっちて言ってたけど、ここって何処なんだ？」
すると連は少し意外そうな顔をして口を開いた。
「小母さんから聞いてないのか。ここはランドレイク大陸って名前だよ。文字通り、大和とは比べ物にならないほど大きい陸なんだ」
「その中で最も東に位置する、つまり大和に一番近いのがここ、『商業都市国家オリジア』だよ」
途中から霞が説明に加わった。龍斗は記憶を辿ってみたが、母から大陸の名前を聞いた覚えは無かった。気を取り直して次の質問に映ることにした。
「やけに白い街だけど、これ建築資材は何だ？　同じものが足元にも敷いてあるし」

「大陸の家は大抵が石造りだよ。木製の家もあるけど、大和にあったような茅葺き、瓦屋根、漆喰とかは無い」
「敷いてあるのも石を加工したものだよ。その町の中で重要な道は大抵こうなってるね。例えば王様の住む城に続く街道とか。あ、ここには王様はいないよ。ここは商人達が統治してるから」
「へぇ、商人がね」
「それもこれもここに経済の大事な拠点があるから……あ、着いたよ。ここ」
三人は石畳の街道の終着地点に来ていた。そこにあったのは他の建物とは比べ物にならない程大きな建物。ただ大きいだけでなく、所々に曲線を描くように石が並べられていたり、壁石の表面が綺麗に磨かれていたりとかなり手の込んだ造りがあり、この街の象徴ともいえる存在感を放っていた。その荘厳さに思わず唖然とした龍斗だったが、入口前の屋根を支える柱に気付いた。
「なあ、あの柱はなんで赤いんだ？」
「ああ、あれは煉瓦っていうの。土を焼き固めて作ったものだよ」
霞の情報によると、石の代わりに煉瓦を使って建てられた家もあるとのこと。その説明の後、霞は入口の上を指さした。龍斗もその方向に目を向ける。
「あれが銀行の印（マーク）。黄色い大きな円に模様、つまり金貨を表しているの。で、その下にアルファベットでＢＡＮＫ（バンク）って書いてある。分かった？」
「なるほど、絵で何の店か分かるのか。中々便利だな」
ここで連が気になったことを口にする。
「そう言えば龍斗、アルファベットの綴り読めるのか？」
「母さんが大陸の人間だったからな。小さい時から読み方と文字くらいは教わってた。読みは自信がないけど……左からブ・ア・ン・ク、でバンクだな。なんとなく分かる」
なら大丈夫だ、と連は笑みを浮かべた。彼は扉の持ち手に手を掛けると、ゆっくりと押して中に入っていく。龍斗、霞もそれに続い

て銀行の中に入った。

第6話：銀行の信用

中の様子を見ると改めてその広さを思い知らされた。壁際には5人が一度に座れるほどの長椅子が所々に置かれている。真ん中には木の台を横に長くしたようなものが3辺を囲い、その内側では異様に同じ格好をした男女が客の応対をしていた。

「空いてるカウンターは……あった。行こう、東君」

霞に腕を引っ張られながらカウンターの一角に立った龍斗。向かいにいた黒い上着の女性が事務的な声で応対した。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか」

無表情で眼鏡の奥から睨むような視線を向けられた龍斗。だが龍斗にはその質問に対する答えを持っていない。お金を預けるという目的は伝えられているものの、具体的に何をすればいいのかまでは聞かされていないのだ。

助け舟を出したのは連だった。

「こいつの口座を新しく作りたい。今までに利用経験はない」

「かしこまりました。少々お待ちください」

どうやらこれが目的らしかった。去り際に、

「後は向こうの言うようにしてね。預金を忘れずに」

と耳打ちしていった。連に向けた視線を受付係に戻すと、ちょうど一枚の紙を出してきたところだった。

「ではまず、こちらの欄にお名前と年齢をお願いします」

龍斗は一本の鳥羽を受け取った。いつの間にか台の上には透明な容器と、金属のような光沢をもつ薄い板が置いてあった。中には黒い墨のようなものが入っている。

（墨と筆、か？）

その前提をもって龍斗は羽の先を液体につけた。垂れないように容器の端で余分を落とし、板に『東龍斗　１５』と書いた。年齢は漢数字で書こうとしたのを寸での所で思い留まった。板を見せると

受付係は文字を確認し、再び龍斗に返した。
「申し訳ありませんが、漢字名の場合はフリガナをお願いします。読み方が特殊な場合などありますので」
納得した龍斗は漢字の上に『アズマ　リュウト』と付け加えた。自分の名字、東と書いて『ヒガシ』ではなく『アズマ』と読ませるのは人名地名だけの特殊な使い方だからだ。
もう一度提出すると、
「アズマ　リュウト様ですね」
と確認が入り、返却されることはなかった。続いて彼女が出してきたのは針山と奇妙な水晶。水晶の中では黒い砂のような粒が、水に流れるように渦巻いている。針山から一本の針を抜き、受付係が言う。
「では、リュウト様の血を提供して頂きますので、手を出して頂けますか」
「血、ですか？」
思わず聞き返してしまった龍斗。彼女は至って平静な声で説明する。
「はい。大陸全土のお金の動きを管理する場所なので、銀行と契約者の間には信用がなければなりません。その信用のために、血液を用いた契約を行います。銀行側は預かったお金を責任を持って管理すること、及び必要の際には融資、即ち銀行のお金をリュウト様にお貸しすることをお約束します。リュウト様にはその代償として、通貨の価値を疑わないこと、銀行を疑わないこと、また融資を受けられた場合は、定められた期限までに借りた金額に加え、その１割に当たる額を利息として支払うことが求められます」
龍斗は左手を出した。失礼します、と断った彼女が人差し指に針を刺す。一瞬の痛みの後に出てきた赤い液体を謎の板と水晶に垂らす。すると、板が血を吸収しているのか赤い円の範囲がみるみるうちに小さくなり、とうとう完全に無くなってしまった。同時に板が変色し、薄く緑がかった色になった。水晶の方は吸収される様子が

顕著だった。黒い粒子が渦巻く中に赤い血の粒子が混ざり合い、一瞬だけ白く光った。その光が消えると、元の黒い渦に戻り、赤は何処にも見当たらなくなった。

「これで契約は完了となります。お疲れ様でした」

指先に包帯を巻いた後、受付係は事務的な声でそう言った。続いて注意事項を述べていく彼女。

「融資を受けた後、一定期間以内にお金の返済と利子の支払いを済ませなかった場合、銀行口座は閉鎖されます。現金取引以外では一切お金を動かすことは出来なくなりますのでご了承ください」

「現金以外で支払できるんですか？」

「はい。基本的にはカード払いが主流となります。これはリュウト様が物を買った場合、銀行に預けられているリュウト様のお金が、相手の銀行口座に移動するというものです。リュウト様から見ると、数字が増減するだけとなりますが、きちんとお金は動いています。但し商人の中には現金取引しか受け付けないという方もいらっしゃいますので、幾らかは現金をお持ちになった方がいいでしょう」

どうやら大陸ではこの金属板――カードを使って支払をするのが主流らしい。感心しながらカードを眺めていると、突然手中にあったはずのカードが消えた。

「……あの、カード消えちゃいましたけど」

「カードはリュウト様の体内に保管されます。支払いなどでカードを出す場合は『マイカード・オープン』と唱えることで出すことが出来ます。逆にしまう場合は『クローズ』です。またこのカードは身分証明証の役割も持っています」

龍斗は試しに「マイカード・オープン」と唱えてみた。広げていた左手の上で光が弾け、先程のカードが出現した。そのことに感心していた龍斗は、次の用件を思い出し、慌てて受付係に告げる。

「預金ってどうするんですか」
「預金ですね。では、今お持ちの硬貨を預けたい分だけこちらにお渡しください」
　龍斗は麻袋の中からお金の入った巾着袋４つを取り出し、自分の腰につけていたものも外してカウンターの上に置く。と、ここで龍斗は説明の一端を思い出す。
「確か現金も幾らかは持ってた方がいいんですよね」
「はい」
　即答だった。それを踏まえた龍斗は巾着の中身を幾らか整理した。それを終えた上で改めてお金を預けた。巾着袋を次々とだす龍斗に驚いていた受付係だったが、声を掛けられるとすぐに元の表情に戻った。流石のプロ根性というべきか。
「では預金金額をお知らせいたしますので、少々お待ちください」
　しばらくして、眼鏡の受付係が戻ってきた。その表情はさっき会った時と違い、強張っているように見える。少々震える声で彼女が言った。
「ええと、リュウト様の預金金額ですが、１０ドルク銅貨７５４６枚、１０００ドルク銀貨６３９枚、１０万ドルク金貨８７枚、合計で……９４１万４４６０ドルク、です」

第7話：銀行帰りの会話

「……にしても１０００万近い財産って凄いね」
「いいなーお金持ちー。ねぇねぇ、１００万くらい頂戴よ」
「誰がやるかよ、自力で稼げ」
銀行を出た龍斗達3人は街の中を散歩していた。百聞は一見に如かず。実際に目で見ながら説明を聞いた方が覚えやすいし、地理的なことも把握できる。更に龍斗は霞、連と会話をする中で大陸の言葉を覚えるようにしていた。元々他人よりも記憶力が良いので、一度さらっと説明されただけでも大分覚えることが出来た。会話が続くうちに話すことが無くなり、今は銀行でのこと、お金のことについてが話題となっていた。
龍斗に金を無心して断られた霞は頬を膨らませていたが、ふとあることに気付いた。
「そういえばさ、東君はなんであんなにお金持ってきてたの？」
「ああ。うちは俺以外全員死んだからな。大半は葬式の時にもらった香典だ。最初は泥棒に盗られるよりかマシだと思って持ってたんだが、舟を出した後に気付いてな。香典返しにお土産買って帰るつもりだった」
再び家族の死に抵触してしまった霞はしゅんとなり、ごめんと呟いた。連はそれを聞いて湧いた疑問をぶつけることにした。確かに軽んじて良い話ではないが、当の本人が乗り越えようとしているのだ。その気持ちを尊重してのことである。
「でも香典にしてもちょっと多すぎじゃないか？」
「一つは罪悪感だろう。2人とも知ってるだろ、うちが一度村八分にされたの。解消されたけどやっぱ申し訳ないって気持ちから多めにしたんじゃないかね。もう一つはよく知らないけど爺さんがお偉いさんに重用されてたことだろう」
「なるほどねぇ」

「ところで俺も疑問に思うことがあるんだが」
お金の話題が続いたことで、すっかり忘れていた疑問を思い出した龍斗。
「ドルクが金の単位なのは分かる。でも銅貨が１０、銀貨が１００、金貨が１０万っていう値段設定は何だ？　今ひとつわからないんだが」
「それはね、大和と違って硬貨自体にお金としての価値が無いからだよ」
霞が答えてくれたのだが、あまりにあっさりしすぎで今一つわからない。同じことを思った連が補足説明する。
「つまり大陸ではあれはただの金属の塊と見て値段を決めているのさ。だから１グラム当たり何ドルクっていう決め方。ただ、元々お金として使うために作られているから一枚一枚価値が違うと意味がない。つまり硬貨はどれも同じ量の金属で作られていることになる。同じ量ということはどれも重さが同じだから、結局貨幣は値段が安定しちゃうんだよね。……で、安定しているからまだ取引にも使えるわけだ」
「ただの金属として、か。もう一つ……これは銀行への信頼に触れちまうけど……あれ大丈夫なのか？　例えばここが他所の国に襲われたりしたらやばい、というか今だって狙ってるとこありそうだな。何せ大陸中の金が集まってるわけだし」
「ははっ、流石は忍、いいとこに気が付くね。それについては本当に大丈夫なんだ。端的に言えば大陸にある全ての国は銀行の融資を受けている、つまりは銀行に借金がある。おまけに国を動かすためのお金のほとんどが銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。もしオリジアに危害を加えようとする国があったら即座に経済制裁が加えられる。お金を一切動かせなくなるから国が機能しなくなるね」
「国が自力で大金を動かすのは大変そうだな……国にとっても利益が無いのか」

「あ、それと銀行の運営とオリジアの統治は商人ギルドがやってるの。ギルドは何処の国にも属さない独立した組織。それにオリジアは念のために全ての国と不可侵条約を結んでる、だから兵力が無くても国がやっていけるんだよね」

この日龍斗は度量衡の単位、店の看板、お金についてのあれこれを学んだ。それに加え、龍斗は新しく服を調達した。龍斗が着ているのは未だ大和から持ってきた着物に袴。大和では当たり前の格好なのだが、大陸には無い服装のため街を歩けば嫌でも目立ってしまう。人の注目を集めることを嫌う龍斗としては一番に避けたいことだった。まだ少し抵抗があるが、連や霞曰く「そのうち慣れる」とのことだった。

太陽が地平線に沈む頃、2人と別れた龍斗はデイビス夫妻の家に戻った。扉を引くと昼間かと思うほどに明るい光と喧騒が龍斗を迎え入れる。デイビス夫妻の家は旅亭を経営していた。昼間は開店休業みたいなものだが、夜になれば食堂は酒場となり、連日酒飲みがわいわいがやがや騒ぎ立てる。そうして酔いつぶれた客に追加料金で寝床を提供したのが旅亭の始まりらしい。やがては最初から宿泊を目的とする客も現れ、今のスタイルが定着していったのだとトマスは語った。龍斗はそうして客に提供する部屋の一つを貸してもらっていた。

食事は基本的に食堂で行う。龍斗は騒ぎの中心を外れるように、端の方のテーブルに座った。

第8話：地図と決意

龍斗がランドレイク大陸に漂流してから1ヶ月が過ぎた。この間龍斗は特に何をするということもなく時間を過ごしていた。否、実際には何をすればいいのか分からなかったと言った方が正しい。霞も連もこのオリジアで仕事を見つけ働いていた。だが龍斗はそれらの職に就きたいとは思わなかった。かといってこのままデイビス夫妻の所で厄介になっているわけにはいかない。なら旅亭で働くか。その選択も龍斗には出来なかった。

何せ最近まで龍斗は忍になることを目標としていた。忍とは影なる者。諜報や暗殺、破壊工作、情報操作を生業とするが故に、その存在は表沙汰には出来ない。龍斗は15歳、既にそういった任務を任せられ、遂行していた。その中には当然の如く暗殺――人を殺めるものも含まれている。

連は龍斗と一緒に基礎体力の鍛錬をした時期がある。だが連は忍になるためにしていたわけでなく、実家の空手道場を継ぐためだった。無論殺人の経験など皆無である。

一方霞は女忍者――俗に言うくノ一になることを目標としていた。龍斗、連と同い年で龍斗と同じ忍の道を進んでいたが、決定的に違うのは3年前に行方不明となったこと。この時点で彼女は11歳。忍の任務が与えられるのは12歳からなので、彼女はまだ忍として動いたことが一度もない。即ち、人を殺めた経験がない。

（そう、俺の手は既に何度も血潮に濡れている。そんな俺が一般人としてのうのうと暮らしていけるはずがない。今更……道は引き返せない）

龍斗は2人が羨ましかった。血の穢れを知らず、自分の道を進んで行けたのだから。

そんなある日、龍斗は街の商店で大陸の地図を見つけた。そのまま何の気なしに購入し、旅亭に戻った。衝動買いと言っても過言ではないかもしれない。食事の後落ち着いた時に改めて見ると、何故これを買ったのだろうと自分で不思議に思ったほどである。値段は１枚３万ドルク。旅亭の宿泊料が一泊２食付で２０００ドルク、林檎１個が１００ドルクということなので、かなり高価な買い物である。にもかかわらず使いようがない。なんという無駄遣いだろうか。

だがこの地図を手にした時から、龍斗の心境に変化が起きたのもまた確かだった。部屋にいるときは地図を見て時間を潰すようになっていた。地図の何を見るのか、そして何を思うのかは大体いつも同じだった。

龍斗の視線はまず地図の右端、つまりは東端に向かう。そこにあるのは様々な形の島が南北に長く連なっている様子。その横にはタツノ列島という文字が書いてあるが、タツノ列島よりも『大和』の方が龍斗にとっては馴染みがあった。

（大きめの島が上から順に玲角島、徳間島、御蔵島。更に数個の島を合わせて大和か。……けっこう広いと思ってたが、小さいな。で、これに乗って西へと）

龍斗の視線はタツノ列島から左側へと進んでいった。海には大きな渦が描かれているが、あまりの大きさに紙から切れてしまっている。渦の中心に書いてある『トリトン海流』から更に左、『ランドレイク大陸』で目を止めた龍斗は母から聞いた言葉を思い出す。

「私が生まれ育ったのはとても大きな陸地だった。世界はここだけじゃない」

それはぽつりと呟く独り言のようなものだったが、龍斗の耳に強く残っていた。そしてそれは、大陸に流れ着いた今、龍斗が思うことでもあった。

（井の中の蛙大海を知らず、か）

龍斗は自分が今いる所、『オリジア』と書かれた場所に目を向けた。街の様子は非常に賑やかで、かつて龍斗が住んでいた玲角島よ

りも広い面積を持つが、それでも大陸のごく一部でしかない。つまりまだ龍斗は大陸の中のごく一部しか知らないのだ。

（どうせなら、もっと大陸を知りたい。知識は多い方がいい。無くて困ることはあってもあって困ることはない）

最終的に龍斗はそう考えるようになった。

そして龍斗はついに決意した。自分の進む道を定めた。多少迷いはあるものの、自分が思う条件を満たしている職業は他になかった。

（冒険者、か。正直気乗りはしないが……今まで培ってきた戦う力を失うのは俺には出来ない。どうせなら縛られずに生きていきたい。なら、この道しかないか）

この大陸には職業ギルドというものがあり、何か職に就きたい場合はそれに所属するのが一般的である。だが、大抵のギルドは加入に際して厳しい条件が課される。

例えば銀行の経営も行う商人ギルドでは、お金の計算はもちろん社会経済についての知識も必要となる。それらを問うための筆記試験に合格しなければギルドに入ることは認められない。

例えば鍛冶屋ギルドでは、親方と呼ばれる中堅の職人の下で何年も下働きを経験した後、実技試験を受け合格しなければならない。

それに比べ冒険者ギルドには加入条件が一切無かった。その理由は至極簡単、冒険者の世界は完全な実力主義だからである。力が無ければ生き残れない。常に死と隣り合わせと言っていい世界。だが逆に言えば、力量さえあれば任務を次々こなして荒稼ぎすることが出来る。それ故に冒険者という職業は大陸で最も人気のある職業だった。

更にギルドは、全ての国から独立した組織である。商人ギルドはオリジアという拠点を持つ例外的なものだが、承認が得られれば何処の国で商売をしても構わない。鍛冶屋もまた然り。冒険者では、関所を通る時の通行料が半額になる。それも決め手の一つとなった。

思い立ったが吉日と、龍斗はすぐに冒険者ギルドに行き登録を済ませた。ややこしい手続きが必要なのではと内心不安だったが、カードを水晶にかざすだけで登録は完了した。

だが龍斗にはもう一つ決意したことがある。

第8話：地図と決意（後書き）

ちょっと焦ったかな……

ハァｏｒｚ

素人の拙い作品ですが感想など頂けると有難いです。

第9話：雁は発つ

『忍びても　景色晴れぬと　雁は発つ　跡は濁れど　情けは無用』

そう書かれた紙を囲うように座る4人の人間がいた。皆がその紙に書かれた文句を見つめ、眉にしわを寄せていた。そのうち1人、ベラスが金髪を振り乱した。

「全然分からないわ。何なの、これ」

その隣にいた茶髪の男性、トマスもベラスに倣って首を振った。肩をすくめ、両手を上に向けるおまけ付きである。

「僕もお手上げだ。こんなのは見たことない。……君らはどうだい？」

彼の視線は黒髪の少年少女、連と霞に向けられた。同じ大和出身の彼らなら、何か分かるかもしれないと思ったからだ。その声に反応した連が顔を上げた。

「あ、そうか。お2人は知らなくて当然ですね」

そう前置きしてから説明を始める連。

「これは俳句、じゃないな、短歌っていうものです。美しい景色を見た感動とか、自分の気持ちを誰かに伝えたいときとかに詠む……まあ、詩（ポエム）みたいなものですよ。ただ、単なる詩と違っていろいろ制限があるんですけど」

「制限？」

聞き返してきたベラスに、連は答えた。

「ええ。俳句だと五七五の計十七音、短歌はそれに七七を加えた計三十一音で全てを表現するんですよ」

「へぇ～、東洋の神秘だね。それで、意味は？」

「んとね～、『いくら我慢して待ってても、空の景色は晴れにならず曇っている。だから渡り鳥は飛び立っていく』前半部分はこんな

感じかな」
　霞の回答にますます訳が分からないと2人が首を傾げる。
「えっと、……だから、何なんだろう？」
　その様子を見た連が苦笑を浮かべながら説明する。
「それは文字そのままの表の意味です。龍斗がわざわざ置いてったんだから、必ず別の意味があるはずです」
「別の意味？」
「そうそう。東君、長く家を空ける時たまにこういうの残して行ってたんだよね。で、毎度何か伝言を隠してたから、これもそうだろうなって」
　そうして霞と連による解読が始まった。デイビス夫妻は旅亭の仕事があるのでここで退席した。
「忍ぶはもしかしたら『偲ぶ』がかかってるんじゃ」
「景色は～……『気色』？」
「後は何があるかな……」

　30分後、仕事が一段落した夫妻は連と霞の所へ向かった。だが扉を開けた瞬間、中の空気が重くなっていることに気付いた。連は肘をついて頭を抱え、霞は椅子に全体重をかけて天井を仰いでいる。その様子にただならぬものを感じたベラスが声をかける。
「ちょっと、2人ともどうしたの、何か分かったの！？」
　ベラスに視線を向けた連は、顔を起こした。
「ん、ああ、ベラスさん。ええ、大体分かりましたよ、奴の言いたいことは」
「それで、何だって？」
　トマスの質問に脱力した声で霞が答えた。
「『いくら故郷を懐かしんでも、気持ちを押さえようとしても、自分の気は晴れない。だから俺は渡り鳥の如くここを離れていく。ちょっと面倒事残して行っちまうけど、心配するな。』……全体的に

まとめるとそうなるね」

部屋の重い空気がデイビス夫妻を飲み込んだ。驚いた表情のまま固まっている。やはり結構ショックを受けた様子だ。ある程度こうなることを予想していた連はフォローに入った。

「まあでも、お2人にはちゃんと感謝してますよ。ほら」

テーブルの上に置いてある3枚の金貨を指さす連。

「1泊2食で2000ドルク、1ヶ月30日で6万ドルク。30万ドルクは明らかにおかしい。命を助けてくれた。食住を提供してくれた。それに対するせめてものお礼のつもりでしょう」

「そんな大金……とても受け取れない……」

「駄目ですよ、ここは受け取るべきですよ」

「そうですよ。それが龍斗に対する礼儀ってもんです」

連も霞もベラスに反論した。そこからは受け取れ、受け取らないの堂々巡り。このままではらちが明かないとトマスがある提案をした。

「えっと、なら4人で山分けにするのはどうだい？　龍斗君は色々教えてくれた君たちにだって感謝しているはずだろ。なら、君たちにも受け取る権利はある」

全額はもらえないので、連や霞にも分配することで額を減らそうという考えである。だが連も霞も目を丸くして首を振った。

『受け取れないですよそんなの！！』

こうして立場が入れ替わり、再び堂々巡りとなってしまった。いつの間にか日は傾き、窓から入る光がテーブル上の金貨を照らしていた。

最終的にこのお金は、デイビス夫妻が10万ドルク、連と霞はそれぞれ5万ドルクを受け取るということで決着がついた。残った10万ドルクは教会に寄付することとなった。

第１０話：無常の闇を斬り裂かん（前書き）

総合評価１０ポイント
お気に入り登録件数５件

いやはや、有難うございます。本当に嬉しい限りです。

第１０話：無常の闇を斬り裂かん

鬱蒼（うっそう）と生い茂る緑の中、草一本生えていない一筋の地面が蛇行していた。その道の真ん中に１人の少年が立っていた。鋭い眼光で周囲に目を走らせた少年――龍斗は麻袋をたすき掛けにし、腰を落として構えを取った。左腰には祖父の形見である脇差が、紐を通して括り付けてある。左手で鞘を固定し、右手で柄（つか）を逆手になるように軽く握る。そのまま目を閉じ、周囲の気配を探りながら呟く。

「森羅万象、無為自然……『即応の霧』」

忍の世界にはその道を歩む者にしか伝授されない秘伝の技というものがある。それらを総称して「忍術」という。今龍斗が呟いたのはその忍術の一つ『即応の霧』。霧のように意識を広げ、より広範囲の気配を察知するという技である。

しかし木陰や落ち葉の中に隠れる『葉隠の術』、話術によって相手を翻弄する『五車の術』あたりなら実際に使うことが出来るのだが、口から火を噴くなど攻撃としての『火遁』、蝦蟇（がま）を呼び出す『幻術』、分身を作り出す『分身の術』など、忍術と呼ばれるものの大半はおよそ人間業とは思えない物ばかり。『即応の霧』も現実的にはあり得ない術の１つと認識されている。しかし気配の察知には精神の統一が必要となる。故に今では短時間で精神統一するためのまじないという認識で『即応の霧』発動の呪文が唱えられる。龍斗が唱えたのも本気で効果発動を信じているからでなく、精神統一の認識からであった。

迫る気配を探り当てた龍斗は左足に体重をかけ、右足を滑らせて構えを直す。

「無常の闇を切り裂かん……『暁』」

脇差の銘を語り、左手の指で鯉口を切る。その刃が露わになった瞬間、森の陰から唸り声と共に一匹の犬が現れた。大きな犬歯をむき出しにし、尻尾を立てて龍斗を威嚇するその姿は、遠目に見てもかなりの大型であることが分かる。その膂力も並大抵ではない。一瞬身を屈めたかと思うと、次の瞬間には龍斗の喉を噛み千切らんと彼の身長よりも高く跳躍する。

（やはり狙いは喉笛か、甘いな）

龍斗が野犬と戦うのはこれが初めてではない。玲角島にいた時、忍の修行の一環として山籠もりをしたことがある。それは大陸の言葉で言えばサバイバルと呼ばれるもので、人里離れた山の中たった1人で1ヶ月間、自給自足で生き延びねばならない過酷なものだった。その修行によって野生動物との戦い方や自然の中で生きる術、薬草の知識などを学ぶのである。

野犬は短期決着を好む。跳躍して上から攻撃すれば相手の視線もそれを追うために顔が動く。顔が上を向けばどうなるか。狙いである急所の喉笛が無防備に晒されるのだ。

だがこの戦法には1つ弱点があった。

龍斗は体重を右足に移動させ、右腕を斜め上へと振り上げた。逆手に握られた脇差の刃が、戦法の弱点――無防備となった野犬の腹に突き刺さる。勢いそのままに腕を振り切ると、野犬は自重によって刃から抜け落ち、地面に叩きつけられた。腹から赤い血を溢れさせ、血だまりを広げながらもなお立ち上がろうとする野犬の首筋に脇差を当て、龍斗はその喉笛を引き裂いた。

（さて、あと何匹だ）

動かぬ死体となった野犬から目を離し、辺りを見回す龍斗。その顔には、その目には人間らしい情など欠片もない。命を奪うことに慣れ、殺すことに何の躊躇（ためら）いもない殺戮者（さつりくしゃ）の目である。だがそれは同時に、相手にやられて自分が命を失う覚悟がある、ということも意味している。

『忍たるもの、生死あらば情を断つべし』
やはり龍斗には忍の教えが染みついているのだ。そして忍である以上、一切の油断は禁物。野犬が単独で動いているというのは楽観的すぎる思考である。少なくとも五～六匹、多い時には数十匹という単位の群れを形成しているはずなのだ。
複数の気配が迫るのを感じ取った龍斗は腰を落として構え直し、脇差『暁』を握る手に力を入れた。

「ふぅ、終わったか」
血だまりに沈む１０匹の野犬を見ながら龍斗が言った。気配を探ってもこちらに向かってくるものはない。着物と違い、大陸の服は肌に密着する作りであるために体がどれだけ動かせるか不安だったが、実際戦闘をしても問題はなかった。龍斗は足を曲げ、野犬の顔に近付いた。
（これが、ハウンドドッグか……確か上顎の牙２本を取るんだったか）
龍斗はオリジアを出るにあたって１つの任務（クエスト）を受けていた。その内容は、ハウンドドッグ及びワイルドボアの討伐。次の街に行くために必ず通らなければならないこのアサンの森でのクエストだったので、ついでに受けていたものである。
討伐系のクエストを受けた際は、対象を仕留めたという物的証拠が必要となる。何を何体倒したか、その証明のために対象の体の一部を持ち帰るのだ。ただ持ち帰ればいいというものではない。ギルドが指定した特定部位を持ち帰ることで初めて討伐完了となる。今回討伐対象となっている２種の特定部位は牙。なので龍斗はその部位を回収する作業に入った。他の歯より幾分大きい犬歯の上に脇差の刃を突き刺し、歯茎から抉り取った。
残り９体のハウンドドッグからも牙を回収すると、龍斗は死体の前足を両手で掴み、森の中へと投げ捨てた。野生の肉食動物は死肉

を食らうものが多い。人が通る道路のど真ん中に放っておけば、その肉を食らうために本来道路まで出てこないはずの野生動物が道路に出てきてしまう。そうなれば通行の邪魔どころの話ではない。なのでギルドの規則として道路上に死体を残さないことが定められている。道路上にさえ残さなければ後はどう処分しても構わないとのことだったので、龍斗は文字通り、好きなように放り投げたのだった。

死体を処理した後、龍斗は地面に耳をつけた。こうすることで近くに川があるかどうかを探ることが出来る。幸いにもすぐ近くにありそうだったので、龍斗は森の中へと入っていった。途中で自分が放り投げたハウンドドッグの死体を1つ見つけた。龍斗は再び横に放り投げ、更に進んで川に出た。

着いてみると川というよりは小さな清流であった。しかし龍斗にとってはそれで十分だった。回収したハウンドドッグの牙を1本1本水にさらし、脇差を使って歯茎の肉をそぎ落としていく。血や肉は時間の経過と共に腐敗が進み異臭を放つ。大抵の冒険者は気にせずにそのままにする。ギルドとしても部位の回収さえできればそれでいいので、特に気にすることはないというのだが、龍斗は道中で悪臭が移るのを嫌った。

20本の牙を全て洗浄し、オリジアで買った2つ目の麻袋に詰め込んだ。

（さて、そろそろ戻って進みますかねぇ）

そう思って歩き出したその時、遠くで派手な破壊音が響いた。

第１０話：無常の闇を斬り裂かん（後書き）

今更ですが……このタイトルのつけ方どうなんだろう↑
いいのかなこれで…？

忍術についてですが『即応の霧』は自分で考えだしたオリジナルの技です。実際にはそんな技はないです。

第11話：無常の闇を斬り裂かん　2

（何なんだ、さっきの派手な音は）

龍斗は木々を飛び移りながら走っていた。地上を走るのは様々な野生動物に遭遇する可能性があるために危険である。この辺りに生息する動物は木の上に登ることはないので、これが最も安全な移動経路ということになる。

（そういやさっきの俺みたいに路上でも襲われることがあるんだよな。ということは、馬車か何かが森の中に突き飛ばされた可能性が高いな）

「其の速きこと風の如し……つっても変わらねぇか。もうちょい足速くならんものかね」

1人悪態をつく龍斗だが、その声に応えるものは誰もいない。焦る気持ちを押さえながら龍斗は森を突っ切っていった。

「あー、やっぱりな……」

音の発生源を見つけた龍斗は、木の上からその様子を眺めていた。案の定、そこには道路から突き飛ばされた馬車が1台転がっていた。恐らく馬車をそのようにした張本人、ワイルドボア数体が取り囲み、自慢の長い牙を以て馬車を大きく揺すっていた。馬車を引いていた馬は既に息絶え、巨体の猪（いのしし）がその肉を食らい始めていた。

暫く観察していた龍斗はあることに気付いた。耳を澄ましてみると、馬車が揺れる度に人間のうめき声が聞こえた。中にまだ人がいる。

（さて、体長は1メートル程のが3体か。『暁』……じゃあ時間かかるな。ならここは……）

龍斗は左手を背中に回した。麻袋と同じように、左肩から右腰へとたすき掛けした太刀の鞘を掴む。

「父さん、頼むぜ。……早霧の山に茜差す、『東雲（しののめ）』！！」

父の形見である太刀『東雲』の刀身を露わにすると木から飛び降り、着地と同時に横薙ぎの一撃を放った。それはすぐ傍にいたワイルドボアの前足を斬ったため、相手はバランスを保てず横倒しになる。隙だらけになったその首筋に刃を当てると、躊躇いなく刀を引いて血しぶきを上げさせる。と次の瞬間、気配を察知した龍斗は後ろに転がった。体勢を直して見ると、赤く染まった猪に進路を阻まれた別の猪の姿があった。

（ちっ、俺としたことが……気配捉えるの忘れてたな。だから俺はまだまだなんだ）

かすった左腕の痛みに顔を歪めながら自身に悪態をつく龍斗。だが今はそれどころではない。瞬きで気持ちを切り替え、太刀を両手で構え直す。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

そう呟き、今度は敵の気配を逃すまいと意識を全体に向ける。先程避けたワイルドボアがこちらに突進しようと動いた瞬間、龍斗は数歩分横跳びし、馬を食らう1体に向かって走り出す。こちらに気付いた猪は顔を振り、龍斗を弾こうとするが空振りに終わった。猪の背に跳び乗り、両耳の間に太刀を突き刺す。

だがその後のことを考えていなかった。猪が派手に暴れ出したため、太刀を抜くことも降りることも出来なくなった。両足で胴体をはさみ、太刀を握って振り落とされないようにしがみつく。流石にこの状態から普通に飛び降りれば無事では済まない。形見の太刀を見捨てる気は毛頭ない。暴れる反動を利用しつつ何とか片足を背中に上げた龍斗。太刀を握る手の力を強め無理矢理空けた手で脇差を抜く。

ワイルドボアが飛び上がり、後ろ足2本で直立するような格好になった。好機とばかりに龍斗は後ろ足の1つから鮮血を上げさせる。全体重がかかっている足が脱力しバランスが崩れる。その瞬間に龍斗は太刀を手放し、跳び下りた。倒れてもなお足をばたつかせる猪

に背中側から近付き、体当たりを受けないようにしながら首や腹を滅多刺しにする。やがて動きが小さくなり、ぴくぴくと痙攣するだけとなった。頃合いと判断し、脇差を直した龍斗はワイルドボアから太刀を引き抜いた。血糊を振り払いながら気配を探る。

（もう1匹いたはずだが……まあいい）

太刀『東雲』を鞘に納め、龍斗は馬車を確認した。ワイルドボアの牙にやられ所々布が破れている。車輪は大破しているし木枠にもひびがある。馬車としては使い物にならないだろう。

（それでも中に侵入できるようなところはないな。ひとまずは無事か）

見当をつけた龍斗は馬の血に濡れた横向きの御者台から中に入った。

第１１話：無常の闇を斬り裂かん　２（後書き）

今までに比べると文量少ないかな。いつもは２０００字越えなんですが。今回は１６００ほどかな。別に意図しての事でないので特に気にしていませんが。

第12話：無常の闇を斬り裂かん　3

「誰かー、生きてるか？」

声を掛けながら龍斗は馬車の中に入った。中の様子を見た瞬間、龍斗は目を見張った。馬車の中には男3人、女2人、計5人の人間がいた。だがそこには生気というものがまるで感じられない。薄汚れた白い服に身を包んだ一同はこうべを垂れて座り込んでいた。不安、絶望、諦念……龍斗に感じ取れたのはそんな負の感情だけだった。

その空気を作り出している要因の1人、最も御者台に近い位置にいた男が龍斗に気付き顔を上げた。

「……おや、どちら様ですか？　見たところ、冒険者とお見受けしますが」

男は目を細めた。薄暗い馬車の中に長時間閉じ込められていたため、龍斗の後ろから射す光が眩しいのだ。龍斗は光を受けるその顔に目を向けた。黒髪、黒目と大和人のような特徴を持っているが、それにしては肌色が白すぎる。冒険者、という言葉に眉を顰めるも、龍斗は渋々肯定する。

「ん……まあ、その通りだが。そういうあんたは大和人、てわけでもなさそうだな」

「ええ、仰る通り私は大和人ではありません。貴方は……いや、止めておきましょう。今は悠長にしている場合ではありませんしね」

（何だこの落ち着き払った態度は？　他の4人も、今の状況分かってるのか？）

男が言う通り、今は悠長にしている場合ではない。道路上ならまだしもここは森のど真ん中なのだから。しかし馬車の中にいる5人には慌てる素振りが無い。話しかけてきた男以外は俯いていただけだった。男の顔も無表情、何処か達観したようにも見える。

「では冒険者さん、我々に構わず早くお逃げなさい。いつまた獣が

襲ってくるか分かりません故」
「は？」
龍斗も同じ結論に達していた。それ故に男の発言が信じ難く即答で反応してしまった。訳の分からない龍斗は問いかける。
「何故だ？　何故それが分かってて見捨てろと――」
「我々が『奴隷』だからですよ」
遮った男の言葉は非常に衝撃的だった。龍斗は驚きを隠しきれず、同時に歯を食いしばった。無意識のうちに力が入り、握り拳が小刻みに震えている。
「……奴隷……人を人とも思わぬ極悪非道……！！」

奴隷とは言わずもがな、他人に所有される立場の人間のことである。島国大和では、国の成立と共に単なる商売目的の人身売買は禁止されている。例外として大飢饉などの災害時、他にどうしようもなくて娘を遊郭に、という2つの場合に限り人身売買が認められるが、それ以外で行った場合は厳しい拷問にかけられる。余談になるが、大和では殺人は重罪。正当防衛が認められない限り罪人は極刑――即ち死刑。大和において命とは非常に重い物なのだ。
だが海を渡ったこちら側、ランドレイク大陸ではその常識は当てはまらない。こちらの世界では人身売買は当たり前のように行われている。殺人を犯した者が死刑になることもない。森の中で野獣に殺されたと嘘を言えばあっさり認められてしまうからだ。初めてそれを知らされた時、龍斗は今と同じように怒りを表したものだった。滅多に感情を表に出さない龍斗にしては珍しいことで、連や霞でさえ驚いたくらいだ。その時と同じように怒りを晒し、また同じようなことを思う龍斗。
（畜生が、人の命を何だと思って――）
だがその思考は突然起こった地震によってかき消された。たたらを踏むも何とか倒れ込むのを防ぐ。

（いや、地震じゃない。馬車が揺れてるのか……！！　まさか！！）
耳を澄まし、荒い息遣いを聞いた龍斗は確信した。
「また来たか野獣共。お前ら、本当に死ぬ気か？」
「死にたくはないが呪いのせいで全く動けねぇんだよ。主の命令無しに動きまわれねぇ。奴隷ってのはそういうもんだ」
金髪の男が両手を上げる。その手首には他の４人と同じ黒革の手枷が付けられていた。重さで垂れる鎖を見て龍斗は苦い顔をした。
「解放しなきゃ動けない、か……ここまで来て見捨てろってのか……？」
「まさか我々を助けるおつもりで？」
「当たり前だ。こっちじゃどうか知らんが人の命はそこらに捨てられるもんじゃねぇ。全員助け出す」
ほう、と黒髪の男が声を上げた。そして龍斗に一つの提案をする。
「そこまで仰るのなら１つだけ手があります。我々と契約して頂けますか」
「契約？」
龍斗は男の黒目を見た。相変わらずの無表情だが目に光が戻っているように見える。
「ええ……皆さんも、ただ死を待つよりかはマシでしょう」
男の言葉に皆同意した。どうやらその契約というものをよって、少なくとも動くことが出来るようになるらしい。全員の意思を確認した龍斗は男に聞く。
「で、何をすればいい」
「本来なら法的手続きがあるのですが、形式上の事なので必要ないでしょう。簡単なことです。貴方の血をこの手枷につけて下さい。それで契約完了です」
「血、か」
龍斗は脇差『暁』を抜くと、左小指に切先を当てた。少し力を入れ、皮膚を破る。痛みに一瞬顔をしかめたが、血が滲み始めたのを見ると刃を鞘に納めた。

その血を男の手枷、手首に巻かれた革の部分につける。すると、手枷全体が淡く光を放ち、その光と共に鎖の部分が消えていった。それに目を見張りつつ他の４人の手枷にも血をつけていく。５人全員の鎖が解かれたところで、龍斗が呟く。

「さて、鎖を外したはいいが……」

馬車は相変わらず揺らされている。心なしかさっきよりも激しさを増しているように感じられる。

「２～３体じゃ済まないよな……」

「よろしければ、我々をお使い下さい」

３人の中では最も背が低い黒髪の男がそう言った。龍斗が見ると、解放した男３人が直立不動で立っていた。龍斗は３人に尋ねた。

「戦闘経験は？」

「俺は元々冒険者やってたんだ。ワイルドボア如きには負けない腕がある」

と金髪の男。馬車の中で最も背が高く筋肉質でガタイがいい。

「折角助けてもらったんだ。恩を返したい」

と燃えるような赤い髪の男。

「フフフ、私達は元々戦奴隷……戦闘の道具として売られましたので、皆腕に覚えのある者ばかりですよ」

と黒髪黒目の男。龍斗は更に質問する。

「得物は？　幾らなんでも素手は無理だろう」

「確かにそうだが、そんなこと言ってる場合じゃないだろう」

金髪の男がそう言うと、その前にいた黒髪の男が鼻で笑った。

「まあ貴方のように馬鹿力があるなら武器が無くても立派に戦えそうですが……」

「何だと！！」

「ご安心ください。あの商人、我々と一緒に武器の類も載せていましたので。使い慣れた得物ではありませんが、これも無いよりはマシでしょう」

よく見ると馬車の奥に大きな箱があった。龍斗が開けて中を見る

と、細身の片手剣や斧などが入っていた。
「よし、それぞれ得物を持ったら一斉に出る。死に物狂いで戦うしかないぞ……死にたくなけりゃ、な」
その言葉を肯定し、それぞれ武器を手に取った。

第１３話：無常の闇を斬り裂かん　４（前書き）

このタイトルいつまで続くんだろう。予想以上に展開が進まないのですよ。内容的に大丈夫かなと思ってこのままですが……

何はともあれ、第１３話です。

第１３話：無常の闇を斬り裂かん　４

「おい、あったぞ。ここだ」
「ちょ、ちょっと待ってくださいよベリスさん」
レザーアーマーを着た４人が息を切らし木に手をつきながらやってきた。その視線の先には緑色のバンダナを頭に巻いた無精ひげの男が手招きをしている。
「馬鹿が、静かにせんか！！　気付かれたらまずいだろうが！！」
例のバンダナの男、ベリスは語気を荒げながらも小声で怒鳴るという非常に器用な真似をやってのけた。視線を戻すと３人の男達がワイルドボアの群れと戦っているのが見える。
「あいつらに見つかって命を落としてぇか」
赤髪の男は剣で的確に急所を突いているし、黒髪の男は動きが速く目で追うのがやっとといったところ。金髪の大柄な男など、明らか両手武器と思われるサイズのバトルアックスを片手でぶんぶん振り回している。その様子を見た４人は青ざめた顔で首を横に振った。
「分かってるじゃねぇか。うちの盗賊団に命知らずの馬鹿は要らねぇからな。さて、とっとと済ませるぞ。収穫なしじゃあデッツの兄貴に何されるか分からんからな」

ベリス一行はこのアサンの森を縄張りとして活動する盗賊団の一員、主に道路を通行する旅人や商人の馬車に襲撃し、奪ったものを売り払うことで荒稼ぎしている連中である。だが実際のところそのやり方には大きなリスクが伴う。他でもない冒険者の存在である。冒険者と一口に言ってもその仕事の幅は広い。野獣の討伐、遺跡探索、傭兵といったスタンダードな仕事の他に、配達や馬車の護衛といった仕事も請け負う何でも屋のような一面を持っているのだ。そして冒険者は強い。複数人で取り囲めば何とかなることが多いが、

1人1人の力量となると冒険者の方がまず格上であると思っていい。故に彼らは安直な浅慮で人を襲うことはない。機会があれば野獣に襲われた馬車からめぼしい物を奪うという手段を使う方がセオリーとなっているのだ。

横倒しになっている馬車の裏手に隠れると、ベリスは腰からジャックナイフを取り出した。刃を幌に押し付け、一気に切り裂く。

「お、こいつぁ……」

ベリス一同は目を見張った。中にいたのは2人の少女。10代中盤と思われる金髪の2人は怪訝な表情を浮かべているがそれを抜きにしても端正で綺麗な顔をしていた。ねめつけるような視線で、ベリスはその全身をくまなくチェックしていく。

(服のせいで詳しくは分からんが、出るとこは出ているな……おまけに顔がいい。それに手の黒革……奴隷がつけてる呪いのアイテム『拘束の手枷』か)

「こいつぁ上玉だ。おい、2人1組で担ぎ出せ」

「イエッサー!!」

言うが早いか4人の盗賊は馬車へと乗り込み、2人がかりで1人を肩に担ぎ、外へと運び出す。

「ククク、今夜は楽しめそうだなぁおい」

飢えた獣のような目で下卑た笑いを浮かべたその時だった。

「何をしている」

突然のことに身を震わせ硬直した。が、ベリスは他の4人と違いすぐさま声の主へと顔を向けていた。そこにいたのは少女たちと同年代と思われる黒髪の少年。

(何だ、ガキか)

気を軽くしたベリスは4人に命令した。

「とっととデッツ兄貴のアジトへ持ってけ!! 直ぐ片付けて追いつくからよ」

「は、はいっ」
「待て！！」
「おっと、行かせねぇぞ」
ベリスは少年の行く手を遮った。右手のジャックナイフを目の前に突き付け、薄笑いを浮かべて少年に告げる。
「見たところ駆け出しの冒険者か何かか？　あいつらの事なら諦めな。俺らでしっかりその体を楽しんでやるからよ」
その言葉を聞いた途端、少年の顔から表情が消えた。対照的にベリスは下卑た笑みを強めていく。
「ははっ、何だその顔は。気でもあったか？　まあ何でもいい。お前がここで死んだって、野獣にやられたことにしかならねぇよ」
「１つだけ聞く。お前らは盗賊だな？」
「あ？　だったら何だ？　あれか？　怖くなったか。えぇ、坊ちゃん？」
少年は腰に挿していた黒光りする棒に手を掛けた。右手が上がると、見慣れない形の刃を持つ短剣が現れた。ベリスに多少の緊張が走るが表情は笑みを浮かべたままだ。
（まあどうってことはない。所詮駆け出しのガキだ）
「何だよ、自棄になったかお前」
「『俺が死んでも野獣にやられただけ』……そう言ってたな」
「ああそうだな、命知らずのお前にゃ似合いの死に様だ」
「その言葉、そっくりそのままお返しする」
ベリスの表情が一瞬で消えた。直後、その顔に青筋が立ち、歯ぎしりと共にナイフの切っ先がぶれ始める。
「ガキが……なめやがって！！」
怒り心頭のベリスはナイフで斬りかかった。だがその刃が少年に当たることはなく、力任せに振ったため体制が前に崩れていく。その瞬間、ベリスの視野の片端で何かが動いた。同時に首筋から何か冷たいものが走ってゆく感覚が出てきた。攻撃が当たらなかったことに驚きながら何かの方へと顔を動かす。だが思ったように体が動

かず、非常にゆっくりとしか首が回らない。まるで時間の流れが遅くなったような感覚である。ベリスは内心苛立っていた。
（くそ、何が起きた!?　何が動いた!?　速く動けよ俺の体だろ!!）
ようやく視界がその何かを捉えた。そこには先程まで自分の目の前にいた――はずの黒髪の少年。無意識のうちに目が合った。
（何だ、あの目は。デッツ兄貴と同じ、人を人とも見ないような……いや、そんなもん比じゃねぇ、もっと冷酷な、そう、殺すことに慣れきった、命を奪うことに何の躊躇いもないような……何だあの短剣、あんな赤い色してたか……いやまさか）
その刹那、ベリスの視界は真っ赤に染まり、もう2度と元に戻ることはなかった。

「ああ、最悪だ」
頸動脈から鮮血を上げるベリスを見下しながら少年――龍斗が腕を振った。血糊を落とし、脇差『暁』を鞘に納めたちょうどその時、男3人が龍斗の元へ集まった。血の池に沈んだ男を見てぎょっとする2人。
「如何なされましたか」
唯一平静を保っている黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は頭を掻きながら苦い表情で答えた。
「盗賊だ。あと4人、2人1組で馬車の中にいた女2人を連れ去っちまった」
流石の黒髪もこれには驚いた。金髪がすかさず発言した。
「なっ……けどよ、おかしくねぇか？　拘束の手枷はあんたとの契約で外されたろ。声の1つでも上げればいいんじゃ」
「……しまった、私としたことが……」

台詞の途中で黒髪の男が声を上げた。その顔は龍斗と同じ、苦虫をかみつぶしたような表情。

「何か知ってるのか」

「ええ、すっかり失念しておりました……女性奴隷の自由を奪っているのは拘束の手枷だけではありません。『束縛の呪い』もあるのですよ」

「呪いだと？」

「はい、奴隷の自由を奪う道具、呪いは１つだけではありません」

「何故２重に――」

「簡単なことですよ。……女性奴隷は性奴隷としての需要もありますから」

第１３話：無常の闇を斬り裂かん　４（後書き）

主人公側からの描写が難しかったので相手側にしてみたらすんなりかけたという↑

第１４話：無常の闇を斬り裂かん　５

「性奴隷……ちっ」
龍斗は舌打ちした。赤髪の男が龍斗に問う。
「で、どうし、ますか、追いますか？　それとも……見捨てますか？」
言葉を詰まらせたのは敬語に直すため。内容自体は悪い話ではない。この場から無事に立ち去ることを考えるならそれが最善の策である。
「なっ、それは――」
「それは無い。俺は追うぞ」
黒髪の男を遮って龍斗が断言した。その言葉に安堵した様子の男だったが、ふと思いついて龍斗に問う。
「理由を伺っても？」
龍斗は男３人を見渡しながら言った。
「俺は『全員助け出す』と言ったはずだ。『自ずから約しき盟を破ることなかれ』言った以上は実行する。それだけだ。文句がある奴は来なくてもいい」
龍斗の意気を感じてか２人が気圧されたように体をのけ反らせる。だがそれに屈しない者もいた。黒髪黒目の男である。
「フフフ、何と義理堅い。ま、我々は奴隷の身。主の命に従うだけです」
そう言って何故か片手を頭にかざす。だが一瞬眉を顰めて直ぐに腕を下ろした。
「何でもいい。取り敢えず奴らの気配を探って見つけ出さないと。森羅万象、無為自然、『即応の霧』」
龍斗は４人が走り去っていった方角を向いて意識を集中させた。声をかけた時に感じていた気配を探ると、指先ほどの点を感じた。
「ちょっと遠いか？　でも動き回ってはいない……まっすぐ行けば

良いかもだが、急がないとやばいな。普通に走って間に合うかどうか」

「それはまずいですね……ふむ、私に1つ考えがあります。お任せ願えますか？」

「策があるのか？　なら任せる」

龍斗からその言葉を聞いた黒髪の男は片手を頭に口を歪めた。

「では……風の精霊シルフよ、我らに力を、『フェアウィンド』」

途端に龍斗は風を感じた。それは自然の風とは違う、質量を持って纏わりつくような風である。そしてそれは驚くべき効果を龍斗にもたらす。

「凄いな、体が軽く感じる」

「お前、ただもんじゃねぇとは思ってたが……」

「まさか魔法が使えるとは……」

他の2人も感嘆の声を上げた。だが黒い目はもう笑っていなかった。鋭い眼差しで3人を諫める。

「感心している場合ではありませんよ。それに効果は一時のもの。お急ぎになった方がよろしいかと」

「おっとそうだった。じゃあ行くぞ……其の速きこと風の如し、『疾走』」

龍斗はいつもの癖で忍術の文句を呟き、気配の方へと駆け出した。

「……今のは……」

「ああ……」

「フフフ、さて、急がなければ取り残されますよ」

あっけにとられている2人を尻目に黒髪の男が龍斗を追う。

「あ、ま、待てよ！！」

正気に戻った2人もその後に続いた。

「ハァ、ハァ……お、追いついた……」

「な、なんてスピード……」

「しっ、静かに」
たった一言で金髪、赤髪が一気に黙った。それには一瞥もくれず龍斗は前方にある洞窟を見続ける。山肌にポツンとあるその入口には2人の見張りが立っていた。それを見た金髪の大男が囁くような声で言う。
「あそこか……あの程度ならすぐ倒せるな」
「あれだけならな。どう考えても中に親玉がいるだろう」
その声を聞いた元冒険者という赤髪の男があ、と声を上げる。
「この辺で盗賊なら、デッツ辺りじゃない、ですかね、その親玉」
「どんな奴だ？」
「ぶっちゃけ単純な奴ですよ。欲に忠実で深く考えることはない。元々はそれなりに力のある冒険者だったとか。いつの間にか１０何人程のチンピラを従えて盗賊になっちまいましたが」
「ならば、如何いたしましょうか」
龍斗は黒目に見据えられしばし沈黙した。

天然の鍾乳洞に少し手を加えただけの洞窟の中。その最奥へと１人の若者が歩いていった。濃い緑色のバンダナに茶色のシャツ、革製の胸当て――レザーアーマーというその格好は、見張りをしていた内の１人のものである。目的の場所には洞窟の端から端まで毛皮が敷かれている。壁際に並ぶのは、恐らく今までの盗賊稼業で得た物の中から選りすぐったのだろう、一目見ただけでも良質と分かる品々が並んでいた。
その中心に７人の人間がいた。２人は女性。顔を見る限り１０代くらいで、両手には黒い革を巻いている。残り５人はすべて男性だった。床に転がされた女性を下卑た目でねめつけ、着衣の上から体を触りまくっている。その中心にいる大柄の男に若者は声をかけた。
「お頭！！　お楽しみの所失礼ですが、１つ報告が」
「ああ？　何だよ人が楽しんでる時に！！」

「おい、デッツさんを怒らせるなよ。命が惜しいだろ」
今まさにズボンのベルトを外そうとしていたデッツは若者を睨んだ。伸びた無精ひげに涎をつけているが、その目は野獣のように荒々しい。しかし若者は威に屈さず言葉を返す。
「洞窟が冒険者に見つかりました。現在入口で交戦中です」
その言葉に全員の目が大きくなる。しかしそこは元冒険者という経験故か、立ち直りの早かったデッツがすぐに状況説明を求めた。
「それで、どうなってんだ」
「取り敢えずその辺にいた仲間達を応援に行かせました。1人は潰しましたが、あと3人と交戦中で予断を許さない状況かと」
デッツの顔に焦りが見えた。
(俺は盗賊になって日が長い。とっくに賞金首になっておかしくないな……)
「取り敢えず、相手は3人だな？」
「はい」
「なら12人で一斉に行け!!　念のため俺も行く。最悪それまでの時間稼ぎだ!!」
「あ、それなら良いものがありますぜ」
若者が取り出したのは一本の黒光りする棒だった。それを見た女性2人の顔色が変わるが、誰1人気付いた様子はない。
「潰した1人が持ってた武器です。かなり良いものみたいですよ」
そう言いながら若者は棒を両手に持ち、左手を動かした。現れた刃を見てデッツは驚愕した。
「こりゃすげぇ、なんて綺麗な刃だ……だがこいつぁお飾りのなまくら剣じゃねぇのか？」
「いや、飾りじゃありませんよ？　実際戦闘で使いますし、何より切れ味が抜群で」
デッツの目の色が変わった。武器として優れているという情報は彼にとって何よりも重要なことだからだ。デッツは若者が持つ短剣を受け取ろうと腕を伸ばした。良いものが手に入るという先走った

気持ちから思わず顔がにやけてしまう。
「……ほう、どれだけすごいんだ、その切れ味は？」
「それは……こんだけだよ」
刹那、若者はその手首を斬りつけ、踏み込むと同時に手首を返して首筋を斬った。あまりに突然のことだったので、デッツが倒れた後も沈黙が続いた。血が広がり、若者が左胸に止めの一撃を刺す頃ようやくその沈黙が解けた。
「デ、デッツさん！！」
「嘘だろ……」
「まさか、ここじゃ最強なのに……」
「さてと」
動揺を隠せない他の面々を他所に若者はバンダナを投げ捨てた。バンダナの影に隠れていた黒髪が露わになり、血糊を振り落とすと、藍色の鋭い目が残る男共を睨みつける。
「さて……こいつより腕のある奴はいないか。その命をかける覚悟あらば、お相手致す」

第１４話：無常の闇を斬り裂かん　５（後書き）

んー……まともな戦闘がない＾＾；
野獣と不意打ちかぁ
まともな戦闘の場はちゃんと考えてあります。でも全然たどり着けない
ポイント入れて下さる方、お気に入りに入れて下さった方、本当に有難うございます。
至らない点などあるかと思いますが、頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。何かありましたら感想など頂けると嬉しいです。

第15話：無常の闇を斬り裂かん　6

デッツ率いる盗賊団はものの数分で全滅した。赤髪の男が言ったように、この盗賊団は元冒険者で力のあったデッツがチンピラをまとめて作ったものである。大した戦闘経験のないチンピラの中に、デッツと同じかそれ以上の力量を持つ者などいるはずがなかった。2、3人が敵討ちだと言って黒髪の少年、龍斗に挑むも、それは脇差『暁』により多くの血を吸わせるという結果に止まった。頭(かしら)と同じ血の池に沈む仲間を見て、恐れをなした盗賊たちは我先にと洞窟から逃げていった。

（外道に救い在らず。己が所業を悔いるがいい）

その心の声に呼応するかのように、全ての最後の一手が龍斗の前に現れる。

「命令通り、全て片付けました」

「いやあ、話に聞いてたが、見事にその通りになってら」

「いやはや全く、見事なご慧眼(けいがん)。感服いたしました」

3人の男が口々に龍斗を持ち上げる。自分で考えた作戦が上手くいって満更(まんざら)でもない龍斗だったが、思わずにやけそうになった顔に力を入れ、最小限の笑いに止める。

「別に大したもんじゃない。俺が見張りの1人に成りすまし、中に入って頭を潰す。動揺して洞窟から出ていく盗賊をあんたら3人が斬り捨てる……軽くつついて敵を誘き出す、単なる啄木鳥(きつつき)戦法だ」

それはともかく、と龍斗は2人の女性に目を向ける。先程の経験からか2人の眼には不安と怯えの色が見えた。襲われる相手が変わるだけかもしれない。大方そんな見当外れな考えだろうと龍斗は男の黒目を見る。

「で？　こいつら開放するのはどうすりゃいいんだ？」

「ふむ……本来は束縛の呪いをかけた者からその所有権を譲り受けるものなのですが……」

一般的な、しかし現時点では不可能な前置きの後に続ける。
「む……やはり、『真血の契り』しかありませんかね……？　しかし、それをしてしまうと……」
今まで淀むことなく言葉を発してきたこの男が、初めて言葉を濁した。それ即ち、その方法をしてしまうと後が困るということなのだろう。だが彼の迷いを断ち切る声が出た。
「私達は……構いません。奴隷に堕ちたその時から、覚悟はしていました」
他ならぬ女性の声だった。今まで聞いたことのない彼女の声に男4人は驚きの表情を隠せない。……もっとも、黒目を見開いている男が驚いているのはそこではなかったのだが。
「……よろしいので？」
「構いません。攫われた時点で全てを失う覚悟はしていました。もっとも、呪いのせいで舌を噛み切ることは敵いませんでしたが……今は失わずに済んだ、その幸運で十分です」
透き通るような金色の髪を持つ女性が毅然とした態度で龍斗を見据えた。その青い目に、少々幼さを滲ませながらも大人が持つような風格と威厳を感じて少しのけ反る龍斗。視線が揺れてもう1人の女性に焦点が合った。この女性も、彼女と同じ決意の目をしている。
「こう申しておりますが……如何なさいますか？」
黒目を向けてきた男の声にもう迷いは無かった。後は龍斗の鶴の一声で全てが決まる。腕を組んだ後、龍斗は渋い顔で最後の確認をした。
「……本当にそれしか方法が無いんだな？　それをしなければ彼女らはここで飢え死にするしかない」
「はい」
「何が起こるか知らないが、後がある」
「はい」
「……あんたらも、本当にそれでいいのか？」
『はい』

黒髪の男に念を押し、女性2人に最後の確認をした。深く息を吸い、大きなため息をつく。

「ハァ……仕方ない、その何とかってのをやるしかないか」

「――では、今言った通りにして下さい。そちらの方は……分かっていますね？」

龍斗と女性2人が頷く。それを黒目に映した男は結構、と一言残し男2人と共に壁際へと移動していった。特に意味はないのだが、言葉を他人に聞かれるのは倫理にもとる、とのことである。

龍斗は再び『暁』を抜き、左手の小指と薬指に刃を突き立てた。赤い液体が球を作っていくのを見届けると今度はその刃を女性2人に向けた。差し出された左手を裏返し、その小指の自分とほぼ同じ位置に傷をつける。赤い血が出てきたのを見て鞘にしまう。

龍斗は血が滲む2本以外の指を折り畳み、向かって左側にいた女性の小指に自分の小指を、もう1人の女性の小指には薬指をそれぞれ重ねる。指を離すと、女性達はそれぞれ自分の小指と重なった龍斗の指を口に含み、ついている血を舌で舐め取った。口から指が離れ2人の喉が動く。一瞬躊躇いを見せた龍斗だったが、彼女らに倣って1人ずつ同じように血を舐め取り、それを飲み込んだ。龍斗の動きを確認した女性2人は口を開いた。

『盟約神ミスラ、契約神ヴァルナの名において』

「レイア・フォルデント・マーティスが誓約す」

「ミーア・フォルデント・マーティスが誓約す」

『我が身、我が心、我が魂、我が全てを汝に捧ぐ』

2人が言葉を紡いだ後、3人の体が強い光に包まれた。薄く紫がかったその光が消えると同時に、2人につけられていた黒革製の腕輪と首輪が地面に落ちた。

「真血の契りの儀式はこれにて終了です」
男3人が近づいてきた。黒髪の男に目を向けようとした龍斗だったが、途中で動きが止まった。その様子に男が首を傾げる。
「如何なさいましたか？」
「あんたらはそれ、外さなくていいのか」
龍斗が指差したのは男の手首。男は両手を広げ、手の甲を見せながら上に上げる。手首にある黒革を見て合点がいった男は苦笑した。
「確かに同じ方法でも外せますが、あまりお勧めできない方法ですし……そうですね、切り落とさない限りは――」
「ならそのまま動くな」
突然龍斗が男の眼前に現れた。あまりに急なことだったので、幾筋かの光と風圧が通り過ぎる間、男の眼は皿のように丸くなったままだった。その間に金髪の男、赤髪の男も順番に同じ感覚を味わっていた。
数秒の後3人が正気に戻った。信じられないといった様子の顔で、握ったり開いたりを繰り返しながら両手を見る。彼らの手首にあるはずの黒革の腕輪は、既に大地の上に落ちていた。
「嘘じゃ……ないよな……！！」
「外れた！！　腕輪が！！」
「フ、フフフ……何たる僥倖（ぎょうこう）」
三者三様に喜ぶ様子を見た龍斗は思わず口を歪めた。その右手にはいつの間にか抜かれた脇差を握っている。
「無常の闇を斬り裂かん……どうやら上手くいったようだな」
「しかし、よろしいので？」
未だ興奮冷めやらぬ様子で、しかし聞きなれた口調で黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は脇差を鞘に納めながらそれに答えた。
「構わない、というか俺は奴隷制度と相容れるつもりはないからな。良かったなあんたら。これで晴れて自由の身だ」
その声は無意識のうちに低くなっていた。

ほとぼりが冷めた頃、金髪と赤髪の男は重ね重ね龍斗に感謝の言葉を述べながら洞窟を出ていった。今は黒髪の男を見送ろうとしているところである。元々彼らと一緒に出るつもりは毛頭なく、盗賊が溜め込んだ物品の中で剣が挿してある樽の辺りを物色していたのだ。何か気になる武器でもあるのかと思っていた龍斗だったが、すぐに見当違いだと分かった。彼が手に取って見ているのは細長い革製の袋。つまり剣を納める鞘を探しているのだと気付いたからである。彼が龍斗たちの方を向いた。丁度良いものがあったのか左手には皮袋に入った剣を持っている。

「この度は命をお救い頂き誠に有難うございました。重ねて奴隷身分からの解放。不肖この私、何とお礼を申し上げて良いものか皆目見当もつきません」

「おいおい、そんな大層な挨拶いらねぇって。出会いは一期一会、だから誠意を尽くしたまでだ」

龍斗が苦笑しながらそう言った。黒髪の男はいつもの不敵な笑みを浮かべているだけである。

「フフフ、左様でございますか。では最後に1つだけ。彼女達の事、宜しくお願いいたしますよ」

「ああ、ちゃんと次の町まで護衛していくさ」

「……フフフ、ええ、お願いします。そうそう、洞窟から出て右に少し歩いたところに馬小屋がございました。馬車もありましたのでどうぞご利用下さい。では、私はこれで失礼させていただきます。ご縁があればまた、お会いしましょう」

黒髪の男は右手を左胸に当て、恭しく一礼して去っていった。

(結局あいつが一番分からないんだよな。口調から態度から、常人とは違うんだが……まあいい、どうせ俺はこっちのことをほとんど知らないからな)

最後に聞いておいてもよかったのだが、龍斗は些細なこととして流すことにした。

「さて、あとはあんたらか。ここからじゃ、オリジアよりも次の町に行く方が早いんだよな……折角馬車があるってんなら使わせてもらうかね。それで良いよな？」

振り返り、女性２人の顔を見る。

『承知致しました、ご主人様』

「……は？」

口を揃えて述べられた言葉に龍斗は違和感しか覚えなかった。

第１５話：無常の闇を斬り裂かん　６（後書き）

気付けばお気に入り登録件数が増えている。評価ポイントも増えている。

読んで下さっている皆様、本当に有難う御座います。黒髪黒目の男ではありませんが、本当に「何とお礼を申し上げて良いやら皆目見当がつきません」ｗｗ

拙い作品ですがよろしくお願いします。

第16話：果たしてこの濃霧に茜を射せるのか

「さて……んー、じゃあ、あんたらにしか出来ない事を頼むとするか」

龍斗達3人は馬車で街道に出た後、丸2日かけてアサンの森を抜けた。今は森を抜けた先にある国、エルグレシア王国内にある旅亭の一室にいる。関門を通った時には既に空が赤く染まっていたため、今日これ以上動くのは無理だと判断したのだ。

龍斗の言葉を聞いた女性2人は身を固くした。男性が女性奴隷に命じることなど基本的には1つしかないからだ。だがその予想は見事に裏切られた。

「先に言っとくけど、夜伽の相手しろとか言わんから、そう身構えるな。取り敢えず俺はあんたらの情報が欲しいんだがな」

「私達の……？」

「ああ、今後どう動くかに関わることだしな。てか、いつまでそこに突っ立ってる気だ、椅子あるだろ」

旅亭の部屋はたいして広くはない。龍斗の傍にあるシングルベッド、反対側には壁に寄せられている木製の机、その下の空間にピッタリ納まるように作られた背もたれの無い木製の椅子が2つ。家具と呼べるものはそれだけである。というより、立ち歩くスペースを考えるとこれ以上は置こうにも置けない、といった感じである。

龍斗は椅子を引っ張り出し、座るように促した。それだけで歩けるスペースが半減する。

「え、あの、しかし、私たちは奴隷ですので」

「いいから座れ。そっちが良くても俺が話し辛い」

困惑する2人に軽い苛立ちを含め、命令口調でそう言った龍斗。それを聞いた2人は戦々恐々といった様子で椅子に腰かけた。奴隷にとって主の命令は絶対である。幾ら意に沿わぬことでも、命令されたことには従わねばならない。逆に命令が無ければ勝手に動くこ

とは許されない。故に一般常識で言えば奴隷というのはモノ扱いである。その常識を持つレイア、ミーアにとって龍斗の行動は不可解だった。もっとも龍斗には何かおかしなことをしているという自覚は無い。奴隷の扱いという大陸の常識を知らず、ただ単に対等な人間として扱っているだけである。そもそも彼には彼女らの所有者であるという自覚がないのだが。

龍斗はベッドの上で胡坐(あぐら)をかいて座った。鳶色と青色の目を正面から見据える。

「まずあんたらの事を聞きたいんだが……どっちがどっちか忘れたけど、確か姓が一緒だったよな。つーことは姉妹か？」

「あ、はい。私はレイアと申します。歳は今年で１５になります」

「わ、私はミーアです。年は１３です」

透き通るような金髪に鳶色の目をした姉のレイアからは、とても同年代とは思えない大人びた風格を感じ取った。一方、妹ミーアの方は年相応といった感じで、全体的にまだ幼さが残っている。

（なるほどな、性奴隷用の呪いを掛けられただけのことはあるわ）

改めて彼女らを見ると、髪や目の色、雰囲気、胸の大きさ等細かいところでは差があるものの、どちらも共通して言えることがある。即ち綺麗、可愛い、美しいと形容される容姿の持ち主であることだ。

「で？　２人は大陸出身か」

「えっと、それはこのランドレイク大陸出身という事でしょうか？」

「ああ、そうだな」

「でしたら違います。私達は別の――俗に北方大陸と呼ばれる大陸の出身です」

「え、ちょっと待て、大陸ってここ以外にもあるのか！？」

龍斗は思わず身を乗り出した。まさかランドレイクのような巨大な陸地が他にもあるとは夢にも思っていなかったのだ。今まで発言していたレイアは龍斗の様子に少し気後れしたが、何とか気を戻して質問に答えた。

「はい……東西南北そして中央にそれぞれ１つずつ大陸がある、と

教えられました。因みにこのランドレイク大陸はその内の1つ、東の大陸にあたります」

「そうか……いやぁ、広いなこの世界は。人間が住むには広すぎるんじゃないかねぇ」

龍斗は詠嘆の声を上げながら態勢を戻した。腕を組んで上を向いたまま首を横に振る。が、しばらくしてあることに気付き、視線を2人に戻した。

「待てよ？　他所の大陸からここまでどうやって来た？」

2人の目を交互に見る藍色の眼は、最終的に口を開いたミーアの青目で止まった。

「大きなガレオン船に、帆船に乗ってきました。お父さん、お母さん、リノにアルトにダルジオ、アレン、ポルドール……護衛の兵士や従者と共に何ヶ月も掛けて……なのに、なのに……」

ミーアは途中から顔を下げ、両手で顔を覆いながら肩を震わせた。時折すすり泣く声が龍斗の耳にも届いてきた。レイアはそんな妹の肩を抱いてなだめている。ただならぬものを感じた龍斗はレイアに問う。

「……道中、何かあったのか」

「はい……ランドレイク大陸に向かう途中、私達が乗る船は海賊の襲撃を受けました。勿論、対策は十分にしておりました。善戦しましたがしかし、相手の力量が上回り……結果、ガレオン船は海賊に乗っ取られました。その時に……父を始め多くの方が殺されました。母や従者の一部は……奴らに犯された後に……っ、私たち姉妹と残りの従者、生け捕りにされた兵士たちは2〜3の部屋に詰め込まれました。そして大陸に着くと同時に……生きている者は全員奴隷商人に売り渡されたのです」

ミーアよりも気丈なレイアも途中からは目を固く閉じ、声を震わせながら語った。語り終わると唇を噛み、涙を流すまいと瞼（まぶた）を更に固く閉じる。だが思いとは裏腹に彼女の眼尻から一筋の滴（しずく）が流れ、妹と同様に肩を震わせた。

……龍斗はそれをただ見守るしかなかった。

第１６話：果たしてこの濃霧に茜を射せるのか（後書き）

このタイトル、正直言って書き手である私自身に対する問いではないでしょうかね。感情移入しすぎたのかな？↑

うーん、こういう会話だけの部分って結構難しいなぁ……精進あるのみですね。はい。

第17話：翌日

翌日、3人は朝から馬車に乗って移動していた。街の通りは馬車のための道というわけではないのであまりスピードを出す事は出来ない。龍斗たちも他の馬車と同じようなスピード、人が歩くより少し早い程度でゆっくりと進んでいた。もっとも、龍斗達は周りに合わせて速度を落としているわけではない。馬車があまりに重すぎてそれ以上速度が上がらないだけなのだ。本来オリジアから出てエルグレシア王国に着くまで馬車で2日かかるというアサンの森。その途中から出発したにもかかわらず王国に着くのに2日かかった原因もここにある。

何故そんな荷馬車が重くなっているのか。それはレイア、ミーア曰く重量オーバーだからである。ではなぜ重量オーバーなのか。それは盗賊団が抱えていた物品を龍斗が全て積み込んだからである。武器や鎧を始め、デッツの盗賊団は様々なものを溜めこんでいた。その中には宝石類など明らかに高額と思われるものも混ざっていた。このまま寝かせておくのももったいないということで龍斗が無理やり積み込んだのである。因みにこの時、レイア、ミーアの2人は龍斗から適当なレザーアーマーをつけるようにと言われた。薄汚れた真っ白な服だけではあまりにみすぼらしくて目立ってしまう。かといって盗賊団の隠れ家に女性用の服など置いてあるはずもない。仕方が無いので龍斗はそれをつけさせ、見た目だけ冒険者として誤魔化そうと考えたのだ。因みにその後龍斗は一度も外せと命令していない。故に今の今まで、夜寝る時ですら彼女達はレザーアーマーを着けたままであった。

一行の馬車は銀行の横にある小屋のような場所に止まった。龍斗は馬車から降りると、近寄ってきた男に声をかけた。

「買い取りってここでいいんだよな？」
「はい、左様でございます」
「なら馬車の中身全部売りたいんだけど」
揉み手をしながら笑顔でやってきた男は失礼します、と断って馬車の荷台にかかる幕を開けた。
ランドレイク大陸の銀行は商人ギルドが経営している。そして大陸全土の金の動きを掌握しているわけだが、それだけではない。当然ながら商人は元々物を売買してお金を儲ける人間で、物の動きも掌握していると言える。そんな商人達が作った銀行だ、ただ金を動かすだけではなく普通の商人のように物の売買を行う場所も付属しているのだ。
これは普通の商人としての側面なので銀行でしか物を売れないなどということはない。寧ろ個人商店に行って売った方が物によっては銀行よりも高く買い取ってくれることもある。……逆に悪徳商人に安く買いたたかれる心配もあるが。龍斗の場合は良い意味で言えば効率を重視した。悪く言えば店回りが面倒だからである。
承認は暫く顔を動かして中身を確認した後、再び龍斗に向き直った。
「申し訳ありませんが、少々お時間を頂きませんか」
「ああ、別に急ぎってわけでもないし、銀行にも用があるからな」
「では鑑定が終了次第お呼びいたします。失礼ですが、カードをご提示願えますか」
龍斗は呪文を唱え、カードを出して相手に渡した。隅々まで目を通した男は両手でそれを返してきた。
「冒険者ギルド所属、東龍斗様ですね。では、また後ほどご連絡させていただきますので」
そう言って商売人がよく見せる所謂営業スマイルをたたえた男に背を向け、龍斗はレイア、ミーアを呼んだ。
「レイア、ミーア、銀行行くぞ」
『承知しました』

馬車から降りた2人は既に歩き出していた龍斗の一歩後ろまで移動し、歩調を合わせて歩いていった。と、突然龍斗は立ち止まった。ほぼ同じタイミングで後ろの2人も歩みを止める。何だろうと不思議に思っていると龍斗が振り向いて男に問いかけた。

「そういや、その馬車自体も売れるのか？」

「ええ、まあ買い取りは可能ですが」

「んじゃ馬車も買い取ってくれ」

「分かりました。では、いってらっしゃいませ」

その言葉を背に3人は銀行へと入っていった。

「東龍斗様、いらっしゃいますか？」

銀行内に女性の声が響いた。長椅子に腰かけていた何人かが反応したが、チラッと一瞥しただけで視線を戻す。銀行ではよくある光景である。呼ばれた者とそれに従う者が銀行員の前まで移動した。

「ああ、はいはい、俺ですが」

「鑑定が終了しましたのでお知らせに。……そうですね、4番窓口が空いておりますので、そちらまで」

3人は4番窓口まで行ったが、そこに銀行員はいなかった。あれ、と思っていると先程龍斗を呼んでいた銀行員がその場所に座った。

「では鑑定結果を報告いたします。幌馬車が一台、ナイフが10本、レザーアーマー4着……」

「あー、その辺省略でいいよ、結果だけ教えて」

「そうですか、では買い取り価格の合計は……400万8044ドルク、です」

その金額にレイア、ミーアは息を飲んだ。だが龍斗は全く動じなかった。未だにこちらの金銭価値に慣れていないし、そもそも彼が最初に聞いた自身の貯金額より少ないため、ああそうとしか思わなかったのだ。額を聞いた後、龍斗は振り返って2人を見た。

「さて、じゃあんたら2人のカード貸して」

「え……承知しました」
『マイカード・オープン』
実は鑑定が終わるまでの間に、２人に銀行口座とカードを作らせていたのだ。当然戸惑っていたが、耳元で命令だと告げると２人は従わざるを得なかった。出来て間もないカードを受け取った龍斗はそれを銀行員に見せて言った。
「その金さ、この２つのカードに分けて入れることとって出来るかな？」
「可能ですよ」
「じゃあ幾らだ、２００万ずつ？　平等に入れといて」
「分かりました。ではお預かりします。レイア・フォルデント・マーティス様、ミーア・フォルデント・マーティス様、それぞれ２００万４０２２ドルクですね」
「ついでに……マイカード・オープン」
龍斗は自分のカードを出現させ、銀行員の前に出した。
「俺の口座から２人の口座に、それぞれ１００万ずつ、動かせる？」
「……分かりました。２００万ドルクですね」
額に一瞬驚いた銀行員だったが、すぐ事務的に処理を始めた。だがレイア、ミーアはまだ目を丸くしていた。
「あ、あの」
ご主人様、と言いかけたレイアだったが、その口は龍斗の人差し指と眼力で止められた。黙って見ていろ、という意の視線はミーアにも向けられた。彼女もその意を察したらしく、開いた口を閉じて小さく頷いた。
「東龍斗様」
銀行員に声を掛けられ、龍斗はそっちに顔を戻した。３枚のカードが龍斗に返される。
「ではこちらをお返しします。東龍斗様７３４万２０１１ドルク、レイア・フォルデント・マーティス様、ミーア・フォルデント・マーティス様それぞれ３００万４０２２ドルクです。ご確認ください」

「だってよ。じゃあこれで」
「有り難うございました。またのお越しをお待ちしております」
カードをしまうと龍斗達3人は銀行を出た。馬車も一緒に売り払ったために、宿までは歩いて帰るしかない。その道中で龍斗はある看板に目を止めた。寄り道してくかと言って店内に入っていく龍斗。女性2人も入っていくとそこは仕立て屋だった。龍斗が2人の方を向いて言った。
「んじゃまあ2~3着を選ぶといいよ。金は出しとくから」
「！！　ご、ご主人様、そ、そこまでして頂かなくても……！！」
「あ、あの、さっきのお金がありますし……」
「気にすんな」
「しかし……」
「じゃあこれは命令だ……それと、昨日辛いこと思い出させちまったからな。詫びのつもりということで」
そう告げられた2人は黙るしかなかった。その後2人は店員によって採寸され、1つ2つ生地を選んで注文した。ミーアの方はレイアが選んだよりも少し上等そうな生地だったが、それでも遠慮して選んできたような感じだった。龍斗は上等な方の生地で3着ずつを注文し、現在泊まっている旅亭の名を伝えて店を出ていった。

第１７話：翌日（後書き）

軽いからか直ぐ３０００字いきました。心理的なもので取り敢えず分けてみます。まとめた方がいいのかなとも思ったんですがね……

第１８話：龍斗の危機

「……申し訳ございません、ご主人様」
「申し訳ありません」
旅亭に戻り椅子に座った龍斗は首を傾げた。部屋に戻ってきた途端に２人が頭を下げる意味が分からなかったからだ。龍斗は素直に聞くことにした。
「何だ？　２人して……あ、その前に顔上げろ」
「はい……その、ご主人様は私たちの事をどうされるおつもりですか？」
「どうって、奴隷身分から解放したんだから、あんたらが自立するまでの面倒を見る。約束だしな」
解放した黒髪の男との約束のことを持ち出す龍斗。それを龍斗は今言ったような意味だと解釈していた。だがそう思っていたのは龍斗だけだった。
「申し訳ありませんが……私達は真血の契りで隷属を誓いました。それはつまり、己の全てをご主人様に捧げたということになります」
「……私達はご主人様に永久隷属する身です」
「……何だと！？」
驚きのあまり龍斗は立ち上がって声を張り上げた。それに一瞬体を硬直させた２人。レイアの鳶色の眼が藍色の眼を捉えた。だがそれも一瞬のことで、すぐに視線を下げてしまった。
「真血の契りは盟約神ミスラ、契約神ヴァルナという２つの神の名に懸けて誓うものです。神の名に懸けて誓った契りを破る事は出来ません」
「……マジか……ハァ」
龍斗は力が抜けたように椅子に座り直した。暫く天井を見上げていたが、やがて２人に目を向け直した。
（後を引くとは覚悟してたが……まさか永久隷属とは……仕方ない、

正直なところを話しておくか）

そう考えた龍斗は口を開いた。

「……悪いが俺には従者は必要ない。俺が元いた国、大和では俺は忍として生きてきた。忍の最優先は弱点を極力減らす事。幾ら力があっても弱点を突かれたら終いだからな。だから忍は情を無くす。たとえ幼馴染が隣で死にかかっていようと見捨てる……俺はそういう人間なんだ」

2人はただ黙って聞いていた。忍など聞き慣れぬ表現があるものの、何が言いたいのかは察しがついた。

「そういう訳だから俺は他人を従えるような器じゃない。取り敢えず考えといてくれないか、俺から離れて暮らしていく方法を。こっちはあんたらを解放するように言えば……！！　ぐっ、あぁぁ……ちっ、こんな、時に……うあぁぁ……！！」

龍斗は突然椅子から転げ落ちた。頭を抱え、うめき声を上げながら床で身悶える。ただならぬ容態に驚く2人。

『ご主人様！？』

「！！　来るな！！」

「し、しかし！！」

龍斗の身を案じた2人が近付こうとするのを左手を出して止めた。龍斗の顔を見た2人は背筋が凍った。苦悶の表情を浮かべる龍斗の顔。だがその目は明らかに異常だった。右目はこの数日ですっかり見慣れた藍色の瞳。だが左目は充血し、血のような真紅の光を放っていた。その光には人間らしい理性など欠片もない。あるのは獣が持つような、あるいは怪物が持つような、本能的な欲しか感じ取れない凶暴な目である。

「物憑きだ……忍を目指す者に多いらしい……くっ、そして俺も例外じゃない……」

「そ、それはどのような病ですか！？」

ミーアが叫ぶように言った。本当は龍斗の傍まで行きたいのだが、来るなと命令されている以上そこから近づく事は出来ない。レイア

もまた同じである。
「ぐ……病じゃない、分からないかもしれないが、こいつは、……亡霊とか妖怪の類、が……俺の体を、のっ、取ろうとしてる……ぐぁ」
〈女だ！！〉
龍斗の方から2つ目の声が聞こえてきた。龍斗の声ではない。それよりも低く下品な声。まるで私達が出会った奴隷商人のようだと2人に鳥肌が立つ。
「まずい、逃げろ！！」
〈犯す！！〉
「早く！！」
〈殺す！！〉
「この……」
〈喰らう！！〉
龍斗が何かを言う度に謎の声も主張を繰り返す。片膝をつき、息を荒げ、歯を食いしばる龍斗の様子にレイアは覚悟を決めた。
「早く……視界から、消えてくれ……ぐぁ……出ないと……！！」
〈喰らい尽くす！！　ひたすら殺す！！　殺す！！　殺――〉
龍斗の中で時間が止まった。先程までの痛みも、声も、何も感じなくなった。いや、1つだけ感じるものがあった。温度だ。龍斗を包み込むように背中に回された腕の感覚。そして左半身に感じる熱。肩甲骨の辺りには胸の双丘が当たっているが、今の龍斗にそこまでの余裕は無い。驚きに目を丸くした龍斗はそのまま視線を左に向けた。そこには透き通るような金髪に鳶色の目、他ならぬレイアの顔があった。
「何故……逃げろと……」
「申し訳ありません、命令に背いてしまって……しかし、御主人様の事は我が事です。御主人様は全てを1人で抱えてらっしゃいます……理由はおぼろげに把握しましたが……私達では、駄目ですか？
私達では、支えることすら出来ませんか？」

少し震える声で台詞が止まると、今度は右側に熱を感じた。見ればミーアが姉と同じように身を寄せていた。
「私も、頑張ります……お姉ちゃんよりは頼りないかもしれませんが……」
「2人共……くっ……マイカード・オープン」
再び頭痛に襲われた龍斗は自身のカードを出現させた。正面に移動してきた2人を見ながら言った。
「悪いが、2~3日の間、この部屋には一切誰も入れるな。お前ら2人も入ってくるな。何があってもだ……それ、と……お前らは自由に生きろ。奴隷じゃなく、俺がいなくても自分で考え行動する、レイア、ミーアとして生きろ!!　……っ、俺の金は好きに使え。これが最後の命令だ」
『そ、それは……!!』
「いいから出ていけ!!」
龍斗の怒鳴り声に従い、レイア、ミーアは部屋を出た。錠を掛ける音が鳴ると、堰を切ったようにミーアが泣き始めた。うずくまる妹を腕に抱きながらレイアも静かに涙を流した。
その後暫く、この旅亭には呻き声と泣き声が空しく響きわたった。

第１８話：龍斗の危機（後書き）

一日２度更新…だと…正気か↑＾＾；

第１９話：その後

その日の朝は珍しいことに快晴だった。窓から黄色い光が差し込み、ベッドに寝ていた龍斗を照らす。何処から飛んできたのか雀の鳴き声がよく響く。そんな平和の象徴ともいえる朝の中で龍斗は目を覚ました。はっきりしない視界で見えるのは木製の天井のみ。

（ああ、この景色にもだいぶ慣れてきたな……それと、このベッドの感覚も……ん？）

龍斗は文字通り跳び起きた。掛け布団を跳ね除け、片膝をつくように家具の隙間と言った方が正しいような床で構えを取った。だがそこで有るはずのものが無いことに気付いた。素早く辺りを見回す。それが机の上にあるのを見つけ、素早く体を起こして手に握る。

だがそこで龍斗は気付いた。

（誰かいる）

気配を感じた龍斗は反射的に左手に握る棒から刃を抜き放った。いつもなら逆手に持つことが多いが、今回は普通の刀剣と同じように持っている。だがその刃は相手の喉笛に触れるか触れないかというところでピタリと止まった。

その先には、脇差『暁』の刃の先には、突然のことに驚き目を丸くしながら、両手を頭上に上げているミーアの姿があった。

その後、龍斗は脇差を鞘に納め、目に涙を溜めたミーアの頭を撫でながら部屋を出た。出た瞬間にレイアと鉢合わせし、脇差と同じくらい鋭い眼で睨まれたが、事情を説明して何とか抑えてもらった。

空腹感を覚えた龍斗は１階の食堂に降りて適当な席に着いた。レイア、ミーアは相変わらず直立不動で待機しようとしていたので命令して反対側に座らせた。

「……にしても、やけに静かだな」

龍斗が辺りを見回すと、食堂内には3人以外誰もいなかった。不思議に思っていると不意に画面が褐色に染まった。
「そうさねぇ、どっかの誰かさんが亡霊騒ぎ起こして叫びまくってたからねぇ、客は全員恐れをなして逃げちまったんだよ。まったく、商売あがったりだ」
「す、すいませんでした！！」
瞬発的に立ち上がった龍斗は直ぐに腰から折れて頭を下げた。相手はこの旅亭の女将だったのだ。
「えと、ちゃんと弁償しますので――」
「あんた、東龍斗ってので間違いないかい？」
「！！……何故それを？」
旅亭は基本的に宿泊客の名前などいちいち聞かない。人数が多すぎて忘れることもあるし、昼夜問わず食事だけを利用する客も多い。宿泊客のことは止まっている部屋の番号を使って何号室の人、と呼べば事足りる。龍斗は宿を取る時にする必要のない名乗りなどしていない。故にこの女将が龍斗の名を知る機会は無かったはずである。だがその予測は外れた。
「うちら商売者は全員商人ギルドに入ってる。けど、商売つったってピンキリさ。だからギルドの中で更にグループを作った。武器屋なら武器屋グループ、旅亭なら旅亭グループって感じでね。特に旅亭のグループメンバーは他のグループメンバーと自由に通信できる手段を持っている。そうすりゃ客との間に信用が出来る。1人で全く得体の知れない宿を探すよりか仲の良い主人が勧める宿の方が安心できるだろう？」
龍斗が頷いた。褐色の肌を持つ初老の女将は満足げに頷き返した。
「でだ、あんたのことはデイビスとこから聞いてるんだよ。『迷惑料を払われる方が迷惑だから、もしそういうことがあったらあんたからは受け取らないように』てねぇ」
龍斗は唖然とした。まさかデイビス夫妻とここの女将が繋がっていたとは思わなかったからだ。女将はそれを見てしたり顔を作った。

「というわけで、あんたからは迷惑料は過度には要らない。少しはもらうよ、あんたら3人の宿泊代に加え、1人部屋5日分。もしそれ以外で払いたいってんなら……そうだね、『除霊したからもう安心です』て張り紙でもしてもらおうかねぇ。ま、その前に冷める前に食べちまいな」

豪快な笑い声と共に女将は厨房へと去っていった。テーブルに目を戻すと、さっき女将が持ってきた料理の皿が並んでいる。

「さて、食うか。頂きます」

そう言って手を合わせると、龍斗はパンを手に取って食べ始めた。しかし暫くして2人の様子を見た龍斗は軽く諌めた。

「何やってる、さっさと食えよ。冷えたの食ったって美味くないぞ」

「い、いえ、私達は……」

「奴隷がご主人様と同じ席で、まして同じ物を食べるわけには……」

今まで何度か食事の機会があったが、2人が龍斗共に食べることは無かった。その理由を龍斗は今初めて知った。

（またそれか……奴隷奴隷って、命令せんかったらマジで動かねぇ……なら）

龍斗はあることを思いついた。思い立ったが吉日と龍斗は直ぐにそれを実行した。

「そうか、なら選択権を与える。すぐに飯を食うか、食わずに腹を空かせたまま過ごすか。どっちでもいいぞ。俺はどうもしない。さ、選べ」

暫くの間、龍斗は2人の反応を見ていた。命令は命令だが、その中身は自分の意志で選ぶこと。逡巡する様子が何とも可笑しかった。龍斗の予想通り、まず空腹に負けたのはミーアだった。彼女が食べ始めるのを見て、こちらの反応を伺ってから漸（ようや）くレイアがパンを手に取った。出会ってから初めての3人での食事だった。

食事を終えた3人は龍斗の部屋で腰を下ろしていた。前回と同じ

で、レイア、ミーアが椅子に座り、龍斗はベッドの上で胡坐をかいている。だが表情は、3人共以前より固いものとなっている。無表情の龍斗が口を開いた。

「さて……何故命令を無視した。部屋に誰も入れるな。お前らも入ってくるな。そう言ったはずだ。俺はベッドで大人しく寝た記憶はないぞ」

「はい、確かにそう承りました。なのでご命令通り3日間、部屋の中には誰も入れませんでした。私達がが部屋に入ったのはその後、4日目の朝です。ご主人様の声が途絶えていましたので何かあったのか、と」

緊張した面持ちの3人だが、レイアは毅然とした口調でそう言った。ミーアは少し不安を持っていたが、姉の言葉に追従するように強い意志をたたえた目で龍斗を見る。龍斗は相変わらず無表情のまま。

「……なるほど、違反はしていないか。だが何故見捨てなかった。あの異常さを目の当たりにしてなお。奴隷だからとか言うなよ、自由な人間として生きていけと言ったはずだからな」

「……はい。……ですのでこれは私個人の意思で行った行為です。個人的にお助けしようと思ってしたことです」

「わ、私もです！！　……それに、今まで何の役にも立てなかったし……」

「……物憑きが来る前に話したことも覚えてるな？」

「はい」

「……ハァ、もういいや、結果的にあんたらには何も無かったようだし」

そう言って龍斗はベッドに寝転んだ。頭の上で手を組んでいるその姿に女性2人は戸惑いを隠せなかった。気まずい空気を何とかしようとミーアが口を開いた。

「あ、あの、1つ聞いていいでしょうか？」

「ん、何だ」

「その……物憑き、とは一体、何なのでしょうか？」

第２０話：物憑きと……

「その……物憑き、とは一体、何なのですか？」
「！！　ちょっ、ミーア、それは……！！」
単刀直入に質問してきたミーアに対してレイアが慌てた。恐らくは主人である龍斗にとって苦となるもの。それを口にさせるのはまずいと考えたのだ。だが龍斗が止めたのはレイアの方だった。
「あー、レイア、別に構わないから。分からなくて当然だからな、どうせならちゃんと教えとこう」
「……分かりました」
妹の方を向いていたレイアは姿勢を正して座り直した。龍斗も腹筋を使ってベッドから体を起こし、胡坐の状態に座り直す。
「始めに確認したいんだが……亡霊とか妖怪とかいうの分かるか？」
「ヨウカイ、は分かりませんが……亡霊というのは、死後人間の魂が現世に留まり、実体化する『ゴースト』のことですね？　それならどこの大陸でも伝説が残っております。実際に見た人もいるようですが、あまり信憑性のない話ばかりです」
意外なことに姉よりも妹の方が早かった。龍斗は首を縦に振った。
「そうか、こっちでは亡霊（ゴースト）か。早い話そのゴーストが俺に憑りついて俺の体を乗っ取ろうとしていたんだ。それが『物憑き』だ」
そう説明するとレイアはにわかに信じがたいといった様子で眉を顰めた。一方ミーアは顔を青くした。
「そ、それって、ゴーストに呪い殺されるということですか」
「いや、死にはしない、こともないのか。あいつが勝って俺の体を完全に支配するようになれば、今こうしてあんたらと話してる東龍斗という人格は消えるからな。２人共聞かなかったか？　俺じゃない、誰か別の奴の声を」
２人が首を縦に振った。その体には鳥肌が立っている。
「なら、奴が何を言ってたかも聞いてるよな。『殺す』『喰らう』

『犯す』……奴はそういう欲の塊だ。正直あんたらがいない方が抑えやすかった。故に命令でも何でもいいから出ていってもらった。……すまなかった」

「い、いえ、奴隷が命令を聞くのは当然のことなので」

「そ、そうですよ！！」

頭を下げる龍斗に2人が慌てて声を出す。立ち上がろうとした2人だったが、続く言葉に力を失った。

「あんたらを巻き込むのは避けたかった。他の誰かを巻き込むのだけは、避けたかった」

部屋の空気がさらに重みを増した。まるで肩に鉛を乗せているように感じる。かなり逡巡した様子のレイアが口を開く。

「……やはりご主人様が抱えていらっしゃるものは、1人では重すぎるものですね……でも私達の力ではお役に立てないのですよね……」

そう言って顔を伏せた。再び鉛の空気が支配するかと思われたその時、龍斗の言葉が空気を変えた。

「いや、役には立ってると思うぞ」

「……え？　で、でも……」

驚きのあまりレイアは声が出なかった。ミーアは途中で言葉を止めたが、2人のは同じことを思っていた。

（私達は何もしていないのに……）

それを察した龍斗は苦笑しながら言った。

「流石に今回は俺もやばかった。奴に飲み込まれるか、そうでなければ俺ごと死んでいただろうな。何せ、俺は気付けで自分の手首を切っていたんだから」

レイア達は4日目の朝、龍斗の部屋に入った時の事を思い出した。部屋中に鉄臭さが漂い、床には右手に脇差を持ち、左手首から血を流す龍斗の姿。彼が死んだと思ったミーアが泣きそうになるのを制

し、レイアが脈を測ったところで初めて龍斗がまだ生きていると確認できた。流れた血の量から考えると少しでも遅れていたら危なかったかもしれない。

「……それでも、前の俺ならしなかったな。奴との戦いにてめぇの命かけるなんてな。今回それが出来たのはあんたらのことが頭にあったからだ。自分でもよく分からんが、奴があんたら2人を標的にした瞬間、俺は躊躇いなく刃を抜いてた。初めて知ったよ。血が抜けていくのと同時にあいつの力も弱っていった。直接じゃないが、今回あんたらは物憑きから俺を救ってくれた、命の恩人なんだよ」

ありがとう、と龍斗は再び頭を下げた。だが彼が顔を上げると2人は同時に溜息をついた。レイアが言う。

「物憑きを払うお役に立てたと言って下さるのは恐縮ですが、そのお陰で失血死寸前だったわけですから。結果から申し上げると喜べません」

「ふむ……そういやそうだな。まあ、終わり良ければ全て良し、てことで」

「全然良くありません！！」

龍斗の言葉にいち早く反応したミーアが叫び、室内の時間が止まった。

「ク、ククク……」

「フフ、フフフフ……」

誰からともなく笑いが始まった。

「……ところで、その、私達はどうすれば良いのでしょうか」

場が治まったところでレイアが曖昧な質問をしてきた。龍斗は首を傾げた。

「ん？　どういうことだ？」

「いえ、その……ご主人様はご自分の死を予想されて……そうなれば命令する者がいなくなる私達の身を案じてあのような命令をされ

たのですよね？」
「その、結果的にそうならなかったのですから……私達は奴隷です。ご主人様にお仕えする義務が――」
「あー、それなんだがな」
龍斗は渋い顔で頭を掻いた。そして続ける。
「俺は自分が言ったことの責任はちゃんと持つ主義だ。だからあの時言った最後の命令ってのは撤回しない。これからどうするかは自分らで決めてくれ。俺は……つーか、最初からだけどあんたらを奴隷とは思っていない。ま、それだけだ」
龍斗がそう言うと姉妹はひどく困惑した様子でこちらを見ていた。やがて後ろを向いて2人でこそこそ話し合いを始めた。『即応の霧』を発動させて会話を聞き取ろうかとも思った龍斗だったが、結局それをすることは無かった。

「ご主人様、よろしいでしょうか？」
「んあ？　ああ、結論出たか？」
腕を組み壁にもたれていた龍斗は重心を前にずらした。姉妹は互いを見ると最終確認で頷き合い、声を揃えて言った。
『私達は最後までご主人様にお仕え致します。有事の際には全力でお守りいたします』
「……ハァ、まさかこんなことになるとはなぁ。後悔先に立たず。言っとくが、命の保証はしないぞ」
「構いません。奴隷に身を落とした時から覚悟はしていました」
「それに、私達にはもう失うものはありませんし」
藍色の眼が2人の顔を注視した。そこには迷いが無かった。完全に腹を括り、覚悟を決めた者の顔があった。そこに嘘偽りのないことを見て取った龍斗は口を歪めた。
「フフ、ああそうかい。ならもう何も言わない。たださっきも言った通り、あんたらを奴隷とは見ていない。そして、俺は女にほいほ

い死んでもらうほど薄情じゃない。仕えてもらおうとも思っていない。あんたらに守られるほど弱くもないが……どうするか……んー……なら、家族みたいなもんとして扱うかね」

「え、家族……ですか！？」

「そ、そんなもったいない――」

「なら選択肢を与えよう。俺と対等の人間としてついてくるのか、ここでお別れか」

「うっ……」

レイアが言葉を詰まらせた。再び視線を交わした姉妹はまた頷き合って言った。

『承知致しました』

その返答に大きく頷いた龍斗は言う。

「なら色々と改善しないとな。まず対等な人間なんだから俺をご主人様と呼ばないこと。それから人間としての全権があるから、意に沿わなかったら楯突いてよし。食事も態々（わざわざ）分ける必要もないし……そうかこれで妹２人か。ミーアが１３、レイアが１５か。あ、俺も……あ」

突然並べられる要求に慌てていた２人だったが、奇妙な声を上げたところで龍斗に注目した。彼はレイアに聞いた。

「今日って何日だ？」

「確か、１０月３０日ですが」

「あー……自分の生まれた日忘れてたな……いつの間にか１６か俺は」

第２０話：物憑きと……（後書き）

評価とかお気に入り登録数とかの数字が目に見えて上がってます。
ホント恐縮です。皆さん有難うございます。

第２１話：レイアの夜

妹が寝静まるのを確認すると、私は音を立てないようゆっくり歩いて部屋を出た。１つは手に持つ燭台の火を消さないようにするため。もう１つは今寝たばかりの妹を起こさないようにするため。蝶番が鳴らないように扉を開け、部屋の外へと左足を出した。

しかし体重をかけた瞬間、木製の床が軋んで音が出てしまった。私は慌てて室内を見た。……良かった、今の音で起きた様子はない。ほっと胸を撫で下ろし慎重に扉を閉めた。蝋燭片手に廊下を歩くのだけれど、またさっきみたいに音が鳴らないかと心配になり、自然歩みが遅くなってしまう。……念のため断っておくと、私は別に太って体重が重いわけではない。幼少の頃から様々な面で気を使ってきたためにそれなりに見目の良い容姿であると密かに自負している。

しかしまさか、それを後悔する日が来るとは思わなかった。どうしてこうなったのだろう。父も母も殺されたのに何故私達だけ残され、奴隷にされたのか？　答えは簡単。海賊が容姿を見て金になると言った、容姿ゆえに売られて奴隷にされ、また容姿を気に入られたが故に買われ……つまり、このような結果になったのは全てこの容姿が生んだ結果。どうしてこうなったのだろう。キリが無いとわかっていても、何度も考えずにはいられなかった。

私は旅亭から出て建物の裏手へ回った。酒場の明かりだろうか、夜だというのにあちらこちらに明りがある。今出てきた旅亭も夜は酒場として営業しているらしく、食堂の方から野太い声と光が漏れてきている。表側は通りに面しているけど、その裏側には何もない。敢えて言うならば、大きな木が一本と、昼間は子供たちの遊び場となる何もない土地だけ。数年前に商人が何かを建てようとしていたけど、ある日盗賊に襲撃されて死亡。計画は頓挫（とんざ）し、以来手つかず

の状態なのだと女将さんが教えてくれた。
　けれど私は他にもあると感じた。それは闇。かつては、北方大陸にある母国の屋敷にいた頃は見下ろすだけだった、光の無い真っ暗な空間。こちら側にも少し光が漏れているから、完全な闇ではないけれど、すっかり環境が変わってしまった今はそれすら懐かしいと思えてきた。屋敷で見ていた風景と重ねながら空を見た。雲の無い群青の中に大小様々な星が瞬いている。でもしばらくすると景色に違和感を覚えた。おかしい。何処でどう見たところで夜空が変わるわけではないのに。そして気付いた。「変わったのは私の方なんだ」と。確かに夜空は変わらない。しかしあの時私は屋敷の3階、自室のベランダから前を見ていた。でも今は、あの時見下ろしていた闇の中から見上げているのだ。そしてなんという皮肉だろう、今の私の状況にピッタリではないか。そう考えるとあまりに可笑しくてつい笑ってしまった。まあ、どうせ誰もいないのだから周りを気にする必要もないか。

「女の1人歩きとは不用心だな」
　突然声を掛けられた私は本当に驚いた。慌てて周りを確認したけど、何所にも姿はない。さっきの感じだとすぐ傍にいたとしか思えないのに。
「……ククク、何処見てるんだ？　そっちに俺はいないぞ」
　今度は分かった。私の頭上だ。でも、見上げた瞬間私の驚きは更に深くなった。
「ご、ごしゅ――」
「おい、昼間言ったばっかだよな、レイア。お前はもう奴隷じゃねぇから、その呼び方するなって」
「あ……申し訳ございません、龍斗様」
　私が背を預けようとしていた大木の上に座っていたのは、他の誰でもないご主人様……東龍斗様だった。月光の影になって表情がよ

く見えないけれど、あまりいい顔はしていらっしゃらないだろう。
何故なら。
「ハァ……あんま変わってないだろそれ。身内にそんなこと言う奴俺は知らないぞ」
そう、この人は主人扱いされることを嫌っている。もっと言えば、奴隷制度そのものを嫌っている。あの人にとって私達は最初からただの人だった。でも、私たちにとってあの人はそうじゃない。家族も家も、何もかもを失い、挙句この我が身すら失いかけていた絶望の中から救ってくれた人。あの日以来、与えられることの無かったものを与えてくれた人。物憑きの一件。あんなことがあったのに、あんなことの真っただ中というのに、私達の身を案じて守ろうとしてくれた人。この人からして頂いたことはどれも身に余る、感謝してもし足りないことばかり。私はこのご恩を忘れたくない。……だからこそ。
「なら、ここにいます。幾ら龍斗様の頼みでも変えるつもりはありませんので」
「確かにお前の自由だが……何も敬語使わんでも……なぁ、ミーア？」
あの人は振り返ることもなくそう言った。振り返ってみると、そこには確かにミーアがいた。建物の影から出した顔と手が、月の光を浴びて白く輝いて見える。その顔は私と同じ、驚きで目を丸くしている。もっともその理由は正反対。ミーアは気づかれたことに、私は気付かなかったことに。
「あ、えと、ごめんなさい。音がしたから目が覚めちゃって、そしたらお姉ちゃんがどこかへ行くのが見えたからそれについてきて……おお、お邪魔してすみません！！」
「別に邪魔じゃないからいいさ。レイアが来たのだって予想外だ。別に俺が呼び出したわけじゃないし」
「そ、そうですか」
ほっとした様子の妹はそのまま私の隣まで来た。そこで肝心なこ

とに気付いた私はあの人を見上げた。
「ところで龍斗様は何故こんな時間にこんな場所に？」
「ああ、ちょっと昔のことを思い出してな。軽い月見に来ただけだ」
私はその視線の先へと顔を向けた。……そこには半円の白い月があった。暫くして、目だけを動かしてあの人を見てみた。月光に照らされ、浮き彫りになったあの人の藍色の眼を見ていると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。向こうがこちらに気付いている様子はなく、私はまた月に目を戻した。気付いていたとしてもあの人はきっと気にしない。
……何故だろう。あれほど心を占めていた後悔の念が今はあまり感じられない。いつの間にか重い荷物が肩から降りている。これもあの人のお陰なのだろうか。
「さて、そろそろ戻るか。お前らも、夜更かしは女の敵だぞ？」
『はい』
あの人は木から飛び降りた。私とミーアはその背中を追っていった。

第２１話：レイアの夜（後書き）

女性１人称って難しいね、うん。しかも大して意味の無い話です。
すいません。まあ、練習回としてお見逃しください↑

第２２話：魔法とは　１

旅亭の裏にある何もない広場。商人が何かを建てようとして整備されたものの、計画が頓挫して放置状態となっている場所である。普段なら近所の子供達が走り回って遊んでいるのだが、その子供たちは今建物の屋根の下でただ呆然としていた。彼らが何故そのようなことになっているのか。それはその目の前に広がる光景を見れば明らかだった。

「無常の闇を斬り裂かん、『暁』」

龍斗は脇差を抜いて相手が繰り出した槍の軌道を逸らせた。それが地面に当たるのを見届ける前に龍斗は上体を後ろに反らす。先程まで彼の首があったところにまた別の槍が繰り出されていた。そのままブリッジをするように手をついて、足を跳ね上げ槍を蹴る。勢いそのままに後転し、体を起こしたところに２本の槍が同時に、左右から挟み撃ちの薙ぎでその胴体を狙う。跳躍することでかわした龍斗だが、すぐにその判断がまずいことに気付く。

「やべっ」

「隙ありです！！」

槍は平行になったところでピタリと止まり、そのまま上へと突き上げられた。空中では人間はまともに身動きできない。その隙をついた攻撃で、普通に行けば確実に一撃を入れられる。

だが龍斗は体を捻り、２本槍の間に体を納めることで場をしのぎ、着地と同時に脇差の柄を口に咥え、槍を持つ２人の間へと突進する。２人が槍を振り下ろす。だが既に槍の交差点より内側に龍斗の侵入を許している。龍斗は両手を広げ、２人の首を掴んだ。

『……参りました』

槍を持った２人、レイア、ミーアは脱力して槍を手放した。

「ああ、危なかった。危うく刺殺されるとこだった」
元気に走り回る子供達を見ながら、龍斗が水で喉を潤す。その左隣にはレイア、ミーアが並んで座り、彼と同じ水が入った木製のコップを持っている。ミーアが口を開いた。
「いえ、私たちなどとても。龍斗様の方が凄いですよ。まさか槍2本とやりあって勝ってしまうなんて」
「ハハハ、いや、あれは本当に運が良かった。確かに槍はリーチ長いし、2体1もきついが、手加減されてりゃあ、な」
うっ、とミーアが呻き声を出した。忍として何度も死線をかいくぐってきた龍斗の眼からすれば、さっき姉妹が見せた槍捌きは随分と甘いものである。例えば龍斗が空中に逃げた時。本気で仕留めようとするならば、穂先を上げて斬るのではなく腹や胸に突きを入れてくるだろう。幾ら命を狙うつもりで、と予告していたとしてもやはり仕える相手に攻撃するとなると心理的ブレーキがかかるものなのだ。
「朝話を聞いた時には半信半疑だったが……本当に強いんだな」
「私達の家は代々王国直属の騎士を輩出する武家の名門でしたので。女と言えどそれなりに武芸を身につけております。初めてお会いしたときに一緒にいた……あの黒髪の男性の言葉を覚えていらっしゃいますか？」
レイアの言葉で龍斗は瞬時に思い出した。姉妹と共に馬車の中にいた、黒髪黒目の元奴隷の男の事である。他とは何かが違うと感じ、ずっと印象に残っていた。
「ああ、そういや言ってたな。5人全員戦奴隷だ、とか何とか」
「そういうことです。……もっとも、私達の場合はそれだけではなかったでしょうが……」
2人の気が沈むのを感じ取った龍斗。これはまずいと話題をその男のことにする。

「あ、そ、そういやあの男なんか色々引っかかるんだよなー。態度や口調もそうだが魔法が使えるとか何とか」
『……え!?』
龍斗の言葉に2人は驚いた。が、2人が驚く理由が分からない龍斗はきょとんとするだけだった。
「ん、どうした?」
「龍斗様、あの方は本当に魔法が使えるのですか?」
「ああ、お前らが連れ去られた後追いかける時に、なんて言ってたか……『風の精霊シルフよ、我らに力を、フェアウィンド』だっけ」
姉妹は顔を見合わせた。目を丸くしたままレイアが龍斗の方を見る。
「……それは確かに呪文ですね。となると、やはりそれなりの身分だったのでしょうか……?」
「ちょっと待て。……あの時の様子、そんで今の言い様だと……魔法ってのはそう簡単に使えるものではないのか? いやそもそも魔法ってなんだ?」
「……ご存じないのですか?」
「小さな島国に魔法なんてものは無かった。大陸出身の母さんからも聞いた覚えはないな……」
物憑きが去って目覚めた後、龍斗は自らの過去について姉妹に語っていた。龍斗は基本的に自分の情報を他人に与えることはしない。しかし身内として扱う以上この2人には話しておく方が良いと判断したのだ。その反応と言えば、龍斗が姉妹の経歴を聞いた時よりも随分オーバーだった。もっともこれは、感情を表に出さない訓練を積んできた者とそうでない者との比較なので仕方のないことである。
そんなことを軽く思い出している頃にレイアが説明を始めた。
「魔法というのは……簡単に言えば、神に祈りを捧げる代償に神の力を具現化したもの、というところでしょうか?」
「……すまん、分からん」
「でしょうね……」

そうして2人で考えあぐねているとミーアが目の前に移動してきた。そして口を開く。

「だったらまず、見てもらうのが早いのでは？」

「……なるほど。龍斗様、如何でしょうか？」

「ふむ、百聞は一見に如かず。その方が早いかもしれんな。頼めるか？」

『はい！！』

2人は満面の笑みで返事を返した。

第２２話：魔法とは　１（後書き）

ユニークが２８００超え
読んで下さる皆様有難うございます。

第２３話：魔法とは　２

「火の精霊サラマンダーよ、我が求めに応じその力をここに示せ、『ファイア』」
　ミーアが伸ばした右手の先に突然何の前触れもなく炎が上がった。焚き火程度の炎が、消えることなく地面の上で揺れている。龍斗は目を見張った。
「ほう、すげぇな。焚き木も火種も無しに」
「ありがとうございます。といってもただ発火させただけなので。下級魔法ですけど」
　褒められたことで笑顔になったミーア。場所はもちろん旅亭の裏にあるただの広場。ただし他人を巻き込まないようにと森の近くまで移動している。ミーアは顔を崩さないまま説明した。
「このように、呪文を唱えて一定の魔力を消費することで魔法が発動します」
「出た火はそのままか……て、このままだと山火事じゃないか？」
「ご安心下さい。私が消火いたしますので」
　そういうと今度はレイアが両腕を上に上げた。
「水の精霊ウンディーネよ、我が求めに応じよ。汝の水の力を以てこれを滅さん、『ウォーターボール』」
　空中で何かが弾けたかと思うと、そこには大量の水が浮かんでいた。レイアの腕が下ろされると同時にその水も下に動き、ミーアが出した炎の上へと落ちていく。小さな音と共に炎が消えた。それでも水が消えたわけではなく、まだ半分ほどの量が空中に浮かんでいる。水の球体は龍斗のそばを通り過ぎる。それを目で追っていくと、最終的にレイアの手中に収まっていた。
「術にもよりますが、下級魔法であればこのくらいの操作も可能となります。これが詠唱魔法と呼ばれるものです」
　そう言うとレイアは両手を叩いた。パンッという音と共に水球は

姿を消した。
「はあー、便利なもんだな。あ、そういや呪文ってのはいちいち違うもんなのか？」
「はい、火を操るなら火の精霊、風を操るなら風の精霊、とどの属性を使うかによって祈りを捧げる対象は変わってきます」
「……なるほどねぇ。けど、何か引っかかるな……発動させる条件って何だ？」
「はい、条件としては２つあります。１つは呪文を唱えること。そしてもう１つが魔力を消費することです」
「……魔力？」
龍斗は腕を組み、首を傾げた。レイアが説明を続ける。
「魔法を使用する時に必要となる力の事です。例えば走る、跳ぶ、剣を振る、といった動作をするには体力を消費しますよね。それと同じで、魔法を扱うには魔法を扱うための力を消費する必要があるのです。人によっては霊気、生気、などと呼ぶこともあるらしいですが」
「ふーん……ん？　霊気……気？」
レイアの言葉に引っかかるものを感じた龍斗だが、ひとまず流すことにして不思議そうに眺めている姉妹に続きを促した。
「あ、いや何でもない。んで？　確か魔法は３つあるんだよな。１つがさっきの詠唱魔法、残りは？」
「あ、はい。もう１つは回復系、です。これは魔力によって傷を治したり、体力を回復したりするものです。自身の回復はもちろん魔力を送ることで他の人の回復も可能です。効果は……既に体験されている通りです」
ミーアの言葉を聞いて龍斗は左腕の袖をまくった。物憑きの際、彼は自分で自分の手首を切っている。だが今その時の傷は何処にも見当たらない。気絶していた間に２人から回復魔法を掛けられたため実感はないのだが、自分で切り付けた傷を見間違うはずがない。それが跡形もなく消えているのはやはり回復魔法の効果なのだろう。

因みにこの魔法、切り落とされてさほど時間が経っていないならまだ繋がる望みもあるらしいが、無いものを再生するということは不可能だという。

「そしてもう1つ。これは正確には魔法と呼んで良いのかどうか分かりませんが……一般に強化系と呼ばれるものがあります」

「強化系？」

「はい、これは文字通り魔力を体の強化に使うものです。一番多いのは筋力強化でしょう。実は私達が自在に槍を操れるのもこの強化の恩恵を受けていたりします」

「なるほどな。さほど筋肉があるように見えないのに、よく槍が振るえると思ったらそういうことか」

「……なんか軽く馬鹿にされてるような気がするのですが……」

「気のせいだろ。そうか、魔力、霊気か……気……気？　あっ、待てよ、もしかしたら……なあ、その強化系ってのでさ、感覚を強化することはできないか？」

「感覚……ですか。少々お待ちを」

先程引っかかったことを思い出した龍斗の要求にレイアが答えた。彼女は静かに目を閉じると、1つ息を吐いた。すぐに龍斗は変化を感じ取った。

（これは……！！）

龍斗は足元に気配を感じ、地面を見た。だがそこには特に何かがあるわけではない。目に見えるのは土だけだ。顔を上げるとレイアはこちらを指さしていた。

「感覚を強化しました。これで目を閉じていても相手がどこにいるか分かります」

試しに龍斗は数歩動いては止まり、動いては止まりを繰り返した。それに合わせてレイアの指も動き、龍斗がいる位置を正確に指してくる。真後ろに回ってもちゃんと指してきた。そこで今度は後ろに下がる。暫くはこちらを指さしたままだったが、あるところを境にレイアは腕を下ろしてしまった。

（なるほど、ここが感知できる限界か）
龍斗は足元に転がっている少し大きめの石をいくつか拾い、レイアに当てない程度に適当に放り投げる。
「これは……石ですか？」
「そう正解」
「ひゃっ！？」
レイアは思わず身をすくめた。突然後ろから声を掛けられたからである。レイアが振り向くとそこには龍斗が悪戯を成功させた子供のような、意地の悪い笑みを浮かべて立っていた。レイアは驚いた。一度真後ろに来られた時はちゃんと感じ取った。だが今回は、一切気配を見せずに背後に立って見せたのだ。
「そ、そんな、いつの間に」
信じられないものを見たような様子のレイアに龍斗は種明かしをした。
「簡単なことだ。この感覚強化は地面の上にしか効果が無いんだよ。だからさっき投げた石の上を歩けば感知されずに済む」
「へぇ、そうなんですか……あれ？　龍斗様確か魔法については何も……」
「ああそうだ。確かに俺は大陸に来るまで魔法というものを知らなかった。だがこれは知ってる感覚だ。忍術の１つ、意識を気に乗せて周囲に分散させ、気配を探る『即応の霧』の失敗版。そうか、気か。そういうことか」
納得した声を上げる龍斗。１人呟くその声は、首を傾げる姉妹にも聞こえていた。
「ああそうか……忍術は、妖術は、夢物語のような力の数々は……『魔法』だったのか」

第２３話：魔法とは　２（後書き）

いつも読んでくださっている皆様ありがとうございます。
不定期更新ですが、よろしくお願いします。

第２４話：魔法と忍術

「そうか……忍術は魔法だったのか……」
そう呟いて１人笑う龍斗に困惑する姉妹。
「あの、龍斗様？　ニンジュツとは一体……」
「ん、ああすまん。そういやこっちには忍がいないんだったな。分かるわけもないか」
そう前置きしてから龍斗が説明した。
「忍術ってのは忍と呼ばれる人間が使う術のことだ。中身は色々あるが、主に身体能力強化だな。感覚を研ぎ澄ませて気配を探る『即応の霧』、通常の何倍もの力を発揮することが出来る『金剛鉄身』、それから普段よりも速く走ることが出来る『疾走』なんてのもあったか。気を集中させる事によって発動すると教えられているが、正直誰も本気で発動を信じてはいない。呪文を唱えて集中力を高めることで動きが良くなる。それを呪文のお陰だと錯覚する。そういうもんだと思っていた。それと忍術の中には到底実現不可能と思われるものもあった。山のように大きい蛙を呼び出すとか、水の上や空中を走るとか、口から火を噴くとかな。そんなことできるはずがないと思っていた」
「な、なるほど。……思っていた、て過去形ですか？」
ミーアの問いに龍斗は笑みを深くした。
「そうだ。ついさっきまではな。だがレイア、ミーアが使う魔法ってのと、俺が教えられてきた忍術ってのはかなり似ていることに気付いた。そしてさっきの、レイアの感覚強化で確信した。即ち、名前が違うだけで力としてはやっぱり魔法なんだろうな。だが、何か特別な発展の仕方をしたんだろう。所謂強化系の魔法に特化してるんじゃないだろうか」
未だ訳が分からないという様子を見た龍斗は一つ頷いた。
「よし。百聞は一見に如かず。今度は俺が実演する番か」

そう言って龍斗が取った行動は姉妹にとっても不思議としか言いようが無いものだった。脇を閉めずに胸の前で手を組んだ。それもただ手を合わせているだけではない。指を絡ませ、人差し指を伸ばし、それと対をなすように親指も合わせる。その状態で呪文を唱える。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

途端にレイアは、自分の感覚強化を感知した時の龍斗と同じような顔をした。隣のミーアも同様の顔をいている。但し、感じたものは龍斗とは違っていた。

（……嘘、これは、感覚強化（センス・ポイント）？　でも、何か……）

その心の声を汲み取ったかのように龍斗が説明をした。

「これが今言った忍術の1つ、『即応の霧』だ。効果はさっきレイアがやったのと同じで、周囲の気配の察知。だが決定的に違うことがある」

「……もしかしてこれは、面ではなく空間で把握、できるのですか？」

「ご明察」

目を閉じたままの龍斗が、背後に移動したレイアに笑みを向ける。自分がやったのと同じ効果だと分かってはいるが、見えてないはずの人間に突然、しかも正確に顔を向けられることに軽く恐怖を覚えた。

「ハハハ、まあそんな怖がるなって」

「え……な、何故」

「自分で分かっただろ、『即応の霧』は地面の上だけじゃない。空中も含めた一定範囲内の空間の気配を察知することが出来る。そう、空間で相手を感じ取るが故に表情を読み取ることも不可能ではない。まあ、普通そこまで気にしないけどな。とまあ、前置きは置いといてだ」

姉妹が首を傾げるのを感じ取った龍斗。次に言う言葉の反応を楽しみにしながら龍斗が言った。
「じゃあ2人共、槍構えて」
『え？』
「この状態で、一丁手合せ願おうか」
『えええええーーーー！？』
果たして、龍斗の予想通りの反応だった。

「あの、本当によろしいのですか？　というか、さっきも全然当たらなかったんですけど……」
「ああ、構わん。てか、さっきのあれは本当にやばかったぞ。途中で脇差抜いたろ。あれで防いでなかったら確実に喰らってたぞ。というわけで、今回俺は武器を持たない」
「そ、それって……」
「そう。俺は全てを避ける。そして武器を手で止めたら俺の勝ち。2人は俺に一太刀でも浴びせられたら勝ち。負けた方は勝った方の言うことを1つ聞く、てのはどうだ？」
その提案に驚いた2人。だが姉妹は互いを見て1つ頷くと、龍斗に槍の穂先を向けた。因みに2人の格好は膝が隠れる程度の丈がある色違いのワンピース。その中にはレギンスを穿いているため戦闘行動でも難なく動ける。
「ようし、なら、始め！！」
「やっ！！」
開始の合図と同時にミーアが槍を突き出した。だが目を瞑っている龍斗は直ぐ反応し、右腕を隠すように半身をひねる。
「不意打ちとはやるねぇ」
そう言うが早いか龍斗は左足にを曲げて姿勢を傾ける先程まで背中があったところにはレイアが槍を縦回転させて斬りを放っていた。
「足元への突きから足払い」

龍斗が後ろに一歩下がると今言った通りの攻撃がやってきた。レイアの上段突き、ミーアの薙ぎが同時に襲いかかるも上体を逸らして上手く避けた。

その後も2人は流石のコンビネーションで突き、薙ぎ、回転斬りを繰り返す。だが龍斗は目を瞑ったまま、時折何処をどう攻めてくるのかを言い当てながらことごとく避けていく。そして、手合せが終わりを迎える時が来た。

「肩を狙って振り下ろす」

左右から振り下ろされた槍を龍斗の手のひらが掴んだ。そう、龍斗の勝利条件が満たされたのだ。

「……参りました」

龍斗が手を離すと2人は槍を引き寄せて地面と垂直にした。多少は腕に自信のあった姉妹は術を使っているとはいえ目を瞑ったままの相手に負けたことで気落ちしているようだった。2人は、そよ風が吹いた時肌に感じるようなあの感覚が無くなっていくのに気付いた。龍斗が術を解いたからである。

「分かったろ。この術は相手が何処にいるかだけじゃない。どう動くかも分かるという代物だ。で、勝負の報酬なんだが……レイア、ミーア、俺に魔法を教えてくれ」

『えっ……！！』

俯いていた2人は顔を上げて驚いた。いや、驚いて顔を上げ、そこで更に驚いたといった方が正しい。それに構わず龍斗は続ける。

「忍術としての教えしか受けていないからあれだが、ちゃんと教えてもらえば俺にも魔法は使えるんじゃないかと思ってな。……駄目か？」

「あ、いえ、その、それは……約束なのでいいんですが……その目は……」

「眼？」

龍斗が首を傾げたところへミーアが近寄ってきた。腰の辺りにあるポケットのボタンを外し、中から小さな手鏡を取り出す。どうぞ、

と渡されたそれを見て、龍斗は眉にしわを寄せた。
「……何だ？　紫の……目？」
鏡に映った龍斗の眼の虹彩は、普段の藍色から紫へと変わっていた。

第２５話：清算（前書き）

ユニーク３５００人越え
お気に入り登録４４件

読者の皆様本当にありがとうございます

第２５話：清算

「うーん、紫な……」
「もしかして、魔力の使用が原因では？」
そう言われた龍斗は目を閉じて意識を集中させた。体の中に何か表現できそうにない物を感じる。これが気、こちらで言うところの魔力。龍斗はそれに意識を向け、体の中心に集まる様子を思い浮かべる。胸の辺りに大きな球体のような物を感じた龍斗はそれをへその辺り、丹田と呼ばれる場所まで移動させ、そして消滅させた。なお、この作業にかかった時間はほんの数秒ほどである。
「治ったか？」
「……ええ、そうですね、元に戻ってます」
ミーアの確認を取った後、改めて手鏡を見る。そこにあるのは馴染みのある藍色。１つ息をついた龍斗は礼を言って手鏡をミーアに返した。ミーアがそれをポケットに戻す間にレイアが声をかける。
「しかし、紫、ですか」
「何か問題なのか？」
「ああいえ、そういう訳では。以前、紫の眼について何か聞いていたような気はするのですが……申し訳ございません」
頭を下げようとするレイアを途中で止めさせ、龍斗は軽く肩を回した。
「まあ何でもいいや。害は無い感じだからな」
「はい、呪いとかそういった話ではなかったので大丈夫だと思います。それにこれは一般にはあまり知られていない話ですし」
「何でそんな情報を、てそうか。貴族出身だったか」
「はい」
彼女らの出自を確認したところで龍斗は気付いた。いつの間にか空は赤に染まろうとしている。
「ああ、もうこんな時間か。んじゃあさっさと戻るか」

『はい』
3人は旅亭へと戻っていった。

翌日、龍斗達3人は長く世話になった旅亭を後にした。勿論、請求された料金を支払ってである。この時誰がお金を支払うかで結構もめたのだが、最終的にそれぞれ1部屋分の料金、龍斗はそれに加え賠償金もということで収まった。

暫く大通りを歩いていくと、龍斗は白い石造りの建物の前で止まった。その入口の上には堂々と「冒険者ギルド」の看板が掲げられている。

「俺についてくるんならやっぱ、同じ職の方がええわな。て、本当にいいのか？」

「私達の事ならお気になさらないで下さい」

「そうですよ、それに、自分で決めた事ですから」

「……なら、もう何も言わんさ。じゃあ2人の登録をしとかないとな。それともう1つ。んじゃ行きますか」

『はい』

龍斗は両手で木の板を押しながら建物の中へ入っていった。

「すいません、討伐クエストの清算をしたいのですが」

「かしこまりました。ではカードと特定部位の提出をお願いします」

「ああ、はい。マイカード・オープン」

龍斗はカードを出現させ、背負っていた麻袋の1つと共に事務員に渡した。その女性は傍にあった水晶にカードをかざした。水晶から淡い緑色の光が現れ、空中に文字を浮かべていく。魔法というものの存在を理解し始めた龍斗は、流石に表情には出さないものの内心はやはり驚いていた。事務員の女性は宙に浮かんだ文字を読み上げる。

「ええと、クエストは……アサンの森での、ワイルドボアとハウンドドッグですね。では特定部位の確認をさせて頂きます。2、4、6……ハウンドドッグの牙が20本、ワイルドボアのが18本。単価は……あ、あった。ハウンドドッグのが1本30ドルク、ワイルドボアのは1本50ドルク。1500ドルクですね」

「へぇ、そんなもんなのか」

「はい。まあこの程度の野獣はさほど強くもないですし。……にしてもこれ、綺麗に洗ってありますね」

女性は牙を見て感心していた。それもそのはず、龍斗はその全ての牙を洗浄していたからである。

「普通はしないでしょうけど、血や肉が腐って臭いを出すのは、ちょっとね」

「わかります。私も仕事の関係上こういったものをよく扱いますが、皆さん血肉をそのままにしてるからもう臭いが凄いのなんのって。こちら側としてはこれは有難いことですね」

そう言って笑っていたところに、後ろから小声で声をかけるものがいた。

「龍斗様、登録完了いたしました」

「ん、ああ、ご苦労さん」

それはレイア、ミーア姉妹だった。ギルドは役所仕事のため、仕事の内容によって窓口が変わってくる。登録の間ただ待っているのもなんだからと龍斗は精算窓口で清算をしていたのだ。

と、姉妹を見た時ふと思いついたことを事務員に尋ねてみた。

「あ、そういや盗賊退治とかってクエストにあったりするんですか？」

「ええ、あると思いますよ。ああ、私はまだクエスト窓口を担当したことが無いので。詳しくはクエスト窓口でお願いします」

龍斗は2つ隣の窓口に行った。そこは突き当りの壁際にある窓口だった。壁には淡い光を放つ魔法掲示板が掛けられており、黒い活字で「冒険者ギルド　依頼一覧」という文字が浮かんでいる。龍斗

が手で触れるとその文字は粒子となって消え去り、代わりに別の文字が画面いっぱいに浮かび上がった。それは横並びになっており、よく見てみると「オルボラ帝国傭兵募集」「パルコール王国ゴブリン討伐」「トズロ山でのアミカラタケ採取……」という感じに読める。つまりこれは現在ギルドが受け付けている依頼の一覧なのだ。下まで目を通し、何度か指先を上に跳ね上げて画面をスクロールさせる龍斗だったが、面倒なので直接聞くことにした。窓口にいた事務員に声をかける。

「すみません、ちょっといいですか？」

「はい、何でしょうか」

相手の女性は手元の書類から顔を上げて対応した。因みにギルドも銀行も、応対する事務員は女性が多い。印象を良くするための心理作戦だろうと龍斗は頭の片隅で思った。

「ちょっと気になったんですけど、盗賊の討伐クエスト……てあったりします？」

「盗賊はですね……アルドバール、ザザンクス、ソベンの3地方から依頼が来てますね。あ、あとアサンの森も」

「ではそのアサンの森の依頼を受けます」

「分かりました。ではカードをご提示願えますか」

カードを渡すと女性はそれを水晶にかざした。中に溜まる黒い粒子が、カードに吸い上げられる。暫くすると粒子が下に沈み始めた。女性からカードを受け取る龍斗。

「これでクエストの登録が完了いたしました。お気をつけて」

その言葉を背に龍斗は再び清算窓口に向かう。既にアサンの森の盗賊は倒した後である。窓口担当は交代制のようで、今は３０代と思われる男性が担当していた。

「アサンの盗賊退治の件、清算したいんですけど」

「分かりました。ではカードのご提示を」

了承の意を伝えると龍斗は2枚のカードを出した。１つはもちろん龍斗自身のもの。もう１つのカードは盗賊の頭デッツのものであ

る。
（あの時解放した黒髪の男、あいつに言われるがままに死後現れたカードを回収しといたが……まぁ、金になりゃ儲けもんだな）
野獣を倒せばその証拠として体の一部を提出しなければならない。それと同じで盗賊討伐の場合も証拠となる物を提出する必要がある。その最たるものがカードだ、とあの男は言っていたのだ。
「ほう、デッツが堕ちましたか。どれ、記憶を探ってみましょうか」
男が手をかざすと、デッツのカードは一瞬で真っ黒に染まった。
何をしたのかと尋ねると、男はあっさりと答えた。
「このデッツという男は冒険者ギルドに登録していましたから、ギルド規約を違反した行為が無かったかを調べたんです。カードは所有者と同化するでしょう。だから所有者が経験したことをそのままカードが記憶しているんですね。盗賊行為は当然規約違反ですから、すぐ結果が出ましたよ。ギルドの人間じゃなかったら他の魔法で色々調べないといけませんが。色が黒に変わったということは盗賊だと認められた、という認識でいいですよ」
「なるほど」
男はデッツのカードを水晶に突き刺すようにした。カードが触れている部分から黒い粒子が砂のように落ちていき、男の指が水晶に触れる時にはカードは無くなっていた。その粒子は水晶の中で渦を巻き、次第に数字を形成していく。
「この一件の報酬は５０万ですね。あ、そうそう。盗賊が銀行口座にお金を預けていた場合、それを倒した人にその口座にあるお金を受け取る権利がありますが」
「へぇ、盗賊が預けてたお金を、倒した俺がもらえるってか。つっても、期待は出来ないな」
「そうですね、盗賊のほとんどは銀行なんかに預けるより手元に置いときますし……あ、ちょっとはありましたね。５万２０００ドルクです。取り敢えず受け取る、にしますよ」
了承の意を伝えると、事務員は龍斗のカードを水晶にかざした。

一瞬水晶が、その後にカードが光って元の色に戻った。返却されたカードを見る龍斗。といっても元々持っている金額が金額、しかも様々な出費のために細かい額など覚えていない。龍斗は５０万増えていることだけ確認すると、クローズ、と唱えてカードをしまった。

建物を出た龍斗は体を伸ばし、辺りを見回した。少し先の噴水の周りには取り囲むように木製のベンチが置かれている。龍斗がその１つに座ると、左右を埋めるように姉妹が座った。

「……あれ？」

「？　どうかしました、龍斗様？」

「いや、何か違和感が……ま、いいか……？」

ミーアの無邪気な顔に違和感を誤魔化された龍斗は空を見上げた。今日は雲が多く、太陽は出たり消えたりを繰り返している。雲に語りかけるように、静かに口を開いた。

「さて、これからの課題は魔法の習得か。今まで無意識とはいえ使ってたんだから、身につけようと思えば身につけられるよな。まぁ、宿代くらいは……あー、防具も武器も金は要るか。まあ、それを補えるだけ稼ぐかね。無理に稼ぐ必要はないか。……まぁ何にせよ、これから暫く魔法の事を学ぶ必要があるんだけど」

「あ、その差し出でがましいですけど……」

「私達でよければある程度のことはお教えできますが……」

「ああ、もちろん最初からそのつもりだ」

そう言うと龍斗は椅子から立ち上がり、振り向いたかと思うと立て膝を突いた。幸いにも今はお昼時、大通りから１本外れたこの噴水通りにはあまり人がいなかった。１人２人を除けば驚いているのは姉妹のみ。

「つーわけで、これから宜しくお願いしますよ、師匠」

「え、あ、いや、こ、こちらこそ！！」

「よ、よろしくお願いします！！」

時が止まったかのように静まり返る3人。だが次第にこの空気の可笑しさに耐えきれず、龍斗が笑いで体を震わせた。それにつられて姉妹も互いの顔を見て笑いあった。

「さて、形式だからやったけど茶番はもういいや。休憩は終わりだ。行くか」

『はい！！』

この日以降、龍斗は定期的にクエストをこなし、必要経費を稼ぎながら、魔法習得に向けてマーティス姉妹からの指導を受けた。また姉妹の方も龍斗の戦闘技術を学びたいと言ってきたため実戦形式で稽古をつけた。急がば回れ、石橋を叩いて渡る、という龍斗の意向で、3人は特に大きな動きを見せることなく、徐々に力をつけていった。

そして、光陰矢の如し……気付けば2年の月日が経っていた。

第２５話：清算（後書き）

はぁ、やっとここまで来た……
後半少し懸念がありますがこれで、第一章とでもいうべき部分が終わりました↑

次からはバトルとかもっと増やせるのではと考えてます。
拙い作品です。不定期更新ですが、なんとかかんとか頑張って書いてます。ご支援いただければ幸いです。

第２６話：２年後

「せやっ！！」
「ハッ！！」
岩山をくりぬいたような何もない場所で２つの黒い影が激しく衝突を繰り返していた。気合の声と共に繰り出された回し蹴りを左腕で受け流すと、相手の空いた脇腹に拳を入れる。しかし直ぐに反応され右手で受け止められる。相手はこちらの腕を捻る、その勢いに逆らうことなく跳躍して体を捻り、相手のこめかみを踵（かかと）で狙う。それに気付いた相手は右手を離し後ろに跳んだ。回し蹴りを放った方も着地し態勢を整えた。
「空中後回転蹴りとはやるねぇ、龍斗」
「素直に脇腹に一発喰らっとけばいいのに、連」
場所は商業都市国家オリジアの郊外にある岩山の麓。何の気兼ねもなく思いきり暴れることが出来る、という理由で連が案内した場所である。草の一本も生えていない地面。同じく草が生えていない赤土の壁はおよそ５ｍほどの高さがある。
連は龍斗を正面に捉え、構えを取った。龍斗も膝を曲げて中腰になり、すぐ反応して動けるようにする。
「よっしゃ、そろそろ本気行くぞ！！　覚悟しろよ！！」
「ほう、面白い。見せてもらおうか……『即応の霧』」
「気概空手――！！」
気配を察した龍斗は直ぐに横跳びで避けた。直後、後方で爆破音が響く。龍斗が振り返ると、直径１ｍ程の大きな岩がガラガラと音を立てて崩れていくところだった。
「――『砕岩衝』」
その延長線上で、右拳を正面突きにしたままドヤ顔をした連が技の名を語った。が、龍斗は動じず、連との距離を縮めていく。２、３度避ける度に響く爆破音を背に、龍斗は連の懐に入り左拳で顔を

狙う。
だがそれは右腕で防がれ、それを皮切りに一進一退の攻防が始まった。回し蹴りや拳が止められた途端に、肘鉄や掌底、膝蹴りなどが襲い掛かる。１０合、２０合、３０合……連打が止み、距離が空いた。再び距離を詰めた龍斗はまた左拳で同じ場所を狙う。
「ふっ」
「残念」
右腕を立てて防ごうとした連だったが、そこに当たる前に龍斗が止めた。そして龍斗は真の攻撃、右の拳を繰り出した。
「ぐっ」
「ぐおっ」
フェイントをかけ連の腹に一撃入れる。龍斗の目論見は成功した。だがその代償に龍斗も、腹に連の膝蹴りを食らった。互いに飛び退き、距離を取る。肩で息をする２人の視線が交差した瞬間、また勢いづいて走り出した。が。
「はいそこまでー」
『終了です』
『うぐっ』
龍斗と連は同時に呻き声を上げた。連は１人の女性に頭を叩かれたことで。龍斗は鳩尾（みぞおち）と肩の辺りを槍の長棒で打たれたことで。連を止めたのは霞、龍斗を止めたのはレイア、ミーアだった。

「全く２人は……ほんと呆れるわ」
「同感です。まさかルールを破って戦い続けようとするとは思いませんでした」
「２人とも仰いましたよね。相手に一撃入れた時点で終わり。忍術、気概空手は使わない。自分たちで決めたたった２つのルールも守れないでどうするんですか」
「龍斗が『即応の霧』使うからだろ」

「その前にお前が『砕岩衝』使おうとしたろ」
『言い訳無用！！』
『……面目次第もございません』
ため息をつく霞。説教をするマーティス姉妹。この3人は龍斗、連に釈明の余地すら与えなかった。龍斗と連は言い逃れ出来ないと観念して頭を下げた。その様子が可笑しくなった3人は互いに顔を見合わせて笑い合った。反して男2人は苦い顔になる。
「まぁでも面白いもの見せてもらったし、可哀相だから許してあげるわ」
「何で上から……」
「あー、袋頂戴」
『はい』
「龍斗は良いよな。忠実な美少女2人侍らして……」
「阿呆、こいつらは妹だぞ。身内を女として見るほど甲斐性無しじゃねぇよ。大体こいつらだって小言五月蠅（うるさ）いし、しつこいし……うおっと、ご覧の通り手も早い」
「あら、何の事でしょうか」
「何の事だかさっぱりですわ」
笑顔を崩さぬ姉妹の手には得物である槍。その穂先は喉笛を正確に狙っていた。しかし狙われた本人は上体を僅かに反らしただけ。紙一重のところで攻撃をかわしていた。
「レイア、ミーア、悪かった。だから槍下ろせ。お前ら食い物を無駄にする気か」
「承知しました」
「お騒がせしました」
姉妹は槍を引き寄せると、片手を上に向けて広げた。暫くして、上から落ちてきた白い小さな紙袋がそれぞれの手の中に納まった。中身はどちらも齧（かじ）られた跡のある豚まんである。
龍斗達5人は先程の岩場を離れ、オリジアの中心を貫いているサン・トルマ通りにいる。ちょうどお昼時ということもあり、屋台で

売られている食べ物を買い食いしていたのだ。
（こうして屋台が並んでいるのを見ると、やっぱ祭りに見えるよな。ま、これがここの普通なんだと分かっちゃいるけどな）
そう思いながら茶色い紙袋の中から豚まんを取り出し口に運んだ。因みに龍斗が食べる豚まんはこれで４つ目である。
「んで？　龍斗君、いつまでここにいるつもり？」
霞が２つ目の豚まんを頬張りながら質問してきた。豚まん片手に歩きながら、思案顔になる龍斗。
「そうだな……あと２、３日ってとこか？　そろそろエルグレシア王国に行かないと間に合わんかもな」
「随分呑気ね。事が事だっていうのに」
「慎重派って言ってくれるか。大体急いでるんなら２年も待たないしオリジアにも戻ってきてない。石橋叩いてるんだよ。俺が戻ってきたのは連の空手を習得するためだ」
龍斗達は２年間、修業期間と銘打ってとにかく力量のレベルアップを重視して活動していた。そして龍斗は、その最後の仕上げとして連の空手に白羽の矢を立てた。そうして冬のオリジアに来て、連に修行を頼んでみれば、何ということはない。連の空手も格段にレベルアップしていたのだ。それが昨年の１２月２７日の事。連の都合もあって修行が始まったのは年が明けた後。龍斗、レイア、ミーアの３人はそれから２ヶ月間、空手の習得に精を出した。その修行の成果は先程の手合せの通り、徒手空拳のみで連と互角に戦えるほどに成長した。もっともそれは龍斗の話。姉妹の方は筋力強化を以て２体１で戦ってやっと、といったところである。しかしそれでも一般人より力がついたことは間違いない。嗜（たしな）み程度で鍛えてきたか、本格的に鍛えてきたか、という環境の違いであるため、比較するだけ野暮と言える。
「さて、腹ごしらえも済んだことだし」
龍斗は紙袋を近くのゴミ箱に投げ捨て、レイア、ミーアを隠すように前に出た。その隣には連が、指を鳴らしながら肩を並べた。２

人の視線の先にいるのはナイフを構えた男、一瞥しただけだがざっと３０人はいる。
「こりゃまた結構な人数だねぇ」
「感心している場合ではありませんよ龍斗様」
「完全包囲されました」
レイア、ミーア、霞は２人に背を向けた。いつの間にか５人はナイフや槍、剣など様々な武器を持った気性の粗そうな男に取り囲まれていた。その内の１人、龍斗と連の目の前にいる男が口を開く。
「よう、坊主共。大人しくしててもらおうか。あんまり傷つけると金にならんからな、傷は付けたくないんだよ……特に娘３人は」
３６０度全体から下卑た笑いが聞こえてくる。その視線は女性の胸や下半身に集中していた。３人は同時に嫌悪感を顔に出した。
「観念するんだな、どの道この７０人の包囲網からは逃げられねぇ」
「だってよ龍斗。１０人ずつ、俺とお前で２０ずつ。どう？」
「ふむ、なら無制限だろ。レイア、ミーア、折角だから槍無しで何処まで行けるかやってみるか」
『分かりました』
「あたしも基本自分の身は自分で守るから」
「さあ、大人しく縄にかかれ！！」
『お断りっ！！』
５人は一斉に動き出した。

第２７話：徒手空拳

龍斗は正面で槍を構える男に掌底を叩き込んだ。正確に顎を打ち抜かれた男は脳を揺らされて気絶した。すぐに龍斗は後ろに跳んだ。襲い掛かる武器の全てを手で払いながら、合間を見て腹に拳を叩き込んでいく。直ぐに相手が動けなくなるわけではない。だが確実にダメージを与えていく攻撃。龍斗は最初から持久戦になると読み、体力を温存しながら徐々に戦力を奪う作戦を実行していた。

だが連は違った。

「気概空手、『砕岩衝』！！」

「何っ」

龍斗は跳躍した。次の瞬間、龍斗が視認できる人間は吹き飛ばされ、着地点周辺には誰もいなくなった。連は攻撃を受け流しながら大声を出した。

「余計なこと考えるな！！　思ってるほど時間無いぞ！！」

龍斗は気付いた。大上段から振り下ろされる剣を避けると、回り込んで足を掴んだ。線の細いその男を放り投げ、数ｍのスペースを作った。

「考えたら欲のために動いて命賭けない連中だったな。なら一気にやってやる……全員跳べ！！」

龍斗の声を聞いて少年少女４人は跳躍した。身長とほぼ同じ長さの棒を持った盗賊の仲間がまずいと言ったが時既に遅し。

「気概空手、『陸鳴衝』！！」

龍斗が地面に拳を叩き込んだ。その拳を中心に衝撃波が大地に伝わり、地震が起きたかのように辺りが揺れた。足場が揺れて不安定になり、盗賊は次々とバランスを崩していく。

『そらっ、『砕岩衝』！！』

龍斗と連の同時攻撃で、盗賊の半数ほどが挟み撃ちに遭った。何の前触れもなく吹き飛ばされた状態で迫りくる仲間を避けるなど出

来るはずもなく、盗賊たちはそれぞれの武器や体をぶつけ合う。加えて岩をも砕く威力の衝撃波、この攻撃を受けて気絶していない者はいなかった。

２人は女性3人を振り返った。攻撃をかわし、顎や腹に掌底を食らわせている様子を見て安心した。しかしそれぞれの背後に回る影に気付き、急いで距離を詰めて足払いする。

「有難うございます」

「礼はいい。だいぶ減ったし一気に決めるか……『衝拳』」

既に及び腰であるにも構わず、５人は盗賊の頭、腹、膝裏などに攻撃を叩き込む。それら全ての攻撃が当たる度に衝撃を放っているため、見た目以上にダメージを与える攻撃である。

ミーアが腹に蹴りを入れ、その相手が崩れ落ちるのを確認すると、龍斗は足元に転がっていた盗賊、最初に声をかけてきた男に視線を向けた。

「で？　７０人が……なんだっけ。まあ、どうでもいいか」

龍斗は紫に変わった目で辺りを見回した。目に映る盗賊は全て地面に伏していた。

――気概空手。それは一見普通の空手と同じであり、特別動きが変わるというわけでもない。しかし決定的に違うものが１つだけある。それは「気」である。攻撃に気を乗せることにより、通常よりも遥かに威力の高い攻撃を繰り出せるという『衝拳』。１ヶ所に集めた気を大地に放出、その時生み出される衝撃波で地震のような振動を起こす『陸鳴衝』。そして、集めた気を一定方向に飛ばし、岩を砕く程の衝撃波を放つ『岩砕衝』。

すなわち気概空手とは、気を操り、衝撃波を操ることに真髄がある拳法なのである。元々は忍術などと同じように荒唐無稽な伝説として伝わっていたこれらの技。それを会得し、「気概空手」という名で大成したのは他でもない、烏丸連その人である。

そしてここにおける「気」と呼ばれる力の正体。それは大陸の人間が言うところの「魔力」であった。だがその魔力の使い方が通常と違って特殊だった。ただそれだけの話であった。

因みに連は気を習得するために毎日あの岩場に足を運び、1日1万回、岩に向かって正拳突きをしていたという。

その連は今、盗賊達の後始末を駆け付けた警備隊の者に頼んでいるところである。警備隊はオリジアの中を警邏（けいら）し盗賊などを排除する、他の国で言うところの警察に当たる組織である。オリジアは商業都市国家、大陸全土の経済の拠点である。同時に大陸全土の金の拠点でもある。故にオリジアは盗賊の襲撃を受けやすい。建国当初は、周辺の小国が出兵してくることもあったという。それらに対抗するためにオリジアは都市全体で人を雇い、独自の戦力を持つことにしたのだ。

「おお、流石だな連。仕事振りが板についてる」

「これでも4年目だからね。俺も運搬手伝いたいけど、流石に疲れてるしなぁ」

連は大陸に流れ着いて以降、この警備隊の一員として働いていた。隊員の中でも珍しい徒手空拳の使い手ということで、正装で警邏する隊員では見つけられない犯罪を取り締まる覆面隊員としてそれなりに活躍しているらしい。

隊員への話が終わると連は龍斗達の間を通り過ぎるように歩いていった。4人もそれについていく。先程疲れたと言っていた連に龍斗が声をかける。

「何なら回復魔法で戻してやろうか」

「あ、それ助かる。なにせ今夜はお楽しみ……ウフフ」

「……夜伽のために回復させるわけじゃないんだが」

「えーいいじゃーん。ご祝儀代わりにさー」

実は龍斗がオリジアを出た後、いつの間にか連と霞は結婚してい

た。龍斗がそのことを知ったのは年が明ける前、修行の為にオリジアに戻ってきた時である。因みにご祝儀は「既にもらってるから」と言って2人から断っていた。

「か、霞さん、それは……ねぇ、姉さん」

「そ、そうですよ。それと龍斗様、何故そんなにはっきりと言葉に――」

「別にいいじゃん、発言は自由よ。それよりもお2人さん……どうなの、龍斗君の下の槍は」

「阿呆」

「きゃっ、いったー！！」

赤くなったマーティス姉妹の顔がさらに赤くなるのと同時に龍斗が霞の頭を叩いた。相当な威力だったらしく、霞の目には涙が滲んでいた。

「もう、何？　まさかまだ手つけてないの？　こんな美人姉妹を手籠めに出来るなんて滅多にないことでしょうに」

「身内に手を出すほど甲斐性無しじゃねぇっつったよな？　そんなに殴られたいか、よし、なら衝撃付きであと１０７回殴ってやろう」

「申し訳ございませんでした」

普段男勝りな性格の霞が素直に頭を下げた。有言実行、やると決めたらどんなことでもやり通す龍斗の性格を知っているが故に、大人しく謝っておいた方が良いと判断したのだ。

「まあこの辺で許してやるか。おお、ちょうど旅亭まで来たか。じゃあな、お2人さん」

「ああ、じゃあな」

「じゃあねー3人共」

『お疲れ様でした』

龍斗達3人は旅亭の屋内に消えていった。連、霞夫妻も2人揃って通りの人ごみの中へと入っていった。

第２８話：セトラベルク

エルグレシア王国は大陸内で最も広い面積を持つバース平野、その３分の２を国土として保有しており、大陸最大の面積を誇る大国として名を知られている国である。元々は平野の北部にある、現在のオリジアと大差ない程度の小国だったが、建国当時から軍事力の強化に努め、周辺国への侵攻を繰り返し相手国を支配下に取り込むことで成長してきた軍事国家としても知られている。

軍事国家が軍事国家たる所以は、当然ながら国が持つ軍の強さにある。軍を構成するのは兵士である。その兵士は普通、幼少の頃から様々な訓練や徹底した教育を受けて兵士となる。しかしこの方法では即戦力は手に入らない。適性というのもあるため兵士が戦力となるまでに相応の時間が必要となるからである。傭兵を雇うという手段もある。しかしこれには相当なお金が必要となる上にリスクも高い。雇われの兵には国のために命を捨てる覚悟などありはしない。少しでも身の危険を感じたら我が身可愛さに逃走する者ばかりだからだ。

そこで３代目エルグレシア王トルドカーズが考案したのが国王主催の武闘大会。世界中の猛者共を集め戦い合わせ、実力を確かめた上で軍に登用するという方法である。集まってくるのは腕に覚えのある者、更にその中で真の強者を選び出すことが出来る画期的な方法なのだ。ここで一定の実力を認められた者が軍属を希望した場合、徹底した教育を受けなければならないものの即戦力として兵士になることが出来る。そのシステムは非常に大きな効果を表したため何度も行われたという。それは今でも年に１回、春に行われており、エルグレシア王国の伝統行事として定着している。

「やっと着いたか、セトラベルク」

渡し船から下りた龍斗は、その視界の中にある今までに見たことの無い尖塔の集合体を確認しながらそう呟いた。

バース平野には2つの大河が存在する。1つは隣国との国境となっているセルゾア河。もう1つは、今しがた龍斗が渡ってきたオライン河である。どちらもランドレイク大陸の中央にある大きな淡水湖から、平野を貫いて海へと通じているのだが、セルゾア河が元から存在する天然の大河なのに対し、オライン河はエルグレシア王国によって作られた運河であるという点において違いがある。何百年、何百億ドルクをかけて作られた運河は農業の発展に大きく影響したという。オレイン河が完成したことによって3つに分断されたバース平野。王国内では、オレイン河以東の地域をレフトベルク、2つの河に挟まれた地をセトラベルク、セルゾア河以西をライトベルクと呼んでいる。なおライトベルク地方は10年前のクーデタ以降自治政権を擁立しており、現在も対立が続いている。

オリジアでの盗賊騒ぎから1週間後、龍斗と姉妹はエルグレシア王国に到着した。そして修行期間の間は渡ることの無かったオレイン河を渡り、セトラベルクに向かっていた。

「どうでもいいことだが、左と右(レフト ライト)って逆じゃないか？」

地図を広げて疑問を口にする龍斗。その一歩後ろから疑問に答える声があった。

「それは王都、正確に言えば王宮から見た様子で決定された名称だからです」

「なるほどな。京の左京、右京と同じか」

レイアの返答を聞いて納得する龍斗。レイアは聞き慣れぬ言葉に首を傾げたが、すぐに疑問を捨て去った。龍斗もただ気にするなと言っただけで済ませた。説明したところで龍斗の生まれ故郷である大和のことなど彼女に分かるはずもない。

「で？　ミーアの方は大丈夫か？」

心配する龍斗に向けてミーアが顔を上げた。その顔には血色が無い。

「え、ええ、大丈夫です。姉さんに回復魔法かけて頂いたので……」
ミーアは船酔いしていた。船に乗っている時間は３０分ほどだというが、陸を離れてものの数分でこうなってしまったのだ。
（仕方ないよな。船だしな）
レイア、ミーアにとって船は悪い思い出の乗り物である。船に乗っているところを海賊に襲われ、奴隷に身を落としたのだから。精神的なダメージはそう簡単に消えることはない。恐らくはそれも一因にあると龍斗は踏んでいる。因みに龍斗も１人舟に乗って嵐に遭い大陸に漂流、と悪い思い出があるのだが、自分の事は棚に上げていた。
「まあ、少し休ませた方がいいか。いよっと」
「え、りゅ、龍斗様！？」
突然龍斗に担がれたミーアは驚きの声を上げた。極力揺れを抑えて木陰まで運び、静かに下ろして座らせる。
「暫くミーアは休んでろ。なんか飲むもん持ってくるから」
「え、あ、そんな……」
「レイア、様子見といてくれよ」
「承知しました。行ってらっしゃいませ龍斗様」
分かってる、とでも言うように片手を挙げ、龍斗は２人に背を向けた。

「ああ……行っちゃった……」
そんなことして頂かなくても大丈夫です。そう言おうとしたミーアだったが龍斗の声に阻まれて言う事は出来なかった。気付けば姉と一緒に取り残されている。
「まあ、あの人はそういう人だから。貴女だってもう十二分に分かりきってることでしょ」
レイアが微笑みながらそう言った。我が姉ながらかなり魅力的だと思うミーア。

「分かってるわよ。でも、さ……私達あの人に何かしてもらうばかりじゃない。いくらあの人が言っても、私達はその、どー―」
「あら、何か不満？　人を人と見ない酷い物扱いの方がいいの？」
「そ、そんなこと言ってない！！」
「ミーア。私達は『従者』、自分の意思でついてくって決めたんでしょ。だったら素直に従いなさい。従う命令が無いならあの人が望むように振る舞えばいいの。それが従者ってものよ」
諭すようなレイアの言葉に釈然としないままミーアが頷く。
「……うん……分かってるけど……」
「ん、どうした？」
「え、あ、龍斗様」
「お帰りなさいませ」
突然降ってきた影に驚いたミーア。いつの間にか龍斗が戻ってきていたのだ。手に持っていた紙コップの１つを差し出してきた。
「あ、有難うございます」
「はいレイア」
「有難うございます」
姉妹は紙コップを受け取り、ゆっくりと飲み始めた。中身はミーアが好きな林檎のジュースだった。それを飲み終える頃には大分落ち着き、嘔吐感も無くなった。ふう、と一息ついたミーア。
「すみません、もう大丈夫です。ご迷惑おかけしました」
「困ったときはお互い様。んじゃあ行きますか、今日の宿に」
『ちょっと待って下さい』
歩き出そうとした龍斗を姉妹が止めた。振り返って姉妹を見る龍斗。
「……なんだよ２人して」
「龍斗様、ご自身が飲んだ分の紙コップをお忘れですよ」
「まさかポイ捨てするつもりですか」
「あー……任せた」
そう言って龍斗は町の方へと走り出した。

「あ、逃げた！！」
「お待ち下さい！！」
レイア、ミーアが後を追った。２人は怒っていながらもどこか喜色が浮かんでいるように見えた。だが、後ろを振り向かず、また即応の霧も発動させていない今の龍斗にそのことを知る術は無かった。

第２８話：セトラベルク（後書き）

不定期と言いながら連日投稿のような状態。
突然ですが週１くらいのペースに切り替えたいと思います。大した理由はありませんが、「急いては事をし損じる」「急がば廻れ」ということでよろしくお願いします。
今週はこれで、２９話からは土日の間に更新する……つもりです。

第２９話：舞台、コロッセオ（前書き）

取り敢えずすいませんｏｒｚ
週１にするとか言いながらいきなり破棄します↑
理由は……書いたのにＵＰせず手元に置いとくってのが出来なくてですね↑
やっぱ書き終えたら上げるのが一番いいです、はい
とゆーわけで不定期で上げます。更に個人的にめでたい日なので↑
２話同時更新です

第２９話：舞台、コロッセオ

「オリジアも大概だと思ってたが……こりゃ桁違いだな」
「当然です。ここは王都ですから。王都というのは国を統べる王の御膝元、その国の中心です。当然他国から最も注目される場所ですね。国の中心である王都の様子が、その国の現状を反映していると看做されますので。王都が繁栄しているということは、王が有能な証である、と言う者もいます」
「もっとも、王が見栄を張るためにあの手この手で繁栄させている所もありますが」
「なるほど、よく分かった」
セトラベルクの北側にある王都セトレア。地図で見る限りその面積はオリジアよりも幾分か小さい。だが龍斗は、関所を通る前からここがただの街ではないということを感じさせられた。
まず王都を囲む城壁の高さ。オリジアの場合は森の木が要害となることもあってそれほど高くする必要は無かった。１８歳になり、身の丈六尺、即ち身長１８０?に成長した龍斗が軽くジャンプすれば天辺に手が届く、その程度の高さだった。
だがセトレアの城壁はそんなものではなかった。軽い目算でも龍斗の身長の2倍はある。さらにその下には、白く輝く鎧を身に纏った兵士が5人。彼ら顔はどれも引き締まっており、真面目に仕事をこなす性格であることが窺える。暇そうな顔をしてやっつけ仕事をしているような他の街の門番とは明らかに違う。
（徹底した教育、か。なるほど、確かにレベルは高そうだ）
龍斗達は関所を通り、通行税を支払った。対応した兵士の１人が龍斗に尋ねた。
「冒険者か。この時期に来るってことは、春闘目当てか？」
春に行われる伝統行事、国王主催の武闘大会。その通称が春闘である。

「ええ、まあ」
「そうか、なら頑張れよ。共に働けることを期待するよ」
「有難うございます」
（目を見る限りあれは素だな。なかなか人当たりのいい兵士だ。いや、だからこそ門番やってんのかね）
そんなことを考えながら、龍斗は華やかな王都の中へ足を踏み出した。

歴史を感じさせる古い石の壁。セトレアを囲う城壁よりも高い赤い壁がセトレアの一部を切り取っている。この建物こそ春闘の舞台となる場所、闘技場（コロッセオ）である。その壁には入り口となる穴が２０。龍斗はそのうちの１つから屋内へと入っていった。
（力を示し、勝ち残れば王国騎士への道が約束される。安定した収入、衣食住の心配なし。国に縛られるという欠点はあるが、普通に生きていく分には好条件。だから不安定な生活から抜け出すために冒険者の参加が何時も多い、か。まあ、俺もその１人だな）
ホールの中を歩きながら、龍斗は巷（ちまた）で聞いた春闘についての情報を整理した。『即応の霧』を発動させていないにもかかわらずかなり多くの視線を感じ取る。そのほとんどは、彼の後ろに控えるマーティス姉妹に向けられていた。その後龍斗に軽く敵意を滲ませたような視線が向けられる。当然ながら、その視線の主の９割は男である。それらを全て受け流し、龍斗は受付係の前まで行った。姉妹と出会ってから２年間、人がある程度いる場所ならどこに行っても大抵同じ状態になるため、そういう視線にはとっくに慣れてしまっている。
「すいません、春闘の受付はここですか？」
「ええ、そうですよ。参加者ですか？」
「そうです」
受付にいたのは黒縁の眼鏡を掛けた金髪の若い男性だった。人当

たりの良いように笑顔を作ったその人は、自分の前に置いてある水晶を手で示す。
「では参加登録をしますので、カードのご提示をお願いします」
龍斗はカードを出現させ、相手に渡した。男性はそれを水晶にかざした。ある一点から光が現れ、空中に文字を刻んでいく。
「東龍斗さん、１８歳。職業は冒険者。はい、確かに確認しましたよ、と。では登録完了です」
そう言って返されたカードを見て、龍斗はあることに気付いた。
「ん？　このマークは何ですか？」
龍斗が指差したのはカードの右下。そこには今まで存在しなかった謎のマークがついていた。２振りの剣を交差させた中に、黄金に輝く獅子の顔。
それを見た受付係が即答で答えた。
「ああ、それは今回の春闘に参加しますっていう証明のマークですね。あ、そうそう、店によっては参加者だけに特別サービス、なんてところもありますよ」
「なるほど、ありがとうございました」
礼を言ってホールを突っ切りコロッセオの出口へと向かう。参加希望の一団を避け損ない、そのうちの１人の足を踏んでしまった。
「おっと、ごめんよ」
謝罪をして出口に向かおうとしたその時だった。
「待て貴様ら！！」

第３０話：オルドラン家の三男坊

「待て貴様ら！！」

そんな叫び声がホールに響いた。辺りを見回してみた龍斗。他にホールを出ようとした者がいなかったことから、その声は自分達に向けられたものだと判断した。だが龍斗が止まったのは一瞬のみ。用はもうないと再び外に出ようとした。

「待てと言ってるだろうが！！」

龍斗は再び足を止めた。一瞬遅れてその喉元に剣が突き付けられる。剣の持ち主が横から声をかけてきた。

「貴様、この俺様の前を無断で通り過ぎたばかりでなく、俺様の足を踏んづけて行きやがったな？」

後ろに控える姉妹が息を飲むも、龍斗は無表情のまま藍色の目を声の主に向けた。青い目に金髪という大陸ではよく見かける特徴に浅黒い肌。その男は眉間に深いしわを寄せ、こちらに怒りを表していた。

（何だ、こいつは？）

顔を見た瞬間に龍斗は『即応の霧』を発動させた。これは2年間の修行で得た成果の1つである。即ち、レイア、ミーアが使う強化魔法と同じように身体能力強化系の忍術を呪文無詠唱で発動出来るようになったのだ。そしてもう1つの成果。それは魔力使用時に起こる目の変色をある程度制御できるようになったことである。といってもこれは非常に簡単なことだった。『即応の霧』は大陸の魔法で言えば『感覚強化（センス・ポイント）』に当たる。人間が持つ感覚は視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の５つ。感覚強化（センス・ポイント）はこれら全てを魔力によって強化する。当たり前の話だが余計な感覚を強化するのは魔力の無駄である。そのことに目をつけた龍斗は、特定の感覚に絞って強化する方法は無いものかと2年間探し続けた。

そして見つけた。それは非常に簡単なことだった。即ち、その感

覚を司る感覚器官に魔力を通さなければ良いのだ。味覚を強化しないのならば舌に魔力を通さなければ良い。同じように、視覚強化が必要ないならば目に魔力を通さなければ良い。そして目に魔力を通さなかった場合、藍色の目が紫に変わるという現象は起こらなくなった。このことはレイア、ミーア姉妹によって確認済みである。なお、これは感覚強化魔法だけの特性で、その他の魔法を使用する時は変色を抑えることが出来なかった。

「おい、まずいぞあれ……」
「ありゃ死ぬぞ」
「ヴァンサードだ……」
「オルドラン家の三男坊……」
「また奴か……」
聴覚と触覚に絞った『即応の霧』により、周囲の小声を拾った龍斗。ほんの少し盗み聞きしただけだったが、龍斗が判断するには十分な情報があった。
(家、ということはよう分からんがどっかお偉いさんの七光りか。しかもまたって普段からやばい奴なんだな)
判断したところで態度を変えるわけでもなく、龍斗は普段通りに口を開いた。
「ちゃんと謝ったんだからそれでいいだろ。分かったらそれ下ろしてくれ、物騒な」
龍斗としては当たり前のことを言ったつもりだった。だが相手は刃物を下ろすどころかより一層しわを深く刻み、怒りで肩を震わせた。頭に血が上り、顔が真っ赤に染まった。
「貴様……!!　誰に向かって口をきいておる!!　平民風情が楯突きおって、目にもの見せてくれるわ!!」
『龍斗様!!』
今まさに龍斗の首を切り落とさんとしていた腕が止まった。男の

視線が龍斗の首からその後ろに向けられる。龍斗の目は見逃さなかった。男の目が、欲にまみれた卑劣な光を放つところを。駄目押しで下卑た笑みを浮かべながら、龍斗の方に向き直る男。この時点である程度の予想はついていた龍斗。果たしてそれは現実のものとなった。

「おい、この2人は貴様のものか？　そうだ、この2人を俺に寄越せ。そうすれば貴様の命は助けてやらんでもないぞ？」

（……だと思ったよこのど阿呆が）

呆れてものも言えない龍斗に、下卑た顔を崩さぬまま男が畳み掛ける。

「どうした、返答は！！　……ああ、俺様怖さに声も出せんか。ククク、そうだ、畏れ多くも貴族の名門、オルドラン家のヴァンサード様がわざわざ平民に声をかけてやったんだからな。平民はそれに感謝し出すものを出せばよいのだ！！」

そう言って男は空いている手をレイアの方に伸ばした。その瞬間、龍斗は突きつけられていた剣を跳ね上げ腕を掴んだ。右手で相手の首を捉え、右足で相手の右足を払いバランスを崩し、そのまま腕を前に出して男を地面に倒す。大和に伝わる古流武術、柔道の技の1つ『大外刈り』である。

己が身に起こったことを理解できず、呆けた顔をしている男に、龍斗は顔を近付けた。そこには何の表情も、感情もない。

「何処の誰かは知らんがな、理不尽な理由でうちの妹に手出させやしねぇぞこのど阿呆が」

辺り一帯が完全な沈黙に支配される中、龍斗達3人はコロッセオを後にした。暫くして支配が解け、誰かの叫び声が3つ先の通りまで響いてきたが、龍斗がそれに気をやることは無かった。

「……よろしかったのでしょうか」

「ん、何が？」

コロッセオから3区間離れたオープンテラスのカフェで休憩していると、ミーアが不安そうに呟いた。龍斗はクッキーを食べながらのんびりしているが、姉妹は些か気まずそうにしている。
「詳細は覚えていませんが……エルグレシア王国のオルドラン家といえば、かなり有名な貴族の家だったと思います」
レイアの説明に龍斗は一瞬眉を顰めた。
「貴族？　そいつぁどういう身分だ？」
「えっ……あ、はい、貴族というのは、例えば建国の際に活躍した戦士だったり、亡国の危機を救った英雄だったり、そういった者に国王が与える身分です」
「……て、さっきのあいつが英雄か？　どう見ても蛮勇だろ」
「貴族という身分は個人に与えられるものではありません。そうですね、血統そのものに与えられると考えて頂ければ分かりやすいかと。つまりあの方の祖先がそういう方だったということです。世襲制なので、国王が剥奪を明言しない限り代々その名を残すことになります」
龍斗はグラスを傾け、中身を全て飲み干した。口元に手を当てる。
「因みに特権とは？」
「主なものとしては国土の一部を統治する権限、つまり領主権ですね。一定の租税を国王に支払う義務が発生しますが、それ以外は基本的に自由です。また一定の軍を率いる権利が与えられますね」
「……確実に腐るなその体制」
溜息をつきながら背もたれに体重を預ける。
「まあ、誰が相手だろうが関係ない。正々堂々戦って勝ち残ればいいだけだ。何位まで上がればいいか知らないけど」
「やはり王国騎士団に入るおつもりですか」
「そりゃそうだな。冒険者なんて不安定な職で家族3人がやっていけるとは到底思えない。かといって商人や鍛冶屋に転職するのは無理だしな。騎士団に入るのが一番いいだろう」
「いや、その、私達の事もお考えなのでしたら、何もそこまでそこ

までして頂かなくても……」
「そ、そうですよ！！　自分の分は自分で稼ぎますから……」
「大和なら2つ返事で雇ってくれるとこもあるかもしれんが、ここはそういう訳に行かんだろ。安定した収入の方が何かと都合がいいしな。さってと、どっか近くに宿は無いかな」
『あっ、お待ちください！！』
龍斗達は席を立ち、宿を探して通りに消えていった。

第３１話：第２０３回エルグレシア王国国王主催セトラベルク春季武闘大会

「それでは大変お待たせ致しました！！　これより、第２０３回エルグレシア王国国王主催セトラベルク春季武闘大会を開催いたします！！」

壇上に上がった男の声に、コロッセオ全体から大歓声が沸き上がった。その拍手と声量の大きさに龍斗は顔をしかめた。

まず１回。１拍置いて３連続、男の手の動きに合わせ、全員が同じタイミングで手を叩いた。それと同時に会場に響く声も治まった。

「なんなんだこの茶番は……」

「……そう仰らずに」

思わず口に出た龍斗の呟きに、苦笑しながらレイアが言った。

龍斗がいるのは闘技場（コロッセオ）の中の観客席に最も近い場所。参加者は全員、戦いの場となるグラウンドの中にいる。一方参加しないマーティス姉妹は壁を隔ててすぐ後ろ、観客席の最前列に座っていた。３人は観客や他の参加者たちの熱気に馴染めず辟易してしていたが、続く注意説明に気を引き締めた。

音量を上げる魔法を付与した道具を使用しているので、男の声はコロッセオ中に響く。

「それでは毎年恒例の口上ですが、ルール説明をいたします！！　ルール説明をいたします！！　大事なことなので２回言いましたよ！！　まず戦闘方法ですが、これは総合戦闘、即ち自由です！！　得意剣でもハンマーでも拳でも魔法でも、とにかく自由です！！　なお武闘大会中、このコロッセオには王国魔術師団の方々による特殊結界が張られております。これによりコロッセオ内の戦闘は管理戦闘、即ち致命傷を負っても死ぬことの無い、一定の安全が確保された戦闘です！！　各々の力を存分に発揮して下さい！！」

龍斗以外の参加者から歓声が上がった。

（やかましい……ああ、イライラする！！）
龍斗は内に怒りを秘め、ただ眉を顰めるに留まった。

「それでは只今から春闘第１ブロック１回戦を行います！！」
宣言と共に歓声が上がり、グラウンドでは剣を交える音、爆発音などが響き始めた。
「さて、この対戦形式でどうなるのか見物だな」
のんびりとした口調で言った龍斗。彼が今いるのはマーティス姉妹のすぐ後ろにある観客席。抽選の結果第３ブロックにふられたため暫くは時間がある。特にすることもないので対戦が始まるまで他の対戦を見ておこうと思ったのだ。
第１回戦はバトルロワイヤル。参加者５０人が自由に戦い、最後に残った１人のみが次に進むことが出来る。この方法でベスト３２を決定し、後は１対１によるトーナメント戦となる。総勢１６００人の中からただ１人の頂点を目指す戦い。それがこの春闘なのである。ベスト１６以上に残った者にはそれぞれの順位に合わせて一定の賞金、更に王国騎士団員としての勲章を与えられる。誰もがその栄光を手に入れるため、結界のお陰で相手を殺すことが無いというのもあって全力で戦っている。
「ふむ……本当に何もかもばらばらだな。魔術師も戦士もごっちゃか。剣は言わずもがな、鉄槌、槍、あれは徒手空拳か？　魔法も詠唱系が目立つが、強化系使ってるのもいるな。誰を相手に戦っても勝ち残れるような実力者、それを見極めようってか」
「そう言う事ですかね……龍斗様、これではあの戦法は無理なのでは？」
ミーアが振り返り、龍斗にそう尋ねた。いつものように飄々とした態度で龍斗が言う。
「いや、予定通りあの戦法で行く。前衛陣は力とスピード頼り。魔法は威力大だがそれに比例して溜め、詠唱時間が長くなる。飛び道

具は……基本狙いを定める必要があるからなぁ。やっぱ隙が出来るな。懐に入られたら終わりって奴がほとんどみたいだし。今回の５０人だと誰かな……あ、あのでかい剣持ってる奴が残るかな」

「典型的な一般論ですね。それで言えば龍斗様は魔法が使えて接近戦も出来る。臨機応変に対応できるのでは？」

「それはそうなんだがな、レイア。俺は忍、真正面から戦うなんてのは本当は専門外なんだよ。だから姑息な手段を使うが……それだと実力は分からない」

「それで力を絞る、と？」

「ああ。接近戦は元から修行と経験があるからいいが、魔法はこっちに来てから得た力で経験に乏しい。経験を積むにもいい機会だろう」

「しかし、ご自分で仰った詠唱の隙が残りますよ」

「強化系の術で防御、回避する方法もあるし、いざという時は接近戦も辞さない。忘れてないさ、要は勝てば良い。終わり良ければ全て良しだ」

と、その時、戦闘終了の合図となる銅鑼の音がコロッセオに響いた。

「試合終了！！　第１ブロックを制したのは大剣を振るうこの男！！　マルス・ディンバートンだ！！」

グラウンドに立つ１人の男に向けて会場中が歓声を浴びせた。その人物は龍斗が勝ち残ると予想していた人物だった。

「なるほど、あいつか……んじゃ、そろそろ準備しとくかね。次の次だし」

「お気を付けて」

「ご武運を」

姉妹の声援を受け、龍斗は観客席を後にした。

第３２話：大和の力

「それでは第３ブロックの対戦に入りたいと思います！！　暫く準備の時間を取りますので好きな立ち位置を選んでください！！　目立ちたがりは真ん中にどうぞ！！　何をやっても何処からでも丸見えですからねぇ！！」

観客席から爆笑の声が響いた。大和の着物姿で参戦する龍斗は腕を組んだ状態で壁伝いに移動し、自分の立ち位置を決めた。そこは観客が最も少ない位置。

（一応指向性は持たせるんだが……かなりの人を巻き込みやすいからな、念のため）

龍斗は目を閉じ、丹田から魔力を引き出した。外に漏れださないよう注意しながら、最初の攻撃のために静かにその時を待つ。そしてその時が訪れた。

「それでは第３ブロック、始め！！」

開始の号令と共に銅鑼が鳴った。雄叫びを上げ、己の出世に邪魔な周りの者を淘汰せんと一斉に動き出す戦士達。それは龍斗も例外ではなかった。

銅鑼の音が聞こえた瞬間、龍斗は目を見開いた。刹那、龍斗の体から膨大な魔力が放出された。まるで津波のようなその力に飲み込まれたほとんどの者は、一瞬体を硬直させて地に倒れ伏した。魔力の波が引いた後、グラウンド内で立っていられたのは龍斗を含め約２０人ほどだった。

大和に伝わる伝説の１つによると、真の強者はその威圧感のみで相手を倒すことが出来るという。その幻の力の名は『覇気』。龍斗は魔力を使うことでこれを再現したのだ。

今回龍斗は体内に宿る魔力を爆発的に放出した。ただそれだけの

ことである。しかし魔力というのは文字通り「力」である。魔法発動のために消費されるだけのものという固定観念があるが、体力や筋力などと同じ、れっきとした力なのである。そして魔力というのは普通、体から自然に放出されていくので、人によっては敏感に感じ取ることが出来る。それが一般的に「オーラ」「プレッシャー」「威圧感」と呼ばれるものとなる。即ち、ただ放出されただけの純粋で膨大な魔力は、そのまま圧倒的な威圧感（プレッシャー）として相手に伝わるのである。しかもこの力は魔力を引き出し放出するだけで、消費したりはしない。体内に魔力を戻せばその分はまた魔法を発動させるのに使える。数頼みの相手には非常に有効な手段である。

（忍術を筆頭に大和で得た奇術の知識、大陸に来てから得た魔法、魔力という概念に、連から教わった気概空手の気概。この3つを学んだからこそ出来る技だな。さて、残ったのは……）

開始早々多数の戦士が倒れるという前代未聞の事態に、誰もがただ呆然としていた。覇気を受けてなお立っている戦士達には、ピリピリとした痺れのような感覚が残っていた。

その沈黙を破る者が現れた。龍斗の左手から砂煙を上げ猪突猛進の勢いで走ってくる。一瞬跳躍して避けようとしたが、構えに気付いて相手と向かい合った。軽く足を曲げ、胸の前で拳を合わせる。

「忠節尽くし只（ただ）主の勝利が為我が身を盾と為す」

「隴西（ろうせい）一刀流、霧払い！！」

一際大きな金属音が響いた。いつの間にか皆正気を取り戻して戦いを再開しており、その音に注意を向けるものは誰もいない。音を響かせた本人達を除いては。

「……生身で受け止めた、だと？」

「何人も傷つけること、能わず。『忠勝鎧身（ちゅうしょうがいしん）』」

下から掬い上げるように放たれた斬撃は龍斗の脇腹をしっかりと捉えていた。しかししかしその刃が血に濡れることは無かった。相

手の手にあるのは、まるで鋼鉄の鎧を叩いたかのような感触。双方ともに後ろに下がり距離を取った。改めて互いの姿を確認する。

「お主、何者じゃ。よもや刀を生身で受けようとは。それにその格好……拙者、隴西一刀流を心得し坂本糺兆（さかもとれいちょう）と申す者。お主、さては同胞か！！」

坂本と名乗った男は龍斗と同じ大和の着物を着ていた。頭に笠を被り、右手には、龍斗が背負っているのと同じような刀を持っている。『大和』の礼儀として、龍斗も名乗りを返す。

「これはこれはお侍殿、名乗りを賜ったこと痛み入る。我が名は東龍斗。確かに大和にて生まれ育った者。して坂本殿、貴方はいつこの大陸に来られたのですか？」

「約２週間前、といったところか。海に出た途端大きな野分に流されてしまってな。気付けば右も左も分からぬ異国の地よ」

龍斗は頷いた。時期は違えど、龍斗も同じようにしてここに流れ着いた身である。坂本が続けた。

「当てもなくここへ辿り着くと、武闘大会なるものに勝ち残れば、身分は保証され、城に仕えることが出来るという。城を守るが武士の務め、なればと思い参加した次第。ところでお主、得物を抜かんでいいのか」

「侵略すること火の如し、『蛍火』」

印を結んだ龍斗の周りに、ぽつぽつと青白い炎が浮かぶ。それは真っ直ぐ坂本の足元へと飛んでいき、着弾と共に小さな爆発と砂煙が上がる。飛んでいった炎１０個ほどを跳躍でかわしていく坂本。最後の一個をかわし坂本が体勢を整える頃に龍斗が言う。

「生憎、我は忍。なおかつ今回は魔法の扱いを主としておる故」

「まさか忍術が本当に効果を持つとは……されど、是非も無し。東殿、お相手願う！！」

奇遇にもランドレイク大陸のエルグレシア王国という異国にて出会った２つの大和魂。剣劇と歓声が響く中、武士と忍の戦いが始まった。

第３２話：大和の力（後書き）

えー、というわけで（予定にはありませんでしたが）大和人との戦いになりました。……はい。

第３３話：龍斗の魔法

坂本は大きく踏み込むと同時に渾身の力で刀を振り下ろした。龍斗が一歩動くと、その目と鼻の先を刃が通り過ぎていった。刀は地面に触れる前にピタッと止まり、一度引いて今度は足を払いにかかる。一歩後ろに下がることでかろうじて避ける龍斗。

（流石は隴西一刀流、動きに全く無駄が無い）

隴西一刀流は大和の徳間島に伝わる流派の１つ。その神髄は一撃必殺の剣。故に１回１回の攻撃が非常に重く、当たれば無事では済まないことは目に見えて明らかである。

しかし無駄が無いという点では龍斗も同じ。洗練された動きで繰り出される太刀筋を、余計な動作無しに全て紙一重でかわしているのだ。一見すると龍斗が不利に見えるが、僅かな移動で済ませることで体力の消耗を減らすことが出来る。また相手の攻撃の隙をつくことも容易となるので避け方としては一番理想的なのだ。時折他の参加者も攻撃を仕掛けてくるが、２人共上手くかわして戦いを続けていく。坂本の刀を龍斗が避ける、その繰り返し。流石にこのままでは決着がつかないので龍斗は思い切り間を開けた。

「そろそろこちらからも行きますよ。『蛍火』」

手印を組んだ龍斗は青白い炎を出現させて坂本へと飛ばした。先程の牽制用ではない、攻撃として当てに行くためにさらに多くの蛍火が飛んでいく。跳躍だけでは避けきれず、坂本は時々刀で炎を斬り捨てる。炎といえど威力は低く、剣を振る時に起こる風でほぼ無力化出来るほどだ。更に炎の数が増える。ついに坂本は回避を諦め、立ち止まって自分に当たりそうな炎を斬っていく作戦に出た。それを見た龍斗が手印を組み直す。

「動くこと雷霆の如し、『稲妻』」

龍斗の手から青白い光が放たれる。それはあっという間に蛍火に混じり坂本へと飛んでいく。自分の身に当たる軌道の炎を刀で斬り

捨てていく坂本。そして他とは違い異様な速さで向かってくる青白い光も迷い無しに斬り捨てた。

「ぐっ！！　……かはっ」

呻き声を上げながら大きくのけ反った。力が抜け、地面に膝をつく坂本。雷撃を受けたことで感電したのだ。刀を支えに肩で息をする様子に構わず龍斗は距離を詰めた。とっさに横薙ぎを放つもあっさり避けられ、龍斗が坂本の懐に入ってきた。

「機会あらば、次は全力、いや剣でお相手願いたいですね」

「……その言葉、忘れんぞ」

口元を歪めた坂本に、軽く衝撃を乗せた『衝拳』の掌底を打ち込んだ。地に伏せる坂本に背を向け、龍斗は呟いた。

「『自ずから約しき盟を破ることなかれ』……大和の教えを破りはしない」

グラウンド内を見渡してみると、残っているのはいつの間にか5人だけだった。龍斗の『覇気』に屈さなかった強者、更にその中で争い勝ち残った真の強者達。その内の3人ほどがこちらを指差しながら何か話をしている。

（1対3か、なら）

3人が頷き、龍斗の方へ走り出したのを見て龍斗は構える。

「忠節尽くし只主の勝利が為我が身を盾と為す。さすれば何人も傷付けること能わず、『忠勝鎧身』」

剣、槍、先端に金属の塊をつけた棒即ちメイス、これら3つによる同時攻撃を龍斗は全て受け止めた。攻撃が一切効いていない様子に坂本と同じ反応をする3人。

先程も使用していた『忠勝鎧身』は防御に徹底した忍術である。その内容は大陸の魔法で言えば『筋力強化（パワー・ポイント）』で筋肉を強化した上に『防御強化（ガード・ポイント）』で魔力の鎧を纏っている状態。筋肉を硬直させるために身動きが取れなくなるという欠点はあるものの、防御力は鋼鉄製

の鎧以上に高くなる。
　主を逃がすために生きた壁となって見事守り抜き、幾度となく参加した全ての合戦において無傷で帰還したという伝説が残る武将。その人物が編み出した術であるとされている。
「ちぃ！！」
　3人の得物が引いていくのを見逃さず、龍斗が大きく間を開ける。その間にも手印を組み呪文を唱えていく。
「行く川の流れは絶えずしてしかも元の水に非ず、『撃水（うちみず）』」
　龍斗が物を投げるように手を動かすと、現れた水の球体が男達へと飛んでいく。水を当てられずぶ濡れになった3人が我に返った。
「魔法使いか！！」
「詠唱の隙を狙うぞ！！」
「オラ！！」
　槍を持った男を先頭に、再び突進しようとする。だが龍斗は既に呪文の詠唱を済ませていた。
「動くこと雷霆の如し、『稲妻』」
　龍斗が放った青白い光は一瞬で槍の穂先に到達。そこから濡れた棒を伝い持ち主に感電する。煙を上げるのを見てひるんだ2人に龍斗は雷撃を当てていく。3人が完全に気絶したことを確かめた時に、龍斗は足音を聞いて前に転がった。瞬間、その後ろを何かが高速で走り抜けた。龍斗が姿勢を整えると、相手も急停止してこちらを見た。その手に握られていたのは脇差と同じくらいのダガー。
　こちらを見た瞬間に走り出す相手。龍斗も手印を組んで呪文を呟いた。
「動かざること山の如し、『出礫（しゅつれき）』」
　相手の足元に石ころが現れる。何もないことを前提として走っている男はそれに気付かず足を引っ掛けた。たたらを踏んで減速したのを見計らい追撃する。
「其の速きこと風の如し。辻に吹きて斬り裂かん、『鎌鼬（かまいたち）』」
　体勢を立て直した男に容赦なく襲いかかる真空の刃。見えぬ刃に

なす術もなく服は裂かれそこから赤い血が噴き出していく。しかしこの男、気丈にも踏み止まり、息を荒げながらもなお武器を構えてこちらに歩み寄る。龍斗は少し感心したが、それを表情に出す事は無い。

「速きこと風の如し、『突風』」

龍斗から男に向けて一陣の突風が吹き荒れた。その風は並みの威力にあらず、男は軽く１０ｍほど吹き飛ばされた。大の字に伸びているところに魔法で出てきた足元の石を蹴り飛ばす。それは見事に、男の股間に命中した。その衝撃に四肢が跳ね上がり、脱力して地面に落ちた。

「おーっと倒れた！！　１０、９、８、７……」

進行役の声が魔法具を通して会場に響く。春闘のルールの１つ、１０カウント。地面に倒れた後１０秒間起き上がらなかった場合はその人は敗北となる。会場全体がカウントダウンを斉唱する中、龍斗は腕を組み歩き出す。

「６、５、４、３、２、１、０。しゅーりょー！！　第３ブロック、５０人のバトルロワイヤルを制したのは！！　東龍斗だーーー！！」

『ウオオオーーー！！』

その歓声に何の感慨も抱かぬまま、龍斗は会場を後にした。

額を抑えながらコロッセオの出口に向かうと、そこには見慣れた２人が既に待機していた。

『お疲れ様です、龍斗様』

「……おう、２人共。小技とはいえ流石に連発するもんじゃないな。マジで疲れた」

「それは当然です。魔力は無限にあるものではありませんし、龍斗様の魔法は少し特殊ですし」

「本来必要な魔法陣の展開を、手印を組むことで省略。呪文も普通の方と比べればかなり短いですし」

レイア、ミーアは少し呆れたような口調で言った。
「それもそうか。５０人もいて荒れてたのは幸いかな。最後の方で知られたかもしれんが……次からは確実に駄目だな。１対１だし、魔方陣無しで魔法使ってたらまずいわな」
苦い表情で答えながら、龍斗達は宿へと帰っていった。

第３３話：龍斗の魔法（後書き）

魔法戦は難しい……

ユニーク６０００人越え、お気に入り７７件、総合評価２１７、皆さん有難うございます。

第３４話：第2回戦　魔術師アゲート（前書き）

どうでもいいことだとは思いますが対戦相手の名前を知り合いに考えてもらいました。それに私はミドルを入れたんですが↑

有難うございます。では、どうぞ

第３４話：第２回戦　魔術師アゲート

３日後、第１回戦が全て終わり、第２回戦へと進んだ３２人がコロッセオのグラウンドにいた。まだ日が昇って間もないというのに、会場内は既に熱気に包まれている。今行われているのは第２回戦の抽選。トーナメントの位置決めである。着物姿の龍斗は相変わらず腕を組みながら静かに様子を見守っていた。進行役の声が響いた。

「第２回戦以降のトーナメント表を発表いたします！！　モニター、カモン！！　参加者の皆さんはカードに表の情報を送りますので、そちらをご確認下さい！！」

龍斗は自身のカードを呼び出した。見てみると春闘参加を証明するマークが青い光を放って点滅している。試に指で触れてみる。薄い膜のような光がカード上に現れ、黒い線が枝分かれになっている図が浮かび上がった。その末端は上に１６、下に１６。下段の左から２番目の所に赤い点があるのを見つけ、そこに触れる。途端に図が拡大され、それぞれの線の下に人名があるのが分かった。赤い光が点滅している下には東龍斗と書かれている。参加者の頭上には膜を形成している光が巨大な球体となって浮かんでいる。これでコロッセオのどこにいてもトーナメント表が確認できる。

「抽選の結果、トーナメント表はこのようになりました。参加者の皆さんが見ている分には自分の名前の上に赤い点滅があります。これは皆さんがトーナメントをどこまで進んだかを示すマーカーです。勝ち進む毎にそのマーカーも動いていきますので、頑張って下さいね。試合の進行は下段の左端から、その次に上段の左端からという順番です。それでは第２回戦第１試合を始めたいと思います！！第１試合の選手以外はグラウンドからご退場下さい！！　選手のお２人は中央にお願いします！！」

龍斗はもう１度カードを見た。自分の名前があるのは下段の左から２番目。その線は左端にある線と合わさって１本になり先へと続

いている。
（と、いうことは……俺は第1試合か）
カードを仕舞った龍斗は中央へと歩いていった。

夜を思わせる濃紺のローブを身に着けた男。胸の中央部には透明な石が月のように輝いている。左手に持つ短い棒にも同じような石が嵌めてあった。棒には華美な装飾が施されているが、それは単なる飾りではない。短棒はワンドと呼ばれる魔法具で、その装飾には魔力増幅の効果がある。石も魔法石と呼ばれるものである。
魔法石は自然の中に存在する魔力が凝縮、結晶化したもので、魔法を使う際の補助として大いに役立つ物である。またほとんどの魔法石には属性がある。属性持ちの石に魔力を通すと、その属性の魔法の威力が格段に上がるのだ。例えば、龍斗と対峙している男のワンドには炎属性を表す赤い魔法石が嵌まっている。これに魔力を通して炎属性の魔法を発動した場合、何も使わない時の5倍は威力が変わるのだ。またワンドや魔法石を使うことによって本来必要な詠唱を省略する事も出来る。
無論この男は、大陸では一般的な魔法を用いて戦闘をする者、即ち魔術師である。
（さて、本格的な魔術師を相手に、俺の術がどこまで通用するのか……）
和服姿で腕を組む龍斗は静かに相手を見据えた。因みに今回は太刀『東雲』を背負っていない。使わない武器を持っていても意味がないので、宿屋の部屋に置いてきた。
「それでは第2回戦第1試合を始めます！！」
進行役の宣言が響いた後、男はワンドの中央を持った左腕を前に出してきた。そのまま静かに言葉を紡ぐ。
「私の名はアゲート・パウロニア・ジャスパー。見ての通り魔術師だ。して、貴方は」

相手の名乗りに応じるのは大和の礼儀。何の表情も出さずに龍斗が応えた。

「東龍斗。近接格闘もあるが……一応、魔法だな」

「ほう、そうですか。では魔術師同士、正々堂々――」

ゲオハルトの言葉は途中で止まった。代わりに目が大きく見開かれる。龍斗が何か動いたわけではない。ただ腕組みをして立っているだけ。だがゲオハルトにはその姿が2倍にも3倍にも大きくなったかのように感じた。それは龍斗から放たれた威圧感（プレッシャー）故のものなのだが、それをアゲートが知る由もない。

「……流石にバトルロワイヤルを勝ち残った人間。そりゃ覇気ごときで倒れるわけないわな」

「な……何をした……！！　炎の精霊サラマンダーよ！！　その偉大なる御力を我に与えたまえ！！　眷属に与えしその力、その業火を今ここに示せ、『フレイム・バーナー』！！」

「ゆく川の流れは絶えずしてしかも元の水に非ず、其は全てを押し流す怒涛、『鉄砲水』」

アゲートが持つ棒の装飾が光り出し、彼の正面に1つの魔法陣が現れる。更に、赤い魔法石が光を放つと魔方陣が赤く染まり、人を丸ごと飲み込むような大きな炎が龍斗に向かって真っ直ぐ進んでいく。

対する龍斗は、手印を組んだきり暫くは動かなかった。相手の詠唱途中から呪文を唱え、相手とほぼ同時に魔方陣を展開させた。アゲートの赤に対し龍斗の青く光る魔方陣からは、言葉通り人どころか家ですら流れていきそうなほどの大量の水が炎に向かって進んでいく。

「なっ、なんて早さだ……ワンドの魔力増幅、魔法石の力まで使って……」

水蒸気を上げながらも炎と拮抗、いや、徐々に飲み込みつつある水流を見てアゲートは驚いた。

第３４話：第２回戦　魔術師アゲート（後書き）

アゲートは勇気、ジャスパーは生命力とか自然の回帰とかそんな意味だそうで。

第３５話：魔法合戦

大陸の一般常識で魔法とは詠唱系魔法のことを指す。魔法の発動に魔力が必要なのは言うまでもないが、もう１つ重要な要素として詠唱がある。

詠唱とは、魔法を使う代償として魔力と共に神や精霊に捧げられる言葉である。そもそも詠唱系魔法というのは、大陸で広く信仰されている宗教上の神や精霊にその信仰心を示し魔力を与えることで、与えた側が神や精霊の加護を享受しその力の一部を具現化することが出来る、という物である。端的に言えば、

「天の神様精霊様、私は貴方の事をこれだけ深く信じてます敬愛してます尊敬してます。その信仰心と魔力をあげるから見返りに貴方たちの力を使わせてね」……という理論なのである。

そして詠唱の要素は３つ。

「対象」どの神や精霊に捧げるのか、冒頭につく「～の神／精霊よ」の部分である。

「心象」心に浮かぶイメージ、つまり神や精霊の力や自分が起こそうとする現象のイメージを固める部分であり、言葉としては神や精霊への祈り、お願いをするような文面になる。

「現象」どのような現象を起こすのか、これは大抵魔法の技名として収まる。

この内「心象」の部分は人によって長さも言葉も大きく変わってくる。それは魔術師の力量に関係する部分で、力量のある者ほど省略することが出来る。同じ神に祈り同じ現象を起こすのにも、「心象」無しで仕える魔術師もいれば「心象」に何分もかけてようやく出せるといった者もいるのだ。

最終的に詠唱で不可欠なのは「対象」と「現象」だけ。戦闘において長々と呪文を唱え続けることなど出来ない。その間は大きな隙が出来るからだ。何十人を巻き込む攻撃が出来たところで発動させ

る前に封じられれば意味がない。だから魔術師にとって早さというのは非常に重要な要素である。如何に呪文を省略し、如何に早く唱え、如何に強力な攻撃が出来るか。そしてどれだけ状況判断が出来るか。それが魔術師に求められる技能なのである。

呆気にとられていたアゲートは魔術師に必要な力の事を思い出し我に返った。何とか判断力を取戻し、再びワンドに魔力を通す。

「くっ、俺としたことが。水なら雷だ……雷の神トールよ、その鉄槌は敵せん者を全て打ち砕く!!　その御力を我に与えたまえ!!　その力にて我が敵を貫かん、『ミョルニル・サンダー』!!」

ワンドの装飾、そして今度は赤い石とは真逆の位置にある黄色い魔法石が光を放つ。赤い魔法陣が消滅すると共に黄色い光の魔法陣が現れ、火炎から雷撃へと変わっていく。その雷は意思を持つように宙に集まり、やがて巨大なハンマーのような形を作って龍斗へと落下していく。

しかし龍斗の対応も早かった。

「『我田引水』、水を以て壁と為す、『水壁』」

炎が消えたと同時に素早く手を動かす。すると一直線に噴出していた水が軌道を変え、魔方陣を中心に巨大な球体となる。両手を広げるように動かすとそれに合わせて水も形を変え、結果龍斗の眼前には水で出来た巨大な壁が完成した。

水の壁と雷のハンマーが激突した。周囲に轟くは雷鳴と水の蒸発する音。先程よりもさらに多い水蒸気を発しながらも、水は電気を吸収し龍斗に当たるのを防いでいる。アゲートの集中が切れたのか、黄色い光の魔法陣が消滅した。肩で息をしつつ龍斗の方を見る。

「な、なんて奴だ……上級魔法だぞ、それを水で作った壁に吸収するなんて……しかも何なんだ、陣を変えてないのに、水が形を変えた……？　水は専門外だが、そういう事じゃない。火だろうが雷だろうが、形変われば陣も変わるはず……」

魔法は対象に祈りを捧げ、攻撃のイメージを心象で固め現象を起こす。それが大陸における「詠唱魔法」の一般常識。だが龍斗の使う魔法は「魔法」ではない。「忍術」であり「妖術」なのである。

そもそも龍斗は「対象」、神や精霊に祈りを捧げていない。「心象」の言葉しかないといえる。その「心象」の言葉の中にも属性を指定する言葉はあれど神に対する言葉は無く、あるのは「現象」に対するイメージのみ。これは龍斗が１５年間暮らしてきた島国大和で教わった術の呪文だからである。大陸と大和では根本的に文化が違い宗教観も違う。それが魔法発動の呪文にも影響していると考えられる。

そしてもう１つ、上級魔法と張り合うほどの魔法を使っておきながらその詠唱はかなり短い。これは手印という大陸の魔法には無い物を組んでいるからである。様々な組み方を全て覚えるのも大変だが、それを瞬時に組むのはもっと難しい。しかしこの手印を上手く結べなければあらゆる術を発動させる事は出来ない。龍斗はそう教えられて育ってきた。しかし2年間の修行期間の内に龍斗は気付いた。

結論を言うと、この手印を組むという行為はアゲートのワンドや魔法石と同じ、魔力増幅、属性指定の効果を持つものだったのだ。更には魔方陣と同じ役割も果たしている。余談としてマーティス姉妹の見解を挙げると、魔法というものの理論が確立されていない時代、魔力を持たない者が無理に術を発動させようとした名残ではないかとのこと。大陸でも詠唱魔法を戦闘でメインに出来るほど魔力を持つ者は少ない。元々発動させることが出来る人間が少ないがために大して効果の無いものと看做されるようになったのでは、という話である。

「さて、そろそろ行くか」
龍斗は再び腕を動かす。それと同時に水の壁がさらに形を変え、また巨大な球体となる。だが今回はあちらこちらに電気のスパークが走っている。アゲートも今度は硬直せず、相手が動くと同時に呪文を唱えた。
「炎の神アグニ、雷の神トールよ!!　汝らの力をここに!!　『ファイアボルト・ストーム』!!」
「『我田引水』、其はあらゆるものを飲み込む大波、『波浪』」
手印を組むと水球が弾け、大きく広がりながらアゲートへ向かう。アゲートは赤と黄色2つの魔法陣を展開し、下級魔法の小さな炎と雷撃を連続して何発も撃ち続ける。だがそれらは全て水の中に消えていくだけで、どれ1つとして龍斗に届く事は無かった。
「ぐっ、ぐあっ、あ、あああぁぁぁ……」
波がアゲートを飲み込んだ。全身が水に濡れていくと同時に自身が放った雷に身を貫かれ苦痛に顔を歪める。波が通り過ぎた後、アゲートはもはや立っているのがやっとだった。ふらふらと体を揺らし、朦朧とする意識の中、辛うじて顔を上げ龍斗を見るアゲート。いつの間にか自分の隣まで龍斗が歩み寄ってきていたが、もう驚く事も出来やしなかった。ワンドにも光は無い。
「……は、はは……規格外だな、あんた。宮廷魔術師に憧れ12の時から魔法を習い始め、ただひたすら修行を積んで……あれから10年、異名をつけられる程実力はついたはずだったのにな……何が【雷火のアゲート】だ……」
「10年であれだけ出来るのか、それは貴方が真の実力者である証拠でしょう。力の使い方は違いますが私には上級魔法は使えません。来年、同胞として共に働けることを願いますよ」
「そうか……少年、決着をつけてくれ」
「では、いずれまた」
龍斗はアゲートの肩を軽く押した。何の抵抗もなく、アゲートは地面に倒れた。

（また、か。1年……精進あるのみ、か）

観衆の声援、歓声も、カウントダウンも待つことなく出口に向かう少年の背を視界に納めた後、アゲートの意識は深い闇に沈んでいった。

第３５話：魔法合戦（後書き）

やたら理屈っぽい話になってしまいましたねｏｒｚ
何かありましたら感想頂けると嬉しいです。
ユニーク６６００人越え、お気に入り８０件突破、本当にありがとうございます。

第３６話：意外な再会

「はぁ、今回も結構な魔力使ったなぁ」
「お疲れ様です」
場所はコロッセオの入り口にあるホール。試合を終えた龍斗は既に待機していたマーティス姉妹と共にベンチに腰かけていた。観客席から見ていた2人の客観的な意見を聞きたいがために龍斗が提案したことである。
「で？　2人は見ててどうだった」
「そうですね……手印と魔方陣を出していたので2重に魔方陣を展開しているような状態ですよね。その分魔力を無駄に消費しているのでは……」
「でも魔方陣無しで発動する魔法は普通あり得ないわ。龍斗様が何も隠さずに戦うのならともかく、普通の魔法と同じように偽装して発動させる以上は仕方のない消費よ」
ミーアの見解にレイアの反論。龍斗はその言葉に頷いた。
「やっぱそれか、そこは仕方ないよな」
「それともう1つ。我田引水、でしたか。あれもあまり使わない方がいいと思います。そこに無い水を1から生み出すよりも、既にある水を利用する方が効率が良い、また魔力の消費も少ないとメリットは大きいですが……やはり普通の魔法とはかけ離れていますので……」
「む……色々便利なんだがな……まあ、変に目立ちたくないからなぁ」
背もたれに体重を預け天井を見上げた龍斗に、突然黒い影が落ちた。
「それは無理ってもんですな。若い魔術師ってだけで十分目立ってまさぁ」
藍色の目は影の主を捉えた。白銀に輝くフルプレートアーマーを

着用し、片手には槍と斧を合体させたような武器、ハルバードを持っている。コロッセオの随所に配置されている王国騎士団の格好である。しかし龍斗には王国騎士団員の知り合いなどいない。あらゆる感情を消し去り、無表情になった。

「それは参りましたね。ところであんたは？」

藍色の目が相手を見据える。

「ん？　……クク、ハッハッハ、そうか、すっかり忘れてた。これじゃ顔も分からねぇわな」

突然笑い声を上げた相手は開いている手で顔全体を覆う兜を取った。中から現れた顔を見た途端、3人は一様に同じ反応をした。

『あ、貴方は！！』

「お、思い出してくれましたかい？　俺は、いや私ぁ2年程前、あんたに奴隷身分から解放してもらった内の1人でさぁ」

そこにあったのは茶色の瞳に金髪、無精ひげを生やした壮年の男の顔。初めて見た時は絶望や諦念が色濃く出ていた瞳には活気があり、髪型もしっかり整えられていてまるで別人のよう。しかしそれでもあの時の面影がしっかりと感じられた。

「驚いた。王国騎士団になっていたんですか……ええっと……」

「あ、そういやあの時は名乗っておりませんでしたな。ま、奴隷に名前などいらんってのが普通だし。俺は、いや私はマルコ。マルコ・ファスバンズだ」

「東龍斗です。……敬語なんていりませんよ。貴方の方が年上ですし、何より主従関係でもない」

龍斗は自分のカードを見せた。大陸の人間は漢字名に馴染みが無いので、そうした方が話が早い。

「いや、でもな……ま、いいか。本人がいいってんなら。それに俺も堅苦しいのは嫌いだしな」

1つ笑いをはさんだ後、マルコは2人の少女に気付き視線を向けた。2人は一瞬身構えたが、直ぐにそれが杞憂であると理解し警戒を解いた。マルコが向けた視線は下賤なものではない。父親が愛娘

に向けるような、優しく温かいものだった。
「お2人さんも、元気そうで何よりだ」
「マルコさんもお元気そうで……あ、申し遅れました。私、ミーア・フォルデント・マーティスと申します」
「その姉、レイア・フォルデント・マーティスにございます。改めて以後宜しくお願いします」
「へぇ、ご立派な名前で。……あんた、あの時の約束、ちゃんと守ってくれてるようだな。改めて感謝する」
頭を下げるマルコに苦笑しながら龍斗が言った。
「いや、大したことじゃありませんよ。あれ、貴方ともう1人は先に出ていきましたよね。黒髪の男との約束を何故知ってるんですか？」
「ああ、あの後暫くしたら信じられん速さで追いついてきてな。彼女らの事はあんたに任せたと軽く聞かせてもらったのさ。しかし、つくづく不思議な男だった……」
龍斗は頷いた。しかしその話題はそれ以上続くことは無かった。
暫くは誰も喋らなかったが、やがてレイアが口を開いた。
「1つお聞きしてもよろしいでしょうか、マルコさん」
「ん、何だ嬢ちゃん」
「今回の春闘……勝ち残った他の方は一体どのような方々なのでしょうか？」
マルコは顎を撫でながら、視線を上にやって思い出すように答える。
「ええっとだな、基本的に有名な実力者ばっかだぞ。さっきあんたが倒した魔術師、あれだって【雷火のアゲート】って異名をつけられてる。実際受けてみて分かったろうがその2つの属性魔法に関しては相当強い。魔術師に関してはもう1人、【毒呼び】って異名の奴がいたか。猛毒を持った魔物を召喚して戦わせる恐ろしい奴だ。勝ち残ってる魔術師で言えばそれくらいだな。その2人とあんたの3人だけだぜ、トーナメントに進めた魔術師は」

「なるほどな。戦士の方は？」
「ええと、【重力無視の突撃槍（アングラヴィティ・ランス）】レイル・ティアランス、【双尾の蜂（ダブル・ホーネット）】ゴードン・ウォルマン、【一撃必殺】コータ・ホンドー、いや、確かあんたと同じで漢字名だった。それで言えば本堂浩太。俺の知る限りではそのくらいか……あ、もう1人、いやでもなぁ……」
「ん、その1人がどうかしたんですか？」
龍斗が突っ込むとマルコは眉を顰め、頭を掻いた。
「いや、有名なのは有名なんだが、力量とかじゃなくて悪い意味でな……ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン。オルドラン伯爵家の三男坊だ。普段から素行が荒くてなぁ……ん、どうした？」
3人が視線を交わす様子に疑問を感じたマルコ。頬を掻きながら苦笑する龍斗。
「ああ、いや参加手続きの時にちょっと、ね」
「……おいおい、奴に関わるなと言おうとしたのに……あいつは家の権力振りかざして好き勝手やってるどうしようもない奴だ。酒場で飲み食いしては暴力で踏み倒し、何かといちゃもんつけては金を巻き上げ女を連れ去らう。あ、分かった。嬢ちゃん達に目をつけたな。まあ、そんな奴の事だ、どうせ試合も汚い手しか使わねぇだろうよ。個人的にはぶちのめしてやりてぇが……」
「貴族の子供じゃおいそれと手は出せない、か」
龍斗が続きを引き取った。マルコ含め全員が頷いた。と、その時、誰かがマルコの名を呼んだ。どうやら勤務交代らしい。
「ま、頑張ってくだせぇや。ベスト16止まりだった俺が言える義理じゃないがな」
「いえ、貴重なお話有難うございました」
「なに、奴隷から解放してもらったに比べりゃなんてことない。あ、そうだ」
兜を被り立ち去ろうとしたマルコの動きが止まった。何の前触れもなく龍斗は嫌な予感がした。

「……龍斗さんよ、最後に聞かしてくれ……どっちが本命だ？　さぞかし良い夜過ごしてるんだろ？」
『えっ』
姉妹が声を上げるのとほぼ同時に、龍斗は移動し鎧の肩に手を置いた。
「2人共俺の義妹だ。身内に手を出すほど甲斐性無しじゃないぞ」
龍斗の口は笑っていた。だがその目は表情とは釣り合わないものだった。非情を極めた、暗殺者のような目を向けられた鎧は、顔こそ見えないもののあちこちでカタカタ音を鳴らしていた。
「じゃ、じゃあ元気でな！！」
軽く裏返った声でそう言うと、不自然な音のする鎧はホールから去っていった。
「……龍斗様？」
「いや、気にするようなことじゃない。さて、明日はどうすっかなぁ。もう王国騎士団員になるのは確定したし、相手次第かな。取り敢えず、宿に帰るか」
『はい』
コロッセオを出ると、空には灰色がかった雲が広がっていた。来た時に比べると風も強くなったように感じる。雨が近い、と3人は足早に宿へと戻った。

第３６話：意外な再会（後書き）

ホントは３５話の最後にチョロッとつけるオマケくらいの話だったんですが、文字数稼いだんで分けておくことに。

第３７話：第３回戦　１．対戦相手

「第３回戦、第４試合、勝ったのは……ゴードン・ウォルマンだー！！」

『ウオオォォォーーーーーー！！』

控室のような場所で、龍斗は第４試合の終了を告げる声を聞いた。

それから約１０分後、龍斗は騎士団の１人に呼ばれ、コロッセオの中央へと歩いていった。定位置についたところで進行役の声が会場に響く。

「では第５試合の選手を紹介しましょう！！　まずは、異国大和の服装をした青年、かの有名な【雷火のアゲート】を下した若き天才魔術師、リュウト・アズマだーー！！」

『ウオオォォォーーーー！！』

流石に３回目ということもあって空気に慣れた龍斗。眉１つ動かず静かに相手を待つ。その正面の登場口から相手が現れると、進行役が珍しく詰まりながら声を張り上げる。

「対するはー、あー、エルグレシア王国貴族、伯爵位、オルドラン家の三男坊、ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン！！」

『オオォォォ……』

明らかに歓声の声色が変わっているにも構わず、男は悦に入った様子で、金色の装飾が施された華美な胸当てを見せつけるように闊歩してきた。顔につけているのは同じような装飾のヘルム。マルコ達騎士団員が付けていた顔全体を覆う兜ではなく、その中から額当てと頬当ての部分だけをつけたような形である。それ故に顔は丸見え。浅黒い肌に金髪、その奥に見える青い目。間違いなく龍斗が大外刈りを掛けた相手であった。左手の盾にはオルドラン家の紋章と思われる模様、翼を広げた双頭の鷲が描かれている。右手には片手剣の一種ブロードソード。鍔の部分は白い鳥の羽を寄せ集めたかの

ような形であった。その剣と盾を頭上に掲げたヴァンサードは、意気揚々と声を上げた。

「よく見ておけ平民共!!　これが我が家の紋章、オルドラン家の紋章だ!!　伯爵家の紋章などそうそう見られるもんじゃねぇ。更にこの剣は先祖代々家に伝わる由緒正しき聖剣だ!!　どこの馬の骨か知らんが、平民!!　その魂、この剣に捧げてもらうぞ」

切先を龍斗に向け、にやけた顔をするヴァンサード。ヒーロー気取りでかっこよく決まったと思っているようだが、それを歓迎する声は何処にもない。観客のほとんどは呆れてものも言えず、微かに失笑を漏らす者がいる程度だった。龍斗も観客席にいたら同じように笑っていたかもしれないが、表見上はあくまで無表情に務めていた。

（魂を捧げるだと？　武闘大会では結界のお陰で死ぬことはないんだろうが。そんな初歩的なところも忘れてるのか）

が、予想以上に呆れた龍斗は表情を崩し溜め息をついてしまった。

「なっ、貴様、今俺様の事を馬鹿にしたな!!　俺を誰だか分かって……ん？　貴様、何処かで見たことが……」

その様子を見たヴァンサードが怒りを露わにしてきたが、途中から首を傾げて龍斗を注視した。鼻で笑った龍斗はしっかり覚えているので、挑発の意味を込めて言った。

「ほう、私の事をお忘れですか。そりゃあそうですよねぇ、あの時は義妹に目が眩んで他のことは一切見えてなかったんでしょうからねぇ。おまけにその後は気付いたら天井を見上げてましたっけ？」

笑顔でそう語りかけると、一瞬呆けた顔をしたヴァンサード。だがその次には湯気が立つほど真っ赤になり、龍斗を睨みつけた。

「貴様……!!　そうか、あの時俺様に無礼を働いたあの!!　平民の分際で貴族に手を挙げるとは!!　ん？　そうか……フフフ、貴様には俺から最高の礼をしてやる……全員、さっさと出てこい!!」

今しがた自分が出てきた登場口を振り返ったヴァンサード。それ

につられて龍斗や観客も視線を向けた。そして全てを知り口元を歪めるヴァンサード以外、全員の顔に驚きが広がった。
「おいおい……」
「正気か!?」
「普通に無しじゃろ……」
「あり得ん……まさかここまでとは……」
観客達がざわつき始めた。臨機応変な対応を心掛けている龍斗ですら思考が固まって反応できずにいた。龍斗が正気を取り戻した時には、ヴァンサードの周りを5人の人間が取り囲んでいた。
緑色の髪を持つ筋肉隆々の大男は片手斧を持っていた。しかしその刃がある部分、斧頭はヴァンサードの盾よりも大きい。青い髪の男は穂先が棒の両端についた特殊な槍を持っている。恐らく魔術師であろう赤い髪の少年は、アゲートが着ていたようなローブ姿に身長とほぼ同じくらいの長さの白い杖を持っている。あと2人同じようにローブ姿の者がいた。こちらはフードを被っていて顔を見る事は出来なかったが、隙間から出した手の得物で、おおよその戦闘手段が分かった。
(でかい斧、槍、魔法。顔が見えないから男か女か分からんが……片や弓、片やダガー2本。それはいいが、何故ここに?)
その疑問を口に出す事は無かったが、聞かずともヴァンサードから種明かしをしてくれた。
「クックク、どうだ、なかなかバランスの良い構成だろう。貴様のために揃えた手駒だからな。貴様の相手をするのはこいつらだ」
「なっ!?」
龍斗が驚きのあまり声を上げた。途端に巻き起こるブーイングがコロッセオに響き渡る。
「卑怯者ーー!!」
「なんて奴だ!!」
「正々堂々やりやがれーー!!」
「大体、そんなの反則だろう!!」

その声を聞いた龍斗は頭を振り、ヴァンサードを睨みつけた。
「1回戦のバトルロワイヤルならまだしも、第2回戦以降のトーナメント戦は1対1の真剣勝負。それ以前に、グラウンド内には選手以外の人間は入れないはずだが」
そう言うと相手はいつになく豪快な笑い方で龍斗の言葉を跳ね除けた。
「ハッハッハッハッハ、これだから平民風情は。確かにルールはそうなってる。だが同時にこうも書いてある……選手がグラウンド内に持ち込めるのは戦闘に必要な道具のみ」
「……何が言いたい」
龍斗の視線がより鋭く、声色もより低くなった。しかしヴァンサードはそれに全く気付く様子もなく嬉々として言葉を続けた。
「こいつらは『戦奴隷』、主の命令で動く戦うための『道具』なんだよ！！」

第３８話：第３回戦　２．決闘と誓約

「……何か、嫌な予感がする……」

登場口から出てくる相手を見て私は思わずそう呟いた。しかし直ぐに隣から否定する声が現れた。

「大丈夫よ、龍斗様なら。魔法、というか術に絞った状態で１対１の魔法勝負を勝ち抜いたんだもの。心配いらないわよミーア」

他でもない姉さんの声だった。同時に姉さんの手が自分の手に重ねられた。自分でも気付かないうちに手に力が入っていたみたい。肩の力を抜くと、姉さんが微笑みかけてきた。私も同じ表情で返し、２人ほぼ同時に姿勢を直してグラウンドを見る。相手の貴族、ヴァンサードだっけ？　が剣を高く上げて何か言っているけれど、まともにそれを聞いている人なんかほとんどいない。私達も多分に漏れずそれを聞き流した。視界の中心に納めるのは勿論、龍斗様ただ１人。長い前座があったけど、前と同じように戦いが始まるんだ、と思った。

でも予想外のことが起こった。ヴァンサードが出てきた登場口から、新たに５人の人が武器を持って出てきた。会場中が騒然とした。私も呆気にとられていたけど、姉さんが漏らした言葉で気を取り直した。

「……まさか、１対６！？　いえ、そんなことすればルール違反なのは分かってるはず……」

そうよ。得物は何を使うも自由、けど第２回戦以降は１対１のトーナメント戦。グラウンドに入れるのは選手のみと定められている。数少ない春闘のルールは１つでも破るとその場で参加資格を失う。それほど厳しいものであることはあの貴族の人にも分かっているはず。なのに何で……

そう思った私はあることに気付いた。以前、参加者登録の際にヴァンサードと接触したけど、特に力量があるようには感じなかった。

「忍は気配を消す術を持ってるが、そんな術大陸には無いんだったな。ならあれは素直に実力が無い。実力のある強者ほど強い気を感じるもんなんだが、あいつからは特に何も感じないし、隠してるってわけでもないからな」

後で聞いてみたら龍斗様もそう言っていた。そんな人が、実力の無い人が、今までどうやってここまで勝ち残ってきたのだろう？

……それに私達に向けてきたあの欲にまみれた汚い目を見る限り、到底良い性格をしてるとは思えない。ひょっとして、ここまで勝ち残ってこれたのも真っ当な手段じゃないのかも。

そこまで考えた時、フッと空気が変わるのを感じた。その中心はグラウンド。まさかと思ったけど本当にそのまさかで、龍斗様の気配が変わっていた。そのことは問題じゃない、と思う。今まで龍斗様は理不尽な理由でこうなったことはない。となれば問題なのはそうさせた側だということ。

「……姉さん……嫌な予感がする」

「あら奇遇ね……私もよ」

相手の笑い声の後聞こえてきた言葉に、私も姉さんも背筋が凍った。

「こいつらは『戦奴隷』、主の命令で動く戦うための『道具』なんだよ！！」

「……何だと」

藍色の目がヴァンサードを鋭く睨みつける。龍斗の視線が矢であれば、ヴァンサードの目は節穴であった。龍斗の様子に全く気付く様子もなく得意げに持論を展開する。

「だってそうだろう、主人の命令に従って動くんだからよ。人形と一緒なんだよ奴隷なんてよ。そうなると、差し詰め俺は人形使いってぇわけだな！！　人形が、道具が、幾らあっても人数には入らねぇしそもそも奴隷は人としての権利が認められてねぇ！！　どうだ、

この中に、それを否定できる奴がいるのか!!　えぇ!!」

誰もが口を閉ざした。奴隷になった者に自由は無い。『拘束の手枷』と呼ばれる魔法具や『束縛の呪い』といった魔法で自由を奪われ、主人に服従しなければならない。まして奴隷は「商品」として売買される。確かにこれではヴァンサードの言うように人形を扱う感覚と、道具を操る感覚と大差無い。

（……だがな……）

と、その時、何かを思いついた様子のヴァンサードが進行役に向かって大声を出した。

「うーん……そうだ。おいお前!!　この戦いは決闘にするぞ!!　貴様、立会人にしてやるから誓約を!!」

「ハッ!?　え、いや、それはそのー……双方の合意が無ければ……」

と、その時、龍斗は2つの影を感じ取った。それが着陸すると、龍斗は目を見張った。目の前に現れたのはレイア・フォルデント・マーティスとミーア・フォルデント・マーティスの姉妹だったからだ。念のためといつも持ち歩いている、組み立て式の槍を構えている。

「お前らっ何で」

「私達も参加させて下さい龍斗様。私達には参加する権利があります」

「相手があの理論で行くのなら、私達2人は身分上龍斗様のど――」

レイアの台詞を強制終了させるため、龍斗は神速の速さで頭を叩いた。無論ミーアも同時に。

『あたっ』

見事なシンクロで声を漏らした2人に、龍斗は溜息をついた。小さな声で姉妹を諭す。

「いい加減にしろよ。あんたらは俺の奴隷じゃない。身分上がどうとかじゃなくて、2人共俺の家族なんだよ。さっきの理論だ？　なら俺からも言わせてもらうぞ。お前らは俺の命令無しでは何も考え

られない動けない服従するだけの人形か？　違うだろ。自分で考えて好き勝手行動できる、自由があるだろう。なら人形じゃない。奴隷じゃない。ちゃんとした人間だ。２年あってそんなことも理解してなかったか」

『うっ……』

「分かったら戻れ、と言いたいとこだが１つ教えてくれ。決闘ってのは何だ？」

苦い表情になった２人が問いに答えた。

「……闘技場で行われる試合は観客の間で賭けが行われています。それとは別に、戦う当事者同士の間で何かを賭けた上での戦い。それが決闘です」

「決闘をするにはまず当事者双方の同意、それから立会人の擁立と立会人による誓約作成が必要になります」

「……分かった」

そう言うと龍斗は２人の耳元から顔を上げた。姉妹を見てにやけているヴァンサードに声をかけた。

「決闘は何かを賭けて行うもの、ということらしいが」

それを聞いたヴァンサードは更に口角を上げた。

「そうだな、貴様はその女２人と……いや貴様自身ももらうとしよう。ここまで勝ち残ってきたんなら相当な実力者。新たな戦力として加えてやっても良いぞ。あ、そうなると王国騎士団入団は無しだな」

龍斗も姉妹もヴァンサードに甚だしい嫌悪感を抱いた。賭けを持ち出すのもそうだが、賭けをするならするで普通は自分が何を賭けるのかを言うべきである。自分が欲しいものを言うのは明らかに常軌を逸している。

（あの時もそうだったが、それしかないのか奴には。相手の要求は俺達３人の所有権ということか……なら）

龍斗は静かな声で言った。

「……そちらが俺の賭け分を指定するなら、こちらも俺がお前の賭

け分を決める。それでも良いのなら、その決闘、受けて立とう」
会場全体に動揺が走り、口々に何かを言っていたが龍斗の耳には届かなかった。不安そうな姉妹の肩を叩き、軽く微笑んで龍斗は言った。
「この試合、負けるわけにはいかなくなった。お前ら2人を守りながらの戦闘ははっきり言って俺には不利となる。だからまあ、観客席で大人しくしてろ。大丈夫、結界のお陰で死にはしないんだし」
「しかし」
「……一蓮托生。大丈夫、俺を信じろ」
逡巡を続ける2人だったが、レイアがついに折れた。
「……分かりました。ミーア、行くわよ」
「うん……ご武運を」
マーティス姉妹は龍斗の元を離れ元いた観客席に戻っていった。
強化系魔法を使用したジャンプで壁を飛び越える姿に皆が驚いた。
(大丈夫、信じろ、か……我ながら弱くなっちまったな。父さんも爺さんも、よく俺らを守りながらやっていけたな。尊敬するぜ)
龍斗は己に向けて苦笑いをした。

「……では誓約の内容を発表いたします。東龍斗、賭け分(チップ)は自身と従者2人の所有権並びに武闘大会参加資格。ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン、賭け分(チップ)は自身と自身が所有する全ての奴隷の所有権並びに武闘大会参加資格。誓約は結んでしまうと内容の変更も破棄も出来ません。以上の内容でよろしいですか？」
「ふん、良いだろう」
「了解した」
「ではこのまま……盟約神ミスラよ、契約神ヴァルナよ、汝らの名の下にこの誓約の成立を宣言する。神に誓いしものなれば、必ず履行されしものなり」
進行役が書いた1枚の紙。そこには双方が何を賭けるか、何によ

って決着をつけるのかなどが書かれている。男が呪文を唱えると、その紙が光を放ち、やがて赤く染まっていった。光が消えたところで男が声を会場に響かせた。

「さあ、今ここに決闘の誓約が立てられました!!　立会人は私、春闘の進行役を務めさせて頂いております、タイロン・モリア・リジェンゴート!!　そして会場にお集まりの皆さん!!　貴方たちはこの決闘の証人となります!!　大変長らくお待たせ致しました。第3回戦第5試合、スタートです!!」

第３８話：第3回戦　２．決闘と誓約（後書き）

レイアは既にやったのでミーア視点入れてみました。読みにくかったらごめんなさいＯｒｚ

お気に入りやユニーク数が増えていってるのは有難いことです。本当に励みになっております。

何か気になる点とかありましたら気兼ねなく仰って下さい。

第３９話：第３回戦　３．奴隷達の戦闘

「第３回戦第５試合、スタートです！！」
「さあ、あいつを殺して――」
開始直後、龍斗から放たれた魔力の波が相手６人を飲み込んだ。
その瞬間、大抵の者が棒立ちになり冷や汗を流した。圧倒的な威圧（プレッシャー）感を感じた事により気後れしてしまったのだ。そんな中で例外が２人いた。１人は５人の戦奴隷を率いるオルドラン伯爵家の３男坊ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン。彼は覇気を浴びた瞬間にびくっと体を震わせ、そのまま気絶し倒れていった。
『実力と扱える魔力量は比例する』というのはランドレイク大陸でよく聞く話である。一定の実力を持つ者は自然とそれ相応の魔力も持つ。そして魔力というのは放っておくと体から徐々に滲み出てくる。この漏れ出した魔力を龍斗達大和人は「気」「殺気」「気配」などと呼んでいたのだが、それは気付いた者しか知らないことである。覇気というのは何にも変化させていない純粋な魔力を放出しているだけの技。一定量の魔力を持っていれば、即ち一定の魔力を放出していればそれが盾となりプレッシャーを跳ね除けることが出来るのである。しかし、覇気よりも弱い魔力しか持たない者はそれを防ぐ手だてがない。故にまともにぶつかってくるプレッシャーに耐えきれず気絶してしまうのだ。
（流石、手練れを集めたというだけある。覇気で気を保っていられる実力者ばかり。主人１人気を失ったようだな。問題は……）
龍斗が見据えたのは青い髪を持つ槍の男。平然とした様子で気絶したヴァンサードが倒れないように支えている。
（……奴は覇気を浴びて全く何も感じていない。あの行動、判断力、この中で最も強い……一番警戒すべきは奴だ）
春闘のルール規定にある。１０秒間地に倒れたままであればその者は敗北と看做す。これが所謂「１０カウント」というルールであ

る。または相手の降参。この2つが春闘での決着のつけ方である。
気絶したヴァンサードが地面に倒れてしまえば10秒後にはヴァンサードの負けが決定する。しかし今、彼は気絶してはいるが地面に倒れていない。即ち10カウントが適用されないのだ。まして相手は覇気に一切動じない、冷や汗1つ流さない相当な実力者。何も考えずに行動したというわけではないだろう。龍斗はそう考えていた。
奴隷達は動かなかった。いや動けずにいた。何故なら、彼らに命令を出す主人が何も命令を出さないからだ。今の彼らをヴァンサードのような思考の者が見れば置物と言っただろう。
（なら、主人が寝ている間に皆さん倒れてもらうか）
そう思った時だった。
「お前ら、何をしている。『さあ、あいつを殺して』これで十分命令として成り立っておろう。主人の命令は絶対だ。逆らう事は出来ん。行け！！」
途端に置物は武器となり、龍斗に向かって攻撃せんと動き出した。魔術師は詠唱を唱え魔方陣を展開し、射手は矢を取り出して引き絞り狙いをつける。もっとも素早いダガーの者が龍斗に肉薄、その後ろに斧の男が追従してきた。槍の男は主人を支えたまま、冷静にこちらを確認していた。
（ちっ、やっぱりあいつか……しかも何だ、俺のためにとか言ってたから即席のパーティーかと思ったがそうでもないな）
逆手のダガーが龍斗に襲いかかる。威力よりもスピード重視、手数重視といった攻撃であり、腕だろうが足だろうが、とにかく傷をつけようとめったやたらに振り回される。無詠唱でも『即応の霧』を発動させる暇がない。何とか太刀筋を見極めて避ける龍斗は、黒い影に気付いてバックステップで退いた。途端に上がる砂煙。気が逸れている隙を狙い、大男が全体重をかけて斧を振り下ろした結果である。
その威力に驚きを見せた一瞬の後、微かな音がしたような勘を頼りに地面を転がる。先程まで頭があったところを1本の矢が通り過

ぎていく。ほっとしたのも束の間、龍斗の周囲を囲むように赤い魔法陣が出現した。

「まずいっ」

線が光ったかと思うとその魔方陣一杯の直径を持つ巨大な火柱が現れた。誰もがその火柱に注目し固唾を飲んだ。こんなものを当てられて無事で済むわけがないと。

しかしそれも大男が呻き声を上げるまでの話だった。

「ぐぁっ」

その声に全員の注目が集まった。いつの間にか斧の男が膝をついている。視線をずらすと、龍斗が走りながら何かを発射している所であった。魔術師がそれに対応した。

「全能なる神よ我らを守れ、『シールド』！！」

淡い光の幕が現れ、龍斗が放つ青白い光を全て防いだ。それを見た龍斗は彼らをすり抜け、先程とは反対の場所、ヴァンサードの登場口に近い方で動きを止めた。右手に張り付いていた黄色い魔法陣も同時に消える。

（連携が凄い。不意打ちでこっちまで来たが、これはまずいな……）

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

立体空間で感覚を強化する『即応の霧』を発動させた。強化系魔法は無詠唱でも発動させることが出来るのだが、その発展系となるこれは詠唱がある方がより効果が高まるのだ。

龍斗の背後に2つの魔法陣が現れた。その魔方陣の魔力を龍斗の感覚を乗せた魔力が感じ取った。交差するように炎が出現、それを避けるため必然的に正面から来る大男に突っ込んでいく龍斗。手印を組みつつ男が繰り出した斧の横薙ぎをジャンプで避ける。そのまま男の方も踏み台に空中へと飛び出していく。

「撃ち落とせ！！」

青い髪の男が言うが早いか、射手が可能な限り素早く、3本同時

に矢を放つ。魔術師も質より量と、下級魔法『ファイア』を連発する。空中に逃げてしまうと、鳥でもない限り空中で自由に動く事は出来ない。遠距離攻撃を畳み掛けてくるのは妥当な手段である。しかし、そのことを分かっていない龍斗ではない。

「其の速きこと風の如し、『突風』」

龍斗が腕を振ると強い風が巻き起こり、矢の軌道を乱し小さな炎を吹き消していった。着地して暫く時間があったが、青い髪の男は冷静に指示を出した。

「周りは囲んでいる。壁際に追い込め！！」

指示を聞いた4人はその見事な連携を生かしたチームプレイで龍斗を追い込んでいった。後ろに下がる以外に逃げ道は無く、とうとう背中が壁につくようになってしまった。背中は壁、目の前にはダガー2本、斧、矢、杖が並び、龍斗を囲んだ。フードを被った2人の表情は分からないが、残る2人の表情は苦いものだった。魔術師の少年が声を絞り出す。

「……すいません、こんなこと……僕達としても、貴方を傷付けたくはない。……せめて、大人しく降参して頂けませんか……？」

その言葉を聞いた龍斗は薄笑いを浮かべた。この状況で相手が情けをかけてくるとは思わなかったからだ。しかし、だからといって行動を改めるつもりはない。なので龍斗は最初から持っていた意思を伝えた。

「生憎、俺は降参するつもりはない」

「そうか……なら、奴隷（なかま）として、また会おう」

大男が斧を袈裟切りに振った。その時逃げ場となる足元には魔術師が炎を放った。会場の誰もが勝負ありと落胆した。しかし。

「嘘……」

「なっ……いない！？」

「ど、何処行ったんだ！？　囲まれた状態で逃げ場なんて――」

「あるんだよ、ここにな」

逃げ場の無いはずの状況下で忽然と姿を消したことに騒ぐ4人を

龍斗は見下ろしていた。４人がその声に気付き振り向くと、誰もが驚きで声を出せなくなった。観客席からは驚きの声と共に大歓声が上がった。龍斗がいるのはグラウンド上空。彼は空中に浮いているような状態である。

龍斗は足の筋力を強化し跳躍で斧をかわした後、手印を組んで素早く呪文を唱えた。

「其の速きこと風の如し、『天駆翔走』」

足に風の力を纏い、自身の体重以上の物を吹き飛ばすほどの爆発的な突風を瞬時に繰り出し続ける。これによって地面から足を離し空中で駆けることが出来るようになるのだ。

ある程度距離を置いたところで龍斗は手印を変えた。今度は片手。人差し指と中指を揃えて伸ばした形である。

「定礎、『結界』」

『結界』は敵の魔術師が使った『シールド』の立体版といえる。透明な四角い板が６面を覆い、箱のようになるのである。大きさは込める魔力量に比例し、普通は等辺の立方体だが、今回は小さめの直方体が２つ。龍斗の足が乗るとほぼ完全に隠れる大きさだった。

そして現在に至るのである。観客は好き勝手に騒ぎ立てるが、グラウンドで龍斗の相手をしている側はその異様な光景に何も反応できないでいる。結界の上に乗る龍斗は、４人を見据え手印を組んだ。

「動くこと雷霆の如し、大地を穿つ災禍、『轟雷』！！」

４人に向けて雷が音を轟かせながら落ちていった。フードを被った１人が辛うじて逃げ果せたものの、残りの３人は煙を上げながら地に倒れ伏した。服や皮膚の一部が炭となっているところから、雷の威力が窺える。

目を閉じ、１つ息を吐いて集中力を高めた龍斗は、結界を解いて

地上に降り立った。目を閉じていても感覚でヴァンサードの位置を探り当てそちらを見る。

「降参はしない。俺が負けるわけにはいかないんでな。あまり使いたくなかったが奥の手を使っていくしかあるまい。それとそちらは数という利から俺に憐れみをかけていたようだが……生憎俺には戦闘中に相手にかける情けなどない。こっちは命張ってんだ」

遠目ではわからないが、龍斗の紫に変色した目がヴァンサードを支える男を睨みつけた。龍斗の顔は正に冷徹そのもの。情の欠片もない、人を殺すことに何の感慨も持たない。いや、生死を賭けた上で、自身の命すら鑑みない。それ故に、龍斗の言葉は底冷えするように冷たく、非常に重く低い声となっていた。

「……覚悟しろ」

第３９話：第3回戦　3．奴隷達の戦闘（後書き）

何か逃げてばっかでしたね……まあ、そうやって戦うのが忍（こいつ）のスタイルなんですかねぇ。
しかし次はそうもいきませんよ……

第４０話：第3回戦　４．槍と拳

「……覚悟しろ」

龍斗はその言葉と共にグラウンドの中央へと歩き出した。幾つか印を組みながら、呪文を唱え術を発動させていく。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』。我が身を鋼に矛盾とならん、『金剛鉄身』。忠節尽くし只主の勝利が為我が身を盾と為す、『忠勝鎧身』」

感覚、筋力、防御力を強化する龍斗。その様子を見ていた男は、落雷から逃れたフード姿の奴隷に声をかけた。

「君、ご主人様が倒れないよう支えておけ。あれの相手は私がする」

男の代わりにフードを被った奴隷がヴァンサードを支えた。背は彼よりも小さいのだが、特にきつそうな様子はない。青い髪の男は地面に刺していた槍を引き抜き、龍斗の方を向いて構えた。その槍は少々特殊なもので、長棒の両端に穂先がある。

龍斗は一定の距離で立ち止まった。手印を変えて最後の呪文を唱える。

「五里霧中、『濃霧』」

龍斗が腕を振った。その刹那、辺り一帯が徐々に白く染まっていき、ついに観客席からは何も見えなくなるほどの濃霧となった。

「濃霧か……どういうつもりだ？」

「そっちが気にするほどの理由は無い」

男の問いに淡々と答える龍斗。その顔には一切の表情が感じられない。命のやり取りをする覚悟を決めた上で己の命を鑑みない、そして人の命を奪うのに何の感慨も持たない、冷酷な表情である。

「１つだけ聞きたい。貴方の名は」

「……奴隷に名など不要。参る！！」

それを皮切りに、２人は同時に走り出した。

男が槍を突き出すと、半身を捻ってかわす龍斗。しかし男はその勢いのまま龍斗に近付き、腕を横に向けて龍斗の腹を狙う。男の槍は棒の両端に刃がついている。これによって刺突攻撃のために一々引き戻す、という無駄な動作を減らしているのだ。

龍斗は腕を振ってそれを弾き、その勢いのまま男の懐に入ろうとする。だが男は弾かれた勢いを利用して槍を引き戻し、短く持った穂先で出迎えた。龍斗の掌底と槍の穂先が衝突し、金属同士をぶつけたような高い音が鳴り響く。

普通に考えればあり得ないことだが、龍斗の手は『金剛鉄身』による筋力強化で鉄並みの強度を、『忠勝鎧身』による防御強化で更に魔力の鎧をつけている。『忠勝鎧身』は使用している間身動きが取れなくなるという欠点があるのだが、全身にかけず一部のみに、それも常に発動させるのではなく必要な時に必要なだけ発動させることで回避している。因みにこの2つの術をかけた状態の拳で相手を殴るということも可能であり、その場合、金槌で殴るのと同じ威力となる。

防がれたことが分かると、青い髪の男は槍を左手から右手に持ち替え、長いリーチの方で横薙ぎを放つ。バックステップで避けたところに大きく踏み込み、両手で持って突きを繰り出す。それを龍斗はさっきと逆の方向に弾いたが、直ぐに逆手の突きが飛んできた。

龍斗がバックステップで避け、間合いが広がった時、男は槍を持つ手の位置を変えた。基本として棒の中ほどを持っていたのだが、それを出来るだけ両端に近い位置に手を移動させたのだ。そうなってからは男の攻撃回数が格段に増えた。腕を左右に振ることが多くなったため、攻撃は抉るように突き刺して斬り裂くというものに変わる。ある時は避け、ある時は腕を盾に全ての攻撃を躱(かわ)していく龍斗。隙を見て拳や蹴りを繰り出すも、穂先や棒で止められた。

(他の奴もそれなりだが……こいつ、格が違う)

表情には一切表さないが、内心焦りを感じる龍斗。休む間もなく

男が突進してくるのを見て龍斗は腰を落とした。
「なっ……かはっ」
男は驚きと共に肺の空気を絞り出した。男の槍は狙い通り龍斗の脇腹に当たった。しかし同時に、龍斗も男に一撃を与えていた。槍という武器が持つ長いリーチのせいで、龍斗はまず男に近付くことが出来なかった。だから龍斗も、リーチの長い攻撃を使った。自身の体を盾としながら。
「気概空手、『指貫衝』」
脇腹を強化して穂先を受け止めた龍斗は、右手で相手を指差すように腕を伸ばしていた。指貫衝は大きな岩をも砕く衝撃波、気概空手『砕岩衝』の縮小版といえる技。指先で小さな衝撃波を生み出し、相手を貫くのである。この気概というのは『覇気』と同じ何にも変化させない魔力の事である。気概の扱い方を身につけ気概空手を大成した親友、烏丸連に稽古をつけてもらったことで、龍斗は気概空手の技を取得した。因みに龍斗は気概空手を学んだことで、知識として持っていた技の幾つかを改変している。そもそも『覇気』の純粋な魔力の放出は気概空手における魔力の扱い方から発展させたもの。『天駆翔走』も、風だけでなく踏み込む度に足から衝撃波を放ち、反動で宙に留まっていられるようにしていた。

（ハァ、気概空手まで出さないといけないか……一矢報いたは良いものの、こっちもぎりぎりだ……）
間合いを取って息を整えている間、自分の腕を一瞥した龍斗。鉄並みの強度、更に魔力の鎧で防いでいたにも拘らず、袖は破れてあちらこちらに切り傷が付いていた。当然そこから流れ出す血で腕は赤く染まっている。何発も強烈な攻撃を受けてきたので、何時力が入らなくなってもおかしくない状況だった。
一方槍を操る男の方も龍斗と同じように肩で息をしていた。短く持って両端の穂先を操るという戦闘スタイル故に普通の槍よりは幾

分か短くなっている。しかし短いとは言っても穂先1つ分金属の重量が加わるので大した変わりは無い。それを何度も振り回していたのだから、疲れが溜まっていくのは当然の事。受け止めきれず何発か蹴りや拳を喰らったが、得物を扱うために鍛えられた筋肉という盾のお陰で大したダメージを受けていなかった。しかし先程の『指貫衝』によって肋骨が1、2本折れた。かなりのダメージを負ったため、こちらにも余裕が無かったのである。

男は突如全身の力を抜いた。相手から殺気が消えたのを感じ龍斗が怪訝に思っていると、それまでに見たことの無い構えを取った。

「……この一撃に全てを賭けよう」

腰を落とし、右手だけで槍を長く持つ。左手は親指と人差し指で輪を作り、その中に槍を納めている。筋肉のばねを限界まで引き締め、それでいて余分なところには全く力が入っていない。ただ一瞬の一撃のためだけに全力を注ぐ、一撃必殺の構えである。

龍斗も構えを取り直した。腰を落とし前屈みになり、右拳を腰の辺りで固定する。居合斬りをするような姿勢のまま、静かにその時を待つ。

一陣の風が吹き、花弁が一枚、2人の間を通り過ぎた。その刹那、

「やっ!!」

「ハッ!!」

男が放った渾身の刺突と、龍斗が繰り出した『衝拳』の拳が激突した。槍と拳の一歩も譲らぬ拮抗に代わり2人の視線が火花を散らしていた。さほど長くはなかったが、当人たちには10分も20分もそうしていたかのような感覚があった。

それを終わらせたのは龍斗の方だった。

「……『砕岩衝』」

龍斗は空中に蹴りを放った。途端にそこには強い衝撃波が生まれ、男の方へと真っ直ぐ飛んで行った。不可視の未知なる攻撃に対抗する術などあるはずもなく、男はいとも簡単に壁まで吹き飛ばされていった。この衝撃波によって周囲の霧が吹き飛ばされ、観客達は何

が起こったかはともかく、壁際で倒れる槍の男を龍斗が倒したということを理解して歓声を上げた。

「ん、んぁ……？」

丁度その時、試合開始直後からずっと気絶していたヴァンサードが目を覚ました。周りの様子など全く把握していなかったが、すぐ傍にフードを被った奴隷の１人がいるのを見るや即座に怒鳴りつけた。

「何をぼさっとしとるか！！　さっさと奴を殺せ！！」

「は、はいぃっ」

フード姿の奴隷は龍斗に向かって走っていった。得物のダガーを逆手に取り出し、大上段で龍斗を襲う。

「甘い」

半身を捻って難なく躱した龍斗は、その首筋に手刀を叩き込んだ。奴隷の意識は直ぐ闇に飲み込まれ、勢いそのまま地面に倒れた。

「さて、後はあんただけだな」

龍斗に見据えられたヴァンサードは目に見えて動揺していた。辺りをきょろきょろしているが、彼を助けようという者は誰もいない。頼みの奴隷も今ので全員が倒れ伏している。それでもぶれる切先を龍斗に向け、震える声で最後まで虚勢を張ろうとする。

「そ、そそれ以上ち、ちが、近づくな……おおお、俺様をだ、誰だと思ってる、王国の貴族ヴァン――」

「知るか」

ヴァンサードの主張を短い言葉で一蹴し、『衝拳』で衝撃を乗せたデコピンをお見舞いする龍斗。背中から倒れていく様子を見て腕を組むと、龍斗は大きなため息をついて首を横に振った。

こうして第３回戦全８試合中、様々な意味で最も長い時間を取った第５試合が幕を閉じた。……もっとも、参加者同士の決着という点では最短記録を叩きだしていた。

龍斗が退場して真っ先に出会ったのは義妹達ではなく、龍斗が解放した元奴隷、現在は王国騎士の一員であるマルコだった。今は兜を外しており、その顔はすこぶる上機嫌だった。

「よう、龍斗殿。お疲れさん。上から見てたけど、なかなか面白かったぜ。開始直後から最後の最後まで気絶してやがるあのクソッタレなんかもう最高だ。宙に浮いてるのも凄かったし……途中霧で見えんかったのは残念だが……まあ、とにかく面白かった。1対6をやってのけたんだしな」

それを聞いた龍斗は苦笑した。

「あのな……娯楽のために戦ってんじゃないんだよこっちは。奥の手使った時点でこっちの負けみたいなもんだ。試合の勝敗とは別だがな。必死になるしかなかろう。負けたらあいつの奴隷にならないといけないんだから……姉妹共々な」

「それもそうだな。いや、すまんかった……ああ、そろそろ戻るか、じゃあな」

「あ、1つだけ、良いか？」

気まずさから逃げるように立ち去ろうとするマルコを龍斗が呼び止めた。

「何だ？」

「……あの5人の治療、しっかり頼む」

春闘の試合に参加した者は、勝敗に関係なく王国直属の魔術師達に回復魔法をかけてもらえる。国王、ひいては国が全責任を持っている大会で死者を出すのは国家の信用を失いかねない。その防止策としてのアフターケアである。しかし龍斗はこれまでそれを利用したことはなかった。魔法、というか術で戦っていたため、大して怪我などしなかったし、魔力が回復するわけでもないなら別に受けなくてもいいと思っていたからだ。しかし今回はそうもいかないので、今さっき治療室に行ってきたところなのである。

その時に彼は見た。治療室のベッドに先程の対戦相手が寝ていたのを。

「……大丈夫だ、俺の知る限りあの魔術師達の中にあんなクソッタレはいねぇ。それに誓約がある。どの道きちんとしたなりにしてくれるさ」

「……そうか、じゃ、元気で」

「おう。王城でまた会おうや」

マルコに背を向け、龍斗は姉妹の待つホールへ向かった。

第４０話：第3回戦　４．槍と拳（後書き）

うーん、やっぱりというかなんというか、正面切ってまともに張り合うような性格じゃありませんね、はい↑

次の話は事後処理になります。奴隷達、それからヴァンサードの処分ですね。ある程度考えてはいるのですが……「最終的に」どう処分しようかについて悩んでます。

第４１話：事後処理　１

翌日、予想以上に第５試合に時間がかかったため、第６試合以降が行われる予定のコロッセオ。開場の１時間以上前だというのに、既にホールは見物目的の客で埋め尽くされていた。誰からともなく口を開けば、話題になるのは当然春闘のこと。誰に賭けるか、誰が強いか。十人十色で様々な意見が飛び交い、既に彼らの空気が出来上がっていた。

「……にしても【毒呼び】のあれはマジでやばいよなぁ。最前列で見てるともう、生きた心地がしねぇってんだ」

「もうそこにいるだけで毒にやられるよな……あ、でもよ、幾ら凄いつったってあいつは魔術師、召喚が終わるまでの間は隙が出来るじゃねぇか。【一撃必殺】のコータが瞬殺すれば……」

「やっぱり、頂点に立つのは我らが【黄金の貴公子】ウィリアム様よ！！」

「なんでぇ、あんなボンボンの何処がいい。珍しくもない金髪の２枚目な貴族様ってだけじゃねぇか」

「【双尾の蜂（ダブル・ホーネット）】ゴードン、【黄金の貴公子】ウィリアム、【一撃必殺】コータ、【爆炎野郎】ジョー、【毒呼び】……むぅ、次は誰に賭けるか……」

「今年は想像以上に良い役者が揃ってるからな……悩むのも無理はないな。だが」

「ああ、俺はやっぱあいつがやってくれると思うぜ。今まで聞いたことなかったが、あれだけ見せつけられたら、な」

「おう、俺も第４回戦はあいつにするかな」

「ああ、そうね。正にダークホース、【水精の天馬（ウンディーネ・ペガサス）】！！」

「……たく、あの異名何とかならんのか」

「第2回戦の時、魔方陣を変えないまま水流を壁にしたり球体にしたり、自在に操っていたこと。昨日の第3回戦では宙を駆けるという驚異的な技を披露したこと。その2つの事実を考慮した上でつけられたものです」

「つまりは自業自得ということですね」

【水精の天馬（ウンディーネ・ペガサス）】という異名に不満を漏らす龍斗に、マーティス姉妹の容赦ない言葉の槍が降りかかる。全く否定できないそれに返す言葉もなく、龍斗はただ首を横に振るだけだった。

「ハァ……ま、そんなことはどうでもいい。今は誓約をきっちり終わらせないとな」

龍斗達がいるのは観客が群がるホールの隣にある空間。第2ホールと呼ばれるこの場所は、表向きは多目的ホール又は観客達の自由休憩スペースとなっており、第1回戦のバトルロワイヤルの際は参加者の控室としても使われていた。

しかし実際には別の用途が最大限優先される。即ち今龍斗が言った通り、誓約の履行を行う場所なのである。コロッセオにおける戦闘の中で、選手同士がそれぞれ何かを賭けて戦う決闘。その決闘を行う際は、立会人と呼ばれる第三者を擁立し、その立会人に誓約を結んでもらった後試合を行う。誓約は2柱の神の名の下に結ばれる絶対尊守の契約事項。「真血の契り」と同じ永遠に破る事の出来ない契約なのだ。

誓約の履行自体は何処でやっても良いのだが、今回の立会人はこの春闘の進行役、タイロン・モリア・リジェンゴート。彼の職務を考えた上で、試合開始前のコロッセオが履行場所になったのだ。その男が口を開いた。

「では誓約の内容を確認いたします。東龍斗、賭け分（チップ）はご自身と従者お2人の所有権並びに武闘大会参加資格」

マーティス姉妹を背に立つ龍斗は頷いた。確認したタイロンが続ける。

「次に、ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン。

賭け分（チップ）は自身と所有する全ての奴隷の所有権並びに武闘大会参加資格。間違いありませんね？」

ヴァンサードは俯いたまま、僅かに頭を動かした。肩を落として力無く立っているその様子は見ているだけで惨めな気持ちになる。負けた側がこんな風になるのは当然のことと割り切るタイロンは心情を変えることなく事を進める。

「勝敗は春闘ルールに則った戦闘。これにより東龍斗選手の勝利という結果になりました。よってヴァンサード選手を含む２１名の所有権が龍斗選手に移ります。また武闘大会参加資格ですが、既に龍斗選手が持っているためヴァンサードの分は破棄失効となります。では……盟約神ミスラよ、契約神ヴァルナよ、汝らの名の下に結ばれし誓約、その御力を以て履行せしめん」

タイロンが読み上げていた、誓約内容が書かれた赤い紙。呪文と共にまた色が変わっていく。文字のインクが滲むように周囲に広がり、みるみるうちに真っ黒に染まっていく。文字が書いてあったところはインクを失ったかのように白くなる。こうして真っ黒な紙に白い文字の紙が出来上がった。

「これで盟約の履行は終了です。この紙にはもう何の効果もありませんので、煮るなり焼くなり好きにしてください。では、私はこれで。……さあ！！　第３回戦第６試合！！」

切り替えの早さに苦笑しながら、龍斗は手元の黒い紙を見る。こちらも笑みを消し、真剣な表情に切り替える。

（……２１人か、多いな。まあ、予想はしていたけど）

龍斗は振り返り、マーティス姉妹を視界に納めた。２人が同時に頷いたので、龍斗はヴァンサードに目を向けた。

「さて、と……」

第４１話：事後処理　１（後書き）

動きの少ないパートになります。会話中心ですぐ字数が↑

第４２話：事後処理　２（前書き）

台詞ばっかです。めっちゃ長いのあります↑

第４２話：事後処理　２

「さて、と……ヴァンサードだっけか。まずはあんたの処分からだ」
「う……うわぁぁ！！」
様々なことに耐えきれず、龍斗に殴りかかろうとするヴァンサード。だが。
「動くな」
龍斗の言葉で、本人の意思とは関係なしに動きが止まった。動けないなら口でと何かを叫ぼうとするも、
「黙れ」
龍斗に睨みつけられ声を失くし、どうしようもなくなってその場に崩れ落ちた。この時龍斗の藍色の眼は刃物の如き鋭さを持っており、表情に至っては全く感情の無い、人を人とも思わぬ冷酷なものだった。それを見た２１人は皆恐怖に体を震わせた。
（こいつの所有権を得る、即ちこいつを奴隷とすることには成功している。奴隷は意思に関係なく主人の命令に絶対服従、だからな）
冷静に現状を確認した龍斗はヴァンサードに言う。
「さて、まずはお前が持っていた奴隷についてだ。彼らをどうやって従えていたかを言え。当然、嘘偽りなく真実を、必ず喋ってもらう」
「……全員に『拘束の手枷』、それと……女１０人に『束縛の呪い』……」
呟くような声で命令に従ったヴァンサード。
「改めて聞くが、それらの引き継ぎは」
「さっきの履行の時に全ての権利が移っている。手枷も呪いも、全て」
「ふむ」
いったん会話を区切り、龍斗は彼の後ろに控える緊張した面持ちの２０人に目を向けた。ヴァンサードを含め、全員の両手首には黒

い革の腕輪がついている。これが『拘束の手枷』と呼ばれるものである。

左端から5人、これは決闘の中で龍斗と戦った者達である。フードを被っていた2人は普段からそうなのか、今でも被ったままだった。そこから何人か男が続く。尋ねてみると、護衛よりは荷物持ちとして従えていたという。そこから右端までの残りは全て女性だった。なるほど、欲に忠実との噂通りさっと見ただけでもそれなりの容姿と顔を持っている美しい女性ばかりであろうと予測できた。しかしその顔に生気は無い。龍斗の冷徹な表情を見たことも一因ではあるが、大きな理由はやはり彼女達の認識であろう。即ち性奴隷であるとの認識である。

「随分綺麗どころを揃えてるようだが。幾ら積んだ」

「……さあ……それなりにいい女なら、相場は……金５０から上くらいかと……少なくとも、俺が買ったのはみんな金１０から始まってたと思う」

基本的に奴隷の売買は奴隷商人との間で行われる。しかし女性奴隷の場合は非常に人気が集中しやすく、他と同じように扱っていたのではトラブルが続出する。そこで行われるようになったのが奴隷オークション。奴隷を買いたいと思う者を一堂に集め、その中で最高値を払うと言った者に奴隷を売る方法である。公には認められていないが、裏社会では定期的に、高頻度で行われているという。

そういった後ろめたい取引にカード払いは使えない。カードでの支払いは全て商人ギルドの経営する銀行が把握しているからだ。急に大金が動くと社会に何かしらの影響を与える場合があるので、事実確認を行うようになっている。建前上様々な国で人身売買は禁止されている。足がつくのを恐れて利用しなくなるのは当然の流れだった。故にこういった裏取引では現物、貨幣が支払い手段として使われる。金１０からとはつまり金貨１０枚、１００万ドルクから競

りを始めるという意味であり、今龍斗の前にいる女性達は1人500万ドルク以上の値打ちなのだという。

金額計算をしている間、何かを感じ取ったのか、背後から4つの刺さるような視線が当たっていたが気にしないことにした龍斗。しかし続くヴァンサードの言葉はそうもいかなかった。

「けど、ここにいるのはそれだけじゃない……平民共から奪ったのも数人――」

藍色の眼が鋭さを増した。本能的に感じ取ったのか、相手は身をすくめて縮こまる。

「噂に違わぬ外道だな。それと、その平民共より下の立場となったことを自覚しろ」

龍斗の言葉に、更に頭の位置が下がる。

「酒場で暴力を振るった挙句代金を踏み倒す、住民にいちゃもんをつけて金を巻き上げる、また家族を強引に連れ去り好き放題……その他諸々の悪逆非道、自分がしてきたことに間違いないな？」

「……はい……」

「ふむ……なら、もういい。お前、家に帰れ」

『……は？』

龍斗以外の全員が同じ反応をした。あり得ないことを聞いたという彼らの空気を他所に龍斗は続ける。

「ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン、お前に命じるのは2つだけだ。まず1つ、お前は自分の家に帰れ。2つ、自殺を禁ずる。誰かに頼んで殺してもらうのも禁ずる。死にたくなったら俺の所に来て懇願しろ。以上だ。それ以外は自由にして構わん」

あまりにも自由度の高い命令にその場にいるほとんどが理解出来ずただ呆然としていた。マーティス姉妹も、「あんな外道には処罰を与えないと」とは聞かされたものの、その内容については全く知

らされていなかった。
その空気に飲まれていないのは、発言した当人である龍斗。じわじわと顔に喜びを浮かべていくヴァンサード。そして、奴隷が並ぶ列の左端にいた、青い髪を持つ槍の男。この3人だけだった。
「理解したか？　なら、さっさと行け」
「は……は、はい！！　有難うございます！！」
龍斗に向かって勢いよく一礼すると、喜色満面の笑顔を湛えながらヴァンサードは出口へと走っていった。

「……理由を伺ってもよろしいでしょうか？」
「ん？」
ヴァンサードが出ていった後、レイアが重い口を開いた。
「その……あのような寛大な処置をした理由、です」
ミーアが21人を代表して発言した。だが龍斗はそれに笑いを返した。
「ククク、寛大、ああそうか、そう見えるな、うん」
「？　……どういうことです？」
「……流石ですな。処罰でしたか」
ここで口を挟んできたのは、左端にいた青い髪の男だった。全てを察しているようなその言葉に、龍斗は満足げに頷いた。そして未だ理解できていない全員に示すため、龍斗は姉妹に声をかけた。
「ではミーア、いくつか確認する。まず貴族とは、一般にどう思われている存在か？」
「金持ちで……プライドが高く傲慢です」
「ほとんどの者は自分が特別な存在であるとの認識を持ちます。また身分もそれなりのものを持っているため、市民を見下す者が多いです」
「レイアのそれも大事だな。でだ、プライドの高い貴族の事、当然保守的になっていくよな？」

「ええ。幾ら権力があるといっても王の裁き次第では地位の剥奪がありますので。更には他の貴族への体裁もあります。それ相応の器量や実力を示せない者は他の貴族に潰されることもあります」

「さて、ここで問題だ。国王主催の武闘大会、大衆が見ている前で反則まがいの手勢で決闘をし、挙句大敗してしまった人間を、貴族の家は温かく迎え入れてくれるだろうか？」

『――――！！』

姉妹は何かに気付いたような顔をした。２人が口を開く前に、龍斗が続ける。

「国を挙げて行われる舞台で反則まがいの卑怯な手を使い、おまけに大敗。あれだけの一般市民が見てたんだから当然世間では噂になる。悪い噂だな。そしたらどうだ？　家の名を汚す恥さらし以外の何物でもない。直ぐに他の貴族に知れ渡り、そうすれば奴の親は、いや一族が皆肩身の狭い思いをする。貴族としての面目丸潰れだ。このまま家が潰れちまうかもしれない。……その原因となった息子を意地でも擁護し、家が潰れることになっても家族として愛していこうという貴族がいると思うか？　ましてや奴は三男坊、長男次男はそこそこ慕われてるみたいだから、まあ、どう考えても家督は継げない。おまけに普段からの素行が悪いと評判だ。そんな悪評だらけの、面汚しの人間を家族として受け入れる器量があると思うか？

そもそも奴は奴隷に身を堕とした。平民すら見下す貴族の一家だ。奴隷を家族だと思うのか？　他にも仕えてる平民とか、あいつは今までそういう奴らにも暴挙を働いていたはずだ。今まで虐げられてきた奴らはあいつのことを許すと思うか？　答えは否だろう」

「……まさか、完全に孤立無援の状態に……？」

「でも、そんな状態、私だったら耐えられません。そんな、家族からも見捨てられた状態で……誰も助けてくれない生き地獄、そんな中で生きるくらいなら、死んだ方がまし……あ」

動揺しながらも必死に主張するミーアは、そこでもう１つのことに気付いた。

「そう、如何なる扱いを受けるか知らないが、どう転んでも今までのようにはいかないし、まともに扱ってはくれない。死んだ方がましだと思うだろうな。だが奴は死ねない。主である俺が、自らの意思で死ぬことを禁じたからな。それに恐らく一家の中ではもう既に三男ヴァンサードは死んでいる。わざわざ殺してやろうという慈悲もないだろうな」

世間から、他の貴族から、今まで虐げてきた者達から、更には家族からも白い目を向けられる。死んだ方がましだというのに、死ぬことすら許されない。何が寛大な処置か。死ぬよりも辛い八方塞がりの生き地獄の中に放り出しただけなのである。

（……死すら生ぬるいと感じる処罰……なんて非情な……）

無感情の冷酷な表情、その口だけが、全てを嘲笑うかのように歪んでいる。姉妹を始め、それを見た者全員の背筋が凍りついた。

第４２話：事後処理　２（後書き）

死ぬより辛い地獄……やですね、恐ろしい↑
ちょっと不安ですがこれで行きます。けど、前にも書いたように最終的な処分がどうなるかは決まってません。

第４３話：事後処理　３

「さて、一番の山を片付けたところでだな」
龍斗は残る２０人の奴隷を見渡した。実際に戦ったことのある者以外はその顔を見て再び固まった。今は普通の無表情だが、つい先程まで人を人とも思わぬ非情な顔、死すら生ぬるい罰を何でも無いように与えた冷酷さを披露している。いきなりそんなものを見せつけられて平気でいられる人間は少ない。まず抱くのは恐怖であろう。
そんな恐怖の対象が命令した。
「んじゃあ残ってる全員、目を瞑って手の平を上に。そのまま待機で、手に何か乗せられたらしっかり握るように」

マーティス姉妹にも手伝ってもらい、龍斗は彼らの手に何かを置いていった。何も見えないという恐怖を抱きながらも主の命令に従う２０人。全員が終わったところで、龍斗は目を開けさせた。
「さて……盟約神ミスラ、契約神ヴァルナの名において、我彼の者達の束縛を望まず、『解放（リベレーション）』」
龍斗の体を中心に展開された魔方陣から、白い糸のようなものが１０本伸びている。それを導火線に、龍斗の体から１０個の白い光球が女性たちの元へ進んでいく。やがてそれは彼女達の胸の中へと消えていった。
呪いによる束縛は相手の魂の一部を取り上げる契約だという。故にその契約を破棄するには、取り上げた魂を返せば良いのだ。
「レイア、ミーア」
『はい』
呆然とする奴隷達の前に龍斗、レイア、ミーアの３人が対峙した。
「其の速きこと風の如し、辻に吹きて斬り裂かん」
『風の精霊シルフよ、その風を我に与えよ。風の刃を与えたまえ』

呪文は違えど効果は同じ。同時に魔法が発動した。
『鎌鼬（ウィンド・カッター）』
奴隷達は通り過ぎる風を感じた。攻撃魔法を向けられたために思わず目を閉じる。しかし、風によって作り出された真空の刃は、彼らの命を狩ることはなかった。狩ったのは、彼らを縛る『拘束』の源。
「……無い……手枷が、手枷が……！！」
目の前で起こったことが信じられない、驚きと喜びとで興奮が増していく元奴隷達。龍斗はその様子をただ無表情のまま見つめていた。

やがて彼女達は次々と第2ホールを出ていった。始めはやたら感謝の言葉を述べていたり、手に握らされた物、金貨2枚を畏れ多いと龍斗に返そうとしたり、少々騒がしくなったのだが、龍斗が全く応じなかったので直ぐに治まった。今残っているのは、第3回戦第5試合で戦ったあの5人だけ。
『本当に、有難うございました！！　そして本当に申し訳ありませんでした！！』
全員が頭を下げるその様子に龍斗は苦笑した。
「顔上げて下さい。情けは人のためならず。人のためじゃない、自分のためにやったことですし」
「と、言いますと？」
青い髪の男が疑問を返す。
「なに、簡単な話ですよ。自分は奴隷など集める趣味は無い。持ってても意味がないから解放したんです。ま、ただ解放しても生活していけないから幾らか渡しといた。それだけです」
「……なるほど」
何やら考え込む様子の男に、龍斗は微笑を浮かべながら言った。
「まあ、でもあんたら相手は正直苦労した。奥の手使わないといけ

なかったし。心理的には負けた気分だ……特にあんたは格が違った」
「……恐悦至極。強制とはいえ数年間共に戦った仲ですので、それなりのチームワークがあるのですよ。皆、元は力のある冒険者だったとかいう話は小耳に挟んでおります。それと私の場合、格というよりも鍛え方が違ったというだけです。……私は元々、オルドラン家私軍の一兵卒でしたから」
その事実に誰もが驚いた。苦笑しながら男が続ける。
「私がまだ軍に入って間もない頃、ポツンと1人膝を抱えているあの方を見つけたんです。今でこそ悪評だらけですが、昔は長兄次兄よりも出来のいい子と言われていたんです。お2人はそれが面白くないので、弟君に冷たく当たり、あまつさえ暗殺まで企てたとか」
確証がないためにどうする事も出来ず、護衛としてこの男が始終傍についていたという。次第に言葉を交わすようになり、その仲は友人関係と呼べるまでになった。
「ある日言われました。『血の繋がった兄が俺を殺そうとしたことがある。信じられるのは唯一の友であるお前だけだ。死ぬまで俺を守ってくれ』と。私はそれを了承しました。そしてそれを実行するために自らあの方の奴隷となりました。軍属では何時配置換えされるか分かりませんしね。……あの方の蛮行も、元は兄たちから身を守るためのカムフラージュでした。いつの間にかそんな幼い頃の事をすっかり忘れて、ただの愚か者になってしまいましたが……」
「……愚者の振りをする有能な統治者の話は、祖国大和で幾つも聞いたことがある。だがそのまま愚者に成り下がるとは、本末転倒だな」
ええ、と一言呟いた青い髪の男は姿勢を正して龍斗に向き直った。
「ですので、1つお願いがあります……私があの方の下に戻ることをお許し頂けませんか？　こうなった今、せめて私だけでも……それに私は、友人の頼みを反故に出来るほど厚かましい性格ではありません」
しばしの沈黙の後、龍斗はゆっくり首を振った。

「それを決めるのは俺じゃない。既に俺は全員を解放した。もう奴隷じゃないんだ。自分の意思で動く自由がある。自分がどうするかは自分で決めてくれ。ただ……それは奴にも当てはまる。あんたが付いていてなお奴が望むのなら……」

「……承知しております。本当に、有難うございました」

深く龍斗に一礼した後、男はホールを出ていった。

「あれは蜘蛛の糸かね？　過去を思い出したところで、良心の呵責が更に拍車をかけるかもしれんな……まあ、俺には関係の無い話だ」

実際、遠くない未来の話、ヴァンサードは龍斗の元を訪れることになる。

第４４話：事後処理終了

青い髪の男が去った後、第２ホールにはまだ４人の元奴隷が残っていた。緑色の髪を持つ大男、彼は第５試合の時に斧を振り回していた者である。その横に並ぶのはフード姿の２人。片方は箙（えびら）と呼ばれる矢を入れるための籠を背負っている。となればもう１人の方がダガーを使っていた方だと簡単に予想がつく。極めつけはローブ姿の赤い髪を持つ少年、その身長とほぼ同じくらいの長さの杖を持っていた。

「あんたらも、もう好きにしていいぞ」

未だ解放されたことに実感が無いのかと思い、龍斗がそう言った。だがそういうわけではなかったようだ。

「いや、それは嬉しいことなんだが……その……」

「僕達、解放されてもどうする事も出来ないというか……」

「どういうことだ？」

言葉を濁す両端の２人に、怪訝な表情を見せる龍斗。４人共が気まずい雰囲気になる中、やがて少年が諦めたように溜息をついた。

「ハァ……驚かないでもらえますか？」

そう前置きすると、少年と大男はそれぞれ隣にいる者のフードを外した。その顔が露わになった途端、一歩後ろでマーティス姉妹が息を飲む音が聞こえた。龍斗も流石に目を見張った。

（まさか……）

箙を背負っていた方は少女だった。赤みがかった栗色の髪はショートカットに整えられ、ぱっちりと大きな目は緑色をしている。そしてその額には、円錐形のこぶのような物、角と呼ばれるものが存在していた。

ダガーの方は少年だった。龍斗と同じ黒い髪に、獣のような瞳の色も黒だった。しかしその頭には、黒い三角形の者が２つ、せわしなくあちこちに向きを変えていた。それはどう見ても動物の耳であ

る。
　龍斗は記憶を探っていた。そのような姿を今までの人生の何処かで見たことがあると。やがてそれが何だったのかを思い出した。伝承をまとめた、簡単な絵の中である。思わず口から漏れていった。
「鬼に……犬神？」
「俺は犬じゃねぇ！！　狼だ！！」
　その呟きを拾った獣耳の少年が牙を剥いた。角のある少女はその声に驚き少し涙目になっている。大男が獣耳少年を抑えに入り、残る魔術師の少年が説明した。
「彼女はマルム、１４歳の少女で鬼人族です。獣耳の少年はガロウ、同じく１４歳で狼の獣人族。ガロウを押さえてる男はジャック、５３歳のドワーフ族。かくいう僕はハーフエルフのベン。実はこれでも２０歳です。……私達は皆人間族じゃない。『亜人』なんですよ」
　――亜人。人間に近い容姿を持ちながら、人とはまた違う種族。そして人間には無い特殊な能力を生まれつき持っている種族の総称。
「その内の４種が今ここにいるんですよ。まあ、僕は半分だけですが」
「……亜人、か……」
「……以外に反応薄いですね。普通は皆さんもっと驚くんですが。後ろのお２人さんのように」
　大して表情を変えず、口元に手を当てて考え込む龍斗に思ったことをぶつけたベン。龍斗はその声に気付いて応答した。
「いや、驚いてはいるが、元々顔には出さない性質でな。……それに……そう呼んで良いのかわからないが、多分俺は既に亜人を知っている、かもしれない」
「ほう、そうなんですか」
「１つは大和……故郷で見た伝承をまとめた本の挿絵。妖怪の姿として描かれていた中に鬼や犬神ってのがあった。それはその少年少

女と似たような姿だった」
「俺は犬じゃねぇってんだろ!!」
ガロウがキレて騒いでいるが、誰も相手にしなかった。
「1つはオリジアだ。友人が警備隊に勤めてるんだが、今思えばその仲間に、亜人がいたんじゃないかな。それともう1つ」
龍斗はここで言葉を切った。眉間に皺を寄せ、額に手を当てている。その様子に首を傾げる4人。暫くして龍斗が言った。
「もう1つ……物憑き、病みたいなもんだが、それに負けた者の成れの果て」
『――!!』
マーティス姉妹は息を飲んだ。対して4人は訝しげな表情になった。龍斗と同じように眉間に皺を寄せている。
「……病で亜人になる？　聞いたことないなそんなの」
「ええ。亜人というのはれっきとした種族です。突然変異種だとか病の後遺症だとかじゃない。人間がそうであるように、亜人という種族なんですよ」
「ム……分かった。すまんな、この話は忘れてくれ」
首を横に振った龍斗。もしかしたら、物憑きについて何か分かるかもしれないという龍斗の期待は外れた。龍斗は気分と共に話題も変えた。
「そういや、さっきの解放されてもどうしようもないってのは？」
「……ご覧の通り、亜人は人間と違う特徴を持っています。それ故に何処に行っても奇異の目で見られます。人間は人と違うってのに敏感ですから。何処に行ってもあまり良いようにはならないんですよね」
「そう、だから亜人の集落を出ていっちまうとほとんど職に就けない。けど……オリジアで働いてる奴がいるのか、そこには望みがあるかもしれねぇ」
「それならあたし、道分かりますよ!!　途中には鬼人族の集落がありますし、砂漠の中には亜人のオアシスがあるって話も」

「なるほど……よし。すみません、貴重な情報有難うございます。僕達は取り敢えずオリジア方面に向かいます」
「そうか、じゃあ元気でな」
口々に礼を言いながら、4人はホールから出ていった。その途中でガロウが立ち止まり、龍斗の方を振り向いた。
「……狼族は受けた恩は必ず返す。何かあれば力を貸す」
それを聞いた龍斗は鼻を鳴らした。
「頼めることがあったらな、犬っころ！！」
「犬じゃねぇよ！！　ちっ！！」
そう叫んだ後、先に行った3人を追いかけるように走っていった。
その時、第6試合の終わりを告げる進行役の声が聞こえてきた。
「さて、後2試合見ときますかね。行きますか」
『はい』
そして第2ホールには誰もいなくなった。

第４４話：事後処理終了（後書き）

会話ばっかりでした。

第４５話：再来

第３回戦の残り３試合は１日で終わった。第４回戦からは選手の体調管理のためという理由でインターバルが挟まれる。インターバルは第４回戦が始まる前に３日、その次の準決勝の前に３日、更にその次の決勝の前に３日、と大会規定で定められている。その３日の間、龍斗は野次馬に絡まれる以外は至って普通に生活していた。

そして当日、第４回戦第１試合が始まった。

「お待たせいたしました！！　第４回戦第１試合を始めたいと思います！！　まずは選手の紹介からいきましょう。まずはこちら、召喚魔法を得意とし、毒によって相手をじわじわと追いつめる、何ともサディスティックな魔性の女！！　その名も【毒呼び】マリアーナ・リーシャ！！」

マリアーナと呼ばれたのは魔術師の正装ともいえるローブを身につけている女性。しかしマントのように前を開けているために体の線が露わになっている。また、体にぴったりと張り付くような服装が大きな胸や細い体をより強調している。腰まであるピンクの髪に、妖しい光に包まれた青い目。その姿は正に妖艶の美女と呼ぶにふさわしい。

「対するは、水を自在に操り、宙を駆けるという驚異の技を披露してくれた男！！　果たして、今度はどんな奇跡を見せてくれるのか！！　【水精の天馬（ウンディーネ・ペガサス）】東龍斗！！　奇しくも魔術師対決の再来であります！！」

腕を組んだ黒い髪の青年は相変わらず大和の普段着である和服姿。鼻の下を伸ばすことなく、藍色の眼で平然と相手を見据えていた。

「……毒って目の毒って意味か？」

その声を聞いたマリアーナが妖しく笑った。

「フフフ、あたしを見て開口一番がそれかい、面白い奴だね」
その後は何も言わず、ただ互いの視線がぶつかり合うのみ。図ったように進行役の声が響く。
「それでは第４回戦第１試合、スタートです！！」

「侵略すること火の――」
「おっと、させないよ」
龍斗が術を仕掛けようとした途端、マリアーナの動きを察知して後ろに跳んだ。小さな爆発音の後、さっきまでいた地面に何かが埋まるような音がした。その音に違和感を覚えた龍斗は、マリアーナに目を向け、そして驚いた。
「……何であんたがそれを持っている」
マリアーナは杖のようなものの先を龍斗に向けていた。しかしそれは金属の筒と木で出来ており、しかも筒からは微量ながら白煙が出ていた。それを見た時、龍斗は目を疑った。それはかつて大陸で発明され、魔法が普及してからは使われることが無くなったと言われている物。故郷大和においても、戦無き今の世において、ある集団以外は主戦力としていない武器。
「何であんたが、鉄砲を持ってるんだ……」
そう、マリアーナが手にしているのは紛れもなく鉄砲、火縄銃と呼ばれるものだったのだ。マリアーナがまた笑みを浮かべた。
「ほう、こいつを知ってるのかい？　こいつはね、『シーカース』とかいう傭兵団の誰かが置いてったもんでね。中々使えるもんだからそのまま使ってるのさ。それより気ィつけな。あたしの本分はこいつじゃないよ？」
その言葉に気付いた龍斗は足元に目をやった。弾丸が撃ち込まれたところを中心に彼の足元まで魔方陣が展開されている。危険を感じた龍斗は更に下がり距離を取る。
「その弾丸には召喚魔法の魔法陣を凝縮して詰め込んである。撃ち

出せば着地点で陣を展開、そして魔物の召喚に入る」
その言葉の間に魔方陣の効果が発動、陣の上に巨大な蜘蛛が姿を現した。異常な彩色で見るからに毒々しいこの蜘蛛は、たくさんある目全てを使って龍斗を見ていた。マリアーナが何かを言ったが、龍斗はその内容を聞き取る余裕などなかった。第六感の赴くままに横に跳ぶ。先程までいた場所を見てみると、蜘蛛が吐き出した毒によって地面が白煙を上げていた。
（……おいおい……）
頬を伝う冷や汗をぬぐい、手印を組んだ龍斗。再び飛んでくる毒を避けながら呪文を唱える。
「其の速きこと風の如し、『天駆翔走』」
言うが早いか宙を踏み込み、衝撃波と風によって体を跳ね上げた。そこに大地があるかのように、縦横無尽に宙を走り攻撃を避けていく龍斗。その間にもまた別の手印を組む。
「動くこと雷霆の如し、其は大地を穿つ災禍、『轟雷』！！」
黄色い魔法陣から放たれた雷は、音を轟かせながら毒蜘蛛の頭を貫いた。気絶でもしたのか、胴体が地面につく勢いで砂煙が巻き起こる。それを見た地上のマリアーナ、一瞬だけ目を見張り、そして楽しそうに笑みを浮かべた。
「フフフ、まさか一撃とはね。でも、まだまだこれからだよ」
彼女の銃が2、3度乾いた音を響かせる。再び魔方陣が展開し、今度は複数の毒蜘蛛が出現する。
「ちっ、まだ出てくるか。この――」
〈さあて、そろそろ期限切れだぜ〉
「――！！」
前触れもなく脳内に響いた声と、それに伴う強い頭痛。突然のこ

とに集中が切れてしまい、同時に術の効果も切れて龍斗は地面に落下した。幸いだったのは地面まで数mと比較的低い位置にいた事。そのお陰で、地面とぶつかってもさほどダメージを受けなくて済んだ。丁度毒が飛ばされるところだったので、観客は避けるためにわざと術を解除したのだと思い込んだ。だが実際に戦っている相手の目は誤魔化せない。マリアーナは驚いていた。

そうしている間も龍斗の苦痛は続く。手を額に当てて痛み、そして声に耐えながら考える。

（くそっ、こんな、時に……取り敢えず、ここに、居続けるのは駄目だ……）

頭の中に響く声が外に出ないようにだけ気をつけながら、龍斗は何とか声を絞り出した。

「……どうやら、毒にやられたようだ。これ以上、戦闘は……無理だ、降参する。そういうわけで、俺はさっさと出てくわ」

「え、あ、ちょっまっ」

慌てるマリアーナには目もくれず、龍斗はグラウンドから退場した。

『龍斗様、一体何が！？』

誰もいないホールの中、姉妹が龍斗に駆け寄った。しかし龍斗は手を広げ、暗に来るなという意思を伝える。

「期限切れだ……物憑きがまた来やがった」

『！！』

姉妹の顔が目に見えて青くなった。２年前にも彼女達は物憑きを見ている。そしてそれを抑えるために失血死寸前になったことも。しかし、今の龍斗はあのころとは違っていた。懐から一本の簪を取り出すと、それをミーアの手に乗せた。次いで首にかけていた貝の飾りがついたネックレスをレイアに渡す。

「それは妹と、母の形見だ。父と祖父は留守番か……そいつを持っ

て待ってろ。……くっ、何、前の時のようなことは絶対にしない。……家族の元……帰る場所があるからな」

その言葉に目を丸くした2人。何か言いたげな様子だったが、やがて口を閉じた。強い意志を瞳に宿し、覚悟を決めた顔で龍斗に告げた。

「分かりました。ご武運を」

「……待ってますから。ずっと」

龍斗は頷き、コロッセオを出て宙へと駆け出した。あっという間に城壁の何倍もの高さにまで駆け上がり、人気のない森の方へと走っていく。

〈おいおい良いのか？　あんなべっぴんさん泣かせたままでよー〉

欲丸出しの響きを持つ声が響いた。その声に、眉間の皺が更に深くなる。

「償いはする。まずは貴様だ……今度こそ、完全に決着をつける」

第４５話：再来（後書き）

というわけでおそらくこれが２０１１年最後の更新です。
ここまで来れたのも読んでいただいてる皆様のおかげです。有難うございます。

では皆さん、良いお年を。

第４６話：森の中

街と街とを繋ぐ道。地面を掘り、しっかりと踏み固められたそれが唯一人の手で造られたもの。それ以外はほとんど人の手が入っていない自然そのままの森の中。ほとんど、というのは冒険者という職に就く者達が森の中に入っていくからである。ある者は野獣、魔物の討伐、ある者は薬草などの採取、ある者は盗賊の探索と、それぞれが受けた依頼（クエスト）をこなすために自然の中へと足を踏み入れる。しかし、そんな冒険者ですら一定以上の深さに侵入することを控えている。その理由として、奥に行けば行くほど野獣や魔物の出現率、また現れる数が多くなることが挙げられる。場所によっては深いところほど強力な魔物が現れるというところもある。

もっともそれは別の所の話。この森に生息しているのはワイルドボアやハウンドドッグといった低級の野獣のみ。よほどのことが無い限り１人で十分相手出来るし、深くまで行っても大して何かがあるわけでもない。この森の奥地に人が入らない理由、それは単に無益だからである。

そんな森の奥深く、冒険者ですら入らない奥地を１人の女性が歩いていた。左肩には矢を入れる箙をかけて、森の中でも扱いやすい小さめの弓に右腕を通し両の手を空けている。整備されていない獣道はデコボコになっている。その上を行く彼女の胸は揺れることなく形を保っていた。すらりとした四肢や引き締まった腰回りなど見事な容姿の持ち主である。惜しむらくはその服装だろうか。白いシャツに臙脂色の着脱が容易な上下。街ではジャージと呼ばれているその服装が馴染んでいるということは、彼女には美意識というものが無いと思われる。

そんな彼女の真紅の目に異様なものが移った。短弓から腕を抜き、

1本の矢をつがえて慎重に近付く。それは木の傍にあった。猪の死体かと思ったが、布に包まれているように見えたことで違うと判断した。よく見れば人の形をしていた。そこらでは見たこともない地味な色の上下を着たその男は、黒い髪を持っていた。そして……

「――！！」

彼女は直ぐに脈を取り、呼吸音を確認した。気を失っているだけだと分かり安堵の溜息をつく。顔を引き締めると、彼女は男を腕に抱えて走り出した。体格から考えると彼女に男を持ち上げるだけの力が出せるとは思えないのだが、彼女は実際にやってのけている。ひたすら走る彼女の心中はただ1つ。

――同胞を、助けなければ

「お、お目覚めかい？」

男が目を覚ましたのに気付くと、ジャージ姿の女性が声をかけた。容姿が無ければ少年の声ではと思ってしまうような、女性にしては低い声である。男が無理に体を起こそうとするのを見て、慌てて止めに入る。

「おいおい、無茶すんなよ。何があったか知らねぇが、あんた、森の中でぶっ倒れてたんだぞ。まだ体力が回復してねぇ。大人しくしてろ」

それを聞いた男は体の力を抜いた。暫く目を閉じた後、再び男は女性の方を見た。その目は驚きで大きく見開かれている。

「あんた……鬼、いや違う、鬼人族って奴か」

白い肌、ショートカットに整えられた艶のある赤い髪。吊り上がっている真紅の瞳は、その片方がほとんど髪に隠れてしまっている。

そしてその前髪の間からは、2本の角が顔を出していた。
「ああ、ここは鬼人族の集落さ。俺が倒れてるのを見つけて、家(ウチ)まで運んできた。つーかよ……あんたも鬼人族(どうほう)だろ。何処から来たのか知らないけどさ……あ、自己紹介がまだだったな。俺はナツキってんだ。あんたは？」
「……東龍斗。和名だ……すみませんが、手鏡とかありますか？」

眉を顰め、ゆっくりとした動作で自分の額に手を当てた。その様子は、ナツキから借りた手鏡にそのまま映っている。龍斗の黒髪の間からは確かに2本の角が顔を出していた。手で触れみると、骨でも触っているかのような硬い感触が手の平に伝わってくる。
（参ったな……物憑きが身体に影響を与えてきてるか……）
龍斗は眉間に深い皺を刻んでいた。今までに数回、物憑きを経験してきたが、自分の容姿に影響が出たことなど記憶にない。もっとも、激しい痛みに苦しんでいる途中、またそれに耐え切った後にそんなことを気にするような余裕などなかったのだが。
（2年間押さえつけていた反動か、見た目から変化させて心理を攻めようとしているのか……今は大人しくしてる、のか？）
流石に物憑きに関しては不安要素が多い。時には理性や自我を失うこともあるからだ。なのでナツキに確認を取る。
「一応確認したいんですが……俺がここに来るまで、来た後、俺が暴れたり貴女を襲おうとしたりしたなんてこと、ありました？」
「プッ、ハハッハハハ、いきなり何をっフフ、あんたはついさっきまでずっと大人しく寝てたよ。それに俺を襲う？　面白い冗談だ。あんたも知ってるだろ、鬼人族はこう見えて屑(くず)の人間共よりも力が強い。女でも魔物と素手でやりあえるくらいだ。あんたが襲ってきたって返り討ちにできらぁ」
そう言って豪快に笑い飛ばされた。男勝りなその性格は女性としてどうなのか、という疑念が頭をよぎったが、今はそれどころでは

ないと首を振る。そして物憑きが襲ってくる中で誰かがいる場所に自分がいるという状態が最も危険であると判断した龍斗は、自己回復魔法により魔力を体力に変換し、ベッドから起き上がった。静止の言葉を言われる前に、低い声で彼女に告げた。

「……ナツキさん、助けて頂きありがとうございました。ですがこれ以上ここで厄介になっているわけにはいきません。このままでは多大な迷惑をかけることになる……何より、俺は鬼人族じゃない。俺はれっきとした人間だ」

第４６話：森の中（後書き）

明けましておめでとうございます。思ったより早く書けたので予約掲載をば。

本作品を応援して下さっている皆様、いつも本当にありがとうございます。拙い作品ですが、２０１２年もどうかよろしくお願いします。

第４７話：鬼に金棒

「……俺は鬼人族じゃない。俺はれっきとした人間だ」
「なっ……！！」
驚きのあまり棒立ちになるナツキ。その身長は龍斗より少し低いくらいだったが、龍斗の身長は身の丈六尺、１８０？であるためかなり大柄である。その様子を冷めた目で見る龍斗。
「おいおい、冗談だろ？　大体、それならその角は何だってんだよ」
「……恐らくは物憑きの仕業……つっても分からんか。亡霊（ゴースト）に憑りつかれるような感じに近いか。とにかく、鬼が俺の体を支配しようとしてるんだよ。角は見た目だけのようだ。魔力を使ってるらしい……」
龍斗は目を閉じ、頭の上にある２つの物に集中した。指摘した通り魔力の気配を感じ、それを腹の下、丹田に下ろすよう念を出す。魔力が丹田に納まったところで、片手を額にやり、もう片方の手でそれを映しながら角が消えたことを確認する。
「この通りだな。あんたら鬼人族には出来ないよな、角を消すなんてことは。出来たらあいつはフードなんか被る必要が無いか」
「……確かに角は種としての特徴でいじれるもんじゃない。いや、そんなことはどうでもいい。人間だってんなら……てめぇは敵だ！！」
ナツキが大きく振り抜いたその腕は軽い音を立てて空を切った。攻撃までの隙は龍斗が避けるのには十分すぎるほどにあった。龍斗はそのまま数歩下がり、木枠の窓から身を投げ出した。壁に開いているその穴を閉じるための板がつっかえ棒をして押し上げてあったのだが、龍斗の重みで棒が外れた。それを回収しながら上手く身を運び、出来るだけ衝撃を緩和して着地した。
と、その時、龍斗の頭上で何かが弾ける音がした。目を向けた瞬間、何かが落ちてくるのを捉え慌てて前に転がる。しかし数瞬遅か

った。液体だったらしく、最後まで残った片足に被ってしまった。
上を見ると、赤髪の鬼人が手で板を押さえながら声を張り上げていた。
「敵襲!!　敵襲!!　人間の侵入者だ!!」

集落の反応は早かった。声を聞きつけた鬼人の男数人が武器を手に龍斗を囲んだ。既にこの時点で１０人と対峙していた。加えて。
「ぐっ……」
〈おおう、いいねぇ、殺気立ってらぁな。殺せ殺せ!!　血祭りを見せろ!!〉
周りの殺気に当てられて己の中の敵も目覚めてしまった。
（……己の中すら敵とは……厳しすぎる……!!）
木の棒で空を切った。その音に一瞬ひるんだ鬼人達だったが、直ぐに気を取り直し龍斗に襲い掛かる。メイス、槍、ハルバード、フレイル、果ては農具の鍬やショベルなどが龍斗に向かって飛んでくる。無意識に発動した『即応の霧』で攻撃の軌道を読み、あるいは強化魔法で強化した木の棒で軌道をずらしながらその全てを避けていく龍斗。しかし相手側の手数はどんどん増えていき、次第に龍斗の動きが制限されていく。
〈俺に体を預けろ!!　そうすりゃ全部一気に片付けてやるぞ〉
〈殺せ殺せ!!　お、女もいるのか〉
その間にも物憑きの声が脳内に響く。余裕が無くなった龍斗は一旦その場を離れることにした。
「……『砕岩衝』!!」
跳躍して目の前にいた相手に両足蹴りを食らわせる。発生した衝撃波に鬼人も龍斗も吹き飛んだ。なす術もない相手と違い、龍斗は後ろに宙返りしながら片手と両足で着地した。足元に目をやった龍斗は小指の先ほどの小さな石を幾つも拾い上げた。石を拾った手に魔力を通し、筋力を強化する。

「あっちだ！！」
「死ね！！」
誰かが大上段に構え、龍斗の頭上に振り下ろそうとした。感じ取った龍斗は手中の小石を親指で弾いた。その小石は相手の鳩尾に命中、鬼人はその攻撃に耐えきれず地面に崩れ落ちる。すぐ傍にいた数人にも石を飛ばし、手首や額に当てながら更に下がる。
忍として身につけていなければならない技術の１つに暗器というものがある。これは針や手裏剣、手甲、撒き菱など、所謂（いわゆる）隠し武器と呼ばれるものである。龍斗が使ったのはその内の１つ、『如意珠（にょいしゅ）』と呼ばれるもの。これは小さな鉄球や石を指で弾き飛ばし相手に当てるという技で、通常は当てても軽い牽制くらいにしかならない。しかし今龍斗は筋力を強化していた。当然弾く力が強くなり、それは即ち飛んでいく石のスピードや威力の向上に繋がる。魔法で強化という手段がある今、本気で弾き飛ばせば銃弾と同等、もしくはそれ以上の威力にもなりうる技なのである。
龍斗が使う得体の知れない技を続けざまに見せつけられ、警戒して距離を取る戦士達。そこに新たな戦士がやってきた。
「ったく、どいつもこいつも情けねぇ。たかが１人に何ちんたらやってんだ！！　下がってろ！！」
現れたのはナツキだった。片手に持って担いでいるのは、白い布を巻きつけた１ｍ以上と思われる鉄の棒。その表面には鋲が打ってあり、鈍器としての性能を引き立てている。それは金砕棒と呼ばれる武器だった。
（鬼に金棒、笑えんな……）
豪快なフルスイングで龍斗を狙うナツキ。避けられると直ぐに手首を返し、龍斗の頭の辺りに振り上げる。金砕棒は鉄の塊、よって大人１、２人分の重さがあるというのに、剣と変わらない速さで攻撃をしていた。一体、彼女の細い体の何処にそんな力があるというのか。龍斗は内心かなり焦っていた。
（強化系なら何とか使えるんだが、物憑きの声と頭痛のせいで集中

できねぇ、詠唱魔法は無理か……武器は無い、素手にしてもほぼ片手……）

攻撃を弾いた瞬間、頭に強い痛みを覚えて、体が揺れた。それを好機と見たナツキ、袈裟りをするかのごとく龍斗に金棒を叩きつける。避けることは不可能と悟った龍斗は、全力を以て防御に徹した。だが、強化魔法によって強化された木の棒はあっさりと折れてしまい、纏っていた魔力を金棒の軌道上に集めたのだが、その鎧も打ち砕かれた。最大出力で鋼の硬度となった肩口でようやく止まったものの、元は生身の肉体、ある程度のダメージが加わってしまう。その痛みも加わって、龍斗は片膝を地面についた。

「これで終わりだ！！」

ナツキが大上段に構え、全力で振り下ろそうとしたその時。

「えっ、何これ、何なの！？」

突然少女の声が聞こえたためにその場が固まった。声のした方を見てみると、龍斗の目には、数日前世話になったローブ姿の者が映った。相手の方も驚きで目を丸くしていた。

「なっ、なんで貴方がっ」

「……マルム、だっけか。悪いが、ここからどうやって出ればいい？」

第４７話：鬼に金棒（後書き）

親にＰＣ占領されました。主に年賀状関係で。それ故執筆が遅々として進まず。更には小説読んだりしてると……

まあ、不定期ですから↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0606y/

龍の逆鱗

2012年1月4日10時48分発行